

ローカル役でしかあが
れない

エゴイヒト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ローカル役を駆使する最強系転生者が千里山女子麻雀部に入部して、インハイで無双するだけの話。

目次

ルールを守って楽しく麻雀○	1
ぼくのかんがえたさいきょうののうりよ	
く	14
怜……病んでさえいなければ……	
25	
実践能力解析Ⅰ（2単位）	38
チート転生者に対する監督の心情を述べよ（配点：25点）	48
何で廊下に記者がいんだよ教えはどうなってるんだ教えは	66
先負	74
そろそろ狩るか……	86

感動的だな……だが無意味だ	103
毎回ダブルリーとか卑怯だぞ！↑	115
月の霊圧が……消えた……？	128
能力設定Ⅰ	146
（こいつ、直接脳内に……！）	153
藍染	168
小鳥谷藍という存在	181
有珠山高校エ……	194
取り消せよ……！ 今の言葉……！	208
守銭奴わからせ	221
ターニングポイント	235
ローカル役でしかあがれない	251

無限人和編

264

五分咲き

276

最後の一撃は、せつない。

292

もう全部あいつ一人でいいんじゃないか

な

303

ルールを守って楽しく麻雀○

小鳥谷藍こざやあいという名で生をうけた私は、これが二度目の生であることを知っている。そんな私の目から見ても、この世界はどこかおかしい。まず、麻雀というゲームが小学生にも浸透している。初心者は役を覚えるのに精一杯で点数計算もままならず、それを乗り越えても牌効率や筋といった定石が待っている。運が絡むとはいえ頭を使うゲームで、ここまでの市民権を得ているのははつきりいって異常である。

加えて、この世界には超能力が存在する。馬鹿げたことに、それは麻雀で使われている。テレビに映る異常な対局と、それを不正を疑うどころか当然のものとして扱う実況と解説。なのに超能力の存在を明示的に認めてはいない者が多数派である。かくいう私も、転生という非科学的現象の当事者のくせに、最初そんなオカルトあり得ませんは信じられなかった。

確率を無視した超次元麻雀。猫も杓子も麻雀しようぜ。牌と運氣だけが友達さ。雀士に生まれたからには、誰でも一生のうち一度は夢見る『地上最強の雀士』。

なんてのは冗談にしても、周りの熱にあてられて麻雀を試してみようと思った。たいして上手くはなかったが、前世でも麻雀は嗜んでいた。仲間内でやっていたのでルールはかなり適当で、ローカル役が入っていたが。

ともかく、小学生もすなる麻雀といふものを私もしてみむとてするなり。

結果、見事に友達を無くした。

春。全国の高校で新入生が入学してくるシーズンである。全国屈指の麻雀強豪校である千里山女子高校では、入部希望の新入生が部室の前に詰めかけていた。高校2年生にして帰宅部の私には縁のない話である。そのはずなのだが、今は部室に用があった。正確には、同じクラスの清水谷竜華さんに。

体験入部の対応で部員が駆り出されているのだろう。彼女を含めて、部活動に所属している面々（麻雀部に限らず）が放課後になるなりそそくさと教室を出て行った。

——あれ、清水谷さん携帯忘れてない？

初めに気づいた誰かがそう言った。机の上には携帯がポツンと取り残されていた。

まさかわざわざ置いていったわけでもないだろうし、すぐに取りに帰ってくるだろう。いや、あの様子だと下校するまで気づかないかも。気づいたとして、忙しくて戻っ

てこれないのでは。放っておくべきか、届けに行くべきか。

言葉に出さずとも、皆考えている事は同じ。どうする？と互いの顔を伺って、十数秒無言で凍り付く謎の空間が発生していた。

清水谷さんは誰にでも優しい性格と綺麗な容姿からクラスの人気者であるが、特別親交が深い者は限られている。まして新学年ということもあり、教室に残っているのはおそらくクラスメイトの域をでない者だけ。

やがて痺れを切らした私が立候補して、部室まで携帯を届けにきたのだ。決して友達が少ないからこういう些細なことをきっかけに新学年こそは友達を作ろうと涙ぐましい努力をしているわけではない（ぼっち特有の早口）。

部室は部員と入部希望者含めた数十名でござった返しており、パーティ会場もかくやという感じだ。人混みは部活動の説明をしているグループと卓に座って麻雀を打っているグループに分かれていた。清水谷さんと呼ばうと声をあげても、この喧噪に飲まれて消えるだろう。部室の前に立ってきよろきよろと探してみるが、この中から人を探すのというのは難しい。

「入部希望者やろ？ちようどよかった、今一人足りひんかってん」

「え、ちよ」

「一名様ご案内」

学ランに短パン姿の少女がこちらへやってきて腕を掴み、何故か部室の中へと引つ張る。もしかしくなくとも入部希望者と勘違いされてる？

「オレは江口セーラ、よろしくな」

「こ、小鳥谷藍です」

俺っ娘に連れてこられた卓には入部希望者らしき2名が座っている。よろしくお願ひしますと挨拶をされたので、思わずこちらもそれに応じる。

「半荘一回な」

そうこうしている内に卓に座らされていた。勘違いを正す頃合いを見失い、周りに流されるように山から配牌を取ってきてしまった。

人数合わせに一半荘ぐらい付き合っただけでもいいか。諦めがつくと頭がスツキリしてくる。あわよくばなどと考えていたが、元より麻雀部で忙しい清水谷さんと友達になるなど望み薄。直接返すことにこだわる必要はない。これが終わったら正直に話して、部員に預かってもらえばいい。

こうして牌を触るのは1年ぶりだろうか。麻雀で友達を失くした小学生以来、ネット

麻雀以外では自発的に麻雀をすることはない。それでも友人間で遊ぶとなれば『とりあえず麻雀』となることもざらで、誘われて渋々打つことはあった。高校生になつてからはそれも一緒に遊ぶというほど仲の良い友達がいないので、それすらめつきりなくなつた。これが高校生活唯一の卓に座つての麻雀になるのでは……。いやいや、今年こそは新しいクラスで友達を作るのだ。贅沢は言えないが、麻雀以外の趣味を持つ友達だとなお嬉しい。

「ツモ。2000・4000」

最初の和了はセーラだった。点棒を払つて、次の山が積まれる。なりゆきで麻雀を打っているが、そもそもなぜこんなことをしているのだろうと疑問がわいてくる。現役 of 麻雀部員と新入生の力量差はどれくらいか、体験入部では手を抜くのか。とりわけ気になるのは、体験入部でいきなり部員と打たせている事だ。

前世も今世も部活動に所属したことが無いので、部活動の普通というものはわからな
い。しかし前世で卓球部の体験入部に訪れた時は、最初にルールを教わり入部希望者同
士で実際にやってみるといふ段取りだった。いきなり経験者とさせてもお互いに気ま
ずいだけだろう。麻雀の場合は4人でやるものだから、一人ぐらい実力が突出してい
ても構わないということなのかな。いや、そもそも千里山ほどの強豪ともなれば麻雀部を
目的として入学するものが多い。こうして体験入部に来る人達に未経験者はまずいな

いだらうから、ルールや実力差の問題はないのかもしれない。

推測するに、この対局は見込みのある者を大雑把に探すことを目的としているのではないか。他の卓を見渡してみると、部員か入部希望者かは分からないが対局を後ろから覗いている者がちらほらいる。この卓の入部希望者の二人には緊張も見えないので、おそらく当人たちには伏せられているのだろう。とすれば、この麻雀部での将来が関わるかもしれない彼女らを邪魔するのも悪い。波風立てないようにしよう。

和了は控え、さりとて露骨な振込やオリは避ける。それを繰り返して南2局がちやうど終わった時である。

「あれ、小鳥谷さんやん」

振り返ると、尋ね人たる清水谷さんがいた。

「なんでここにいはるん？」

入部希望者はみな新入生である。部員でもないのにここで麻雀を打っている2年生は私以外にいない。クラスメイトである清水谷さんからその疑問が出るのは当然だ。というか接点ないはずだけどクラスメイトの名前全員覚えてるの……？

「あの、携帯忘れてたから届けようと思って」

携帯を取り出して清水谷さんに返す。

「あれ？ほんまやそれうちの携帯。持ってきてくれてありがとう」

眩しい笑顔と共に感謝された。さすがクラスのアイドル。これを拝めただけでも価値があったと考えよう。

「ええっ、じゃあ入部希望者やなかったんか」

「セーラおつちよこちよいやなあ」

「携帯忘れた竜華に言われたないで」

用は果たした。入部希望者でないとわかった以上、ここにいる意味もない。

「それはそうと、小鳥谷さんが麻雀するとこ初めてみたかも。ちよつと見せてもろてもいい?」

「えっ」

あとは清水谷さんに代わってもらおうかな、と思っていたのだが。途中退席は感じが悪いのも確かなので、希望とあればやるしかない。でも見られるのはちよつとまずいかもしれない。

「いいけど。……つまらないよ?」

結局うまく断る理由は思いつかなかった。あと2局。すぐ終わるし、何とかなるはず。

藍 北家 配牌

(①②③4赤56三四赤五七七北北)

うっ、よりによってこんな時に配牌聴牌。いやいや、まだ単なるダブリーの可能性だってある。ダブリーの確率が0.2%ぐらいだった気がするので、単なる幸運で出ることもないわけではない。

「っ」

後ろに立つ清水谷さんの熱い視線を背に感じる。見逃しなんて真似はできない。

セーラ 1巡目 打牌 (北)

まあ、出るよね。

「すみません、それロンです……」

「うそん!？」

「レシホ人和……」

『人和』。

鳴きのない第一巡で子が自身の自摸の前にロン和了をすることで成立する、一般に役

満とされる役である。必然的に子の役満直撃となるので32000点の放銃。25000点スタートの標準的な四麻だと大抵一撃で飛ぶことになる。じゃあ、役満放銃なんて無くすべき？

否、役満放銃は大抵の場合で過失である。例えば、九連宝燈なら染め手になるし国士無双や清老頭ならム九牌を集めるので、河から察知できる。大三元や小四喜なら役牌が生牌あるいは鳴いていることから気付ける。もちろん配牌が良すぎれば読めないことは稀にあるが。

しかし、こと『人和』に限っては過失は0である。

配牌からとりあえず不要牌を捨てようとしてロン。持ち点が32000点以上ない場合は飛び終了のラス確定。天和を喰らうほうがマシと思わされるくらいの理不尽だ。第一打ゆえ避けようもないこれは、もはや天災といつていい。そのためこの役は倍満や満貫として扱われることもある。だがそれ以前に――

「人和はなしですよ？ 8000です」

人和はローカル役でありそもそも採用されていないのが普通だ。これは前世でも今世でも変わらない。お手軽すぎる役、人和を筆頭とした理不尽な役、採用するとキリがない役満。ローカル役がローカルたる最大の理由は、採用するには何らかの欠陥があるからである。

「いやあ、珍しいですね」

少し喜ぶフリもして、誤魔化してみる。もちろん今回の和了はただの偶然ではない。狙ったわけでもない。

『ローカル役が成立する手でしか和了れないが、ローカル役の手になりやすい』

これが私の能力の一つにして、小学生時代に友達を失くした原因である。当時は自分の能力に気づかず、テレビで見た麻雀は高くて速い手をぼこじやか和了っていたのでこれが普通だと思いきんでいた。調子に乗って和了り続け、周りとの温度差に気づいた時にはもう遅かった。

南4局 親 入部希望者A ドラ〔北〕

藍 西家 一巡目

〔①⑤⑧②69一四八東西北白 白〕

よし、うまく作用してる。二連続でさっきのようなことになる可能性は低いが、どうせオーラスだし念には念を入れておいた。

『十三不塔』
シューサンブーター

親の配牌か子の最初のツモ時に手牌に刻子、順子、搭子がなく対子がひとつだけある状態で成立するローカル役満。

しかし例によつて採用されていないので、面子手七向聴、七対子五向聴と悲惨なことになる。メリットが皆無だからか、私はこれを100%狙つて出すことができる。

江口セーラ 33000

小鳥谷藍 28000

入部希望者B 27000

入部希望者A 12000

後ろの清水谷さんがどういう顔をしているのか分からないが、能力に気づかなければ確率の収束とでも思つてくれるだろう。

「ツモ、13000オール」

「ロン、20000は23000」

「ツモ、7000オール」

しかし、ラス目の親の和了が続いてしまう。次で終わるだろうという甘い見通しで、連続で『十三不塔』を使つてしまった。メリットが皆無というのは正確には嘘だ。原理は不明だが、運を溜めこむように次の手牌が良くなるというリターンがある。連続で使うと一回で満貫、二回で跳満、三回で倍満以上を狙える手という風にどんどん良くなる。あくまでも打点の最低保証が吊り上がるというもので、それ以上になることもかなりあ

る。が、和了が保証される能力ではない。そして重要なのは、打点が速度に勝手に変換されることがあるということ。

既に三回溜めこんでいるため、今能力を解除すれば倍満相当の手が入るだろう。それが速度として出れば、また人和が出ることもありえる。かといってこのまま続けるのもまずい。十三不塔であることに気づかなくても、先ほどから手が異常に悪いことには気づかれています。

十三不塔の確率はおよそ1万分の1と言われている。次も使えば四連続となり1京分の1。天和すら霞む確率である。

江口セーラ 31000

小鳥谷藍 26000

入部希望者B 22700

入部希望者A 20300

悩んだ末また『十三不塔』を使ってしまった。早く終わってくれという祈りが通じたのかそれ以上続くことはなく流局で終了した。

「それじゃあ、私はこれで……」

対局後の礼を終え、さっさと帰ろうとすると肩を掴まれる。

「ちよつと待ちいな」

額を汗が伝う。振り返ると、ニコニコと微笑む清水谷さんが立っている。しかしその笑顔から感じたのは眩しさではなく恐怖だった。

「小鳥谷さん、何か隠してるやろ？」

——これが私の千里山女子高校麻雀部との出会いである。

ぼくのかんがえたさいきょうののうりよく

全国高等学校麻雀選手権大会。通称インターハイ。全国の地区予選を勝ち抜いた5校が頂点を掴むべく争う暑い夏。今年で71回目の開催が、ここ東京で行われる。

2回戦で千里山女子高校と戦う相手が確定したインターハイ3日目の夜。宿泊室には千里山のスタメンが揃っていた。

「清澄と宮守、それに姫松かあ」

第3シードである千里山は、6日目が全国での初陣となる。つまりまだ丸2日以上余裕があることになるが、早速私達は1回戦の試合を見直して対戦校の研究をしていた。2回戦と準決勝、準決勝と決勝の間は短いので、準決・決勝進出校を予測して今の内に対策しなくてはならない。よって時間は貴重なのだ。

「いきなり大阪2校がぶつかるとか勘弁してえな」

先鋒、園城寺怜。千里山の二大エースの一角であり、一巡先を視る者の異名を持つ。元々エースは私一人だったのだが、部内で唯一私に黒星をつけたために怜との二大エースになった。私も大概だが、ベッドに突っ伏してぼやく姿からはエースの威厳をまるで感じられない。宮永さんや辻垣内さんを見ているだけにエースに対して幻想を抱いて

しまう。

「幸い、合同合宿で面識あるんで姫松のデータは豊富です」

次鋒、船久保浩子。千里山の情報分析班の彼女は、フナQの愛称で親しまれている。うちの監督愛宕雅枝の姪であり、丸眼鏡は愛宕一族の血を色濃く受け継いでいる証だ。いや、姫松の愛宕洋榎は眼鏡をかけてなかったな。

「せやけど裏を返せば向こうもバッチリ対策してくるってことやろ？」

中堅、江口セーラ。一年生の段階で次期エース候補と考えられていたが、怜と私の登場でその座を譲ることになった。しかしその実力は特待生の名に恥じず他校のエース格と比べて遜色ない。

一人称が『オレ』で、スカートを履くことを嫌がる。しかしインターハイの対局時には制服にさせられることだろう。

「藍はどこ注目してるん？」

副将、清水谷竜華。千里山女子高校麻雀部の部長。純粋な雀力だと部内一だと思う。気が付くと怜に膝枕をしている。何がとは言わんがデカイ。この世界はデカイ人が稀によくいる。特に麻雀界限でそれをヒシヒシと感じる。

「高校単位で見るなら姫松かなあ。結局のところ打ち方にクセがなくて順当に強いのが一番厄介だよな」

大将、小鳥谷藍。すなわち私。恐縮ながら怜と二大エースを張らせてもらっている。

順当に強いってのは、具体的に言うとは垣内さんみたいな打ち手を指す。姫松と言うと愛宕洋榎とか。デジタル打ちで強いってのは少し違う。オカルトに対する対処含めて、柔軟な打ち手ということだ。

「選手単位やと?」

「そりやもちろん、清澄の先鋒一択でしょ」

名前はたしか片岡優希だったはず。能力は誰の目に見ても明らかで、東場での早和りだ。

「南場は勢いが落ちてるし、さっさと東場を終わらせればいいだけちゃうん?」

清水谷さんはまだこの子の潜在的脅威を理解できていないようだ。たしかに能力の単純さゆえに対策もはつきりしているので、プロでさえ彼女を侮る者がいるかもしれない。

「清水谷さんはさ」

「また苗字で呼んでる。竜華でいいっていつも言うところに」

頬を膨らませる清水谷さん。麻雀部に所属して一年以上の付き合いだが、未だ私の中でクラスカーストの頂点というイメージが強く、つい苗字で呼んでしまう。その度にこうして機嫌を損ねてしまうのだ。

「竜華さんはさ」

「それ余計に変やない？」

「……竜華は、麻雀における最強の能力ってなんだと思う？」

麻雀で強さを語るのにさらっと能力という言葉が出てくることを異常と思わないのは、我々の間でオカルトの認知が浸透しているからである。私が入部した頃の頃はオカルトの存在は薄々感じていたが、はつきりと超能力呼ばわりはしていなかった。清水谷さんもオカルトの領域に片足突っ込んでるのにな。体温が分かるとかマジ人間サーモグラフィー。

「連続和了！」

「白糸台の宮永照と、藍先輩がそうですね」

フナQがタブレットを操作すると、テレビに宮永照の動画が映る。連続和了は彼女の代名詞とっていい。

「私も似たようなことよくやるけど、専門じゃないから穴だらけだよ」

「よう言うわ。謙遜も過ぎれば嫌味やで」

「いやいや、実際そこを突かれて怜に負けてるし。」

「話を戻すけど、連続和了は不正解だね。いや、現存する能力では最強かもしれないけど」

麻雀において、和了とは正義である。普通の麻雀ならいかに和了るかよりもいかに振り込まないかが腕の見せ所だが、和了れるに越したことはない。親で和了ればもちろん大きく点を稼げるし、子なら他家の親を流すことができる。手が安くても、他家の和了を阻止することは時に点棒以上の価値がある。こういう観点から見ても、連続和了は現存する和了系能力ではトップクラスの能力とっていい。しかしそれでも最強ではないのだ。

最強の能力を議論する上で避けて通れない対抗馬が、去年の天江衣のような支配系能力である。実際に和了系の能力と対局すれば、相性によつては封殺することも少なくない。加えて、『他人に和了らせず自分は和了る』を至上主義とするなら、現実には支配系の方がそれを体現している。しかしこれもまた最強ではない。

「必ず和了る!」

「叶える願いの数を増やすみたいな狡い答えやな」

「でも結局これに尽きると思うで」

わたしもそんなんあつたら欲しいわー、と怜。お前はもう十分強いやろ業突く張り、とセーラがツツコミを入れる。

連続和了は実在する中では最強だとしても、理論上最強ではない。和了系の極地として考えられるのは清水谷さんの言う通り『必ず和了る』だろう。一方、天江衣のような

支配系の極地を考えると、『他家を絶対に和了らせない』とかだろうか。和了られる前に和了ればやっていることは同じなのだから、明らかに和了系に比べて迂遠な支配系は最強の能力には不要というのが持論だ。だから『最強の能力とは何か?』という問いに対して『必ず和了る能力』という回答は、方向性はあっている。

そしてこの能力をより具体的かつ弱点を補う表現にすると――

『他のあらゆる能力の影響を受けず、必ず起家になり天和を和了り続ける』能力こそ、私は理論上最強だと思う」

それに比べたら私や宮永照、天江衣など雑魚同然だ。

「それはえげつないな。でも、そんな奴今までもこれからも存在せえへんやろ」

ちゆうかいてたまるか、とセーラは一笑に付す。

「……そういうことですか」

突然、フナQが何かに納得したかのような発言をする。彼女にはこの話の行き着く先が分かったようだ。

「あい、話が見えてこんわあ。……ふわあ」

「私も。最強の能力が藍の言う通りだとして、考えるだけ無駄やと思うんやけど」

一方、怜と清水谷さんは疑問を浮かべている。

「清澄の先鋒こそ、理論上最強に一番近いって藍先輩は言いたいんですよ」

「今大会はまだ誰も天和了ってないんやなかった？」

フナQがまたタブレットを操作して、片岡優希の統計データを映す。地区大会と今日の試合を見ても、彼女は天和を和了っていない。清水谷さんの言う通り、今大会ではまだ誰も和了っていない。

「うわ、何この子の個人戦の成績。予選1日目だけぶっちぎりやんか」

怜が見ていたのは個人戦予選の成績。予選の予選ってなんか分かりにくいな。確かに、微睡みかけていた怜が思わず目を覚ますくらいにはびつくりする成績をしている。東風戦だからね。2日目の本戦からは半荘だからガクンと下がってるけど。

「片岡はまだ一年です。来年、再来年と成長すればもしや……でことでしょう。実際、起家になる確率はほぼ100%です」

「そういうこと。それに、天和を和了るだけならそう遠くないかもしれないよ」

「そうかあ？」

「能力に関しては藍が一番見識あるし、うちは信じるで」

「でもそこまで言っておいて片岡さんと当たるのはわたしやねんな」

今はまだ速いだけだし、怜なら勝てるだろう。

「じゃあ、フナQは誰が手ごわいと思う？」

今度はフナQに質問する清水谷さん。一回戦で飛び終了を見せた竹井久、昨年度個人

戦6位の銘苅を一度も和了らせなかった白沢塞とかは、フナQも警戒するだろう。前者は打ち筋が能力性のものか不明だし、後者は十中八九能力だと思いが、全容が掴めないので私も対策を考えるのは難しい。

「私は宮永咲やと思います」

宮永……。宮永照と関係があるのかな。そんな子いたっけ？

「清澄の大将です。一回戦では回ってこなかったから印象ないでしょうけど……。藍先輩は当日までに地区大会の牌譜をちゃんと見てくださいね」

「他の子を気にしてる場合やないんちゃう？」

「揶揄うセーラ。フナQが言うならば強いのもかもしれない。

「どういう打ち手なの？」

「とにかく槓を多用して、嶺上開花で和了つとります」

嶺上開花で和了る、ときたか。さすがに見たことないタイプかも。多用ということは槓材を集めやすい、カンすると嶺上開花できる、といった感じの能力だろうか。

「私も似たような能力を持つてるけど、かなり限定的だからあまり好んで使わないんだよね」

清澄の大将の能力は私より嶺上開花に特化しているだろう。というか私って器用貧乏すぎないか。

「ほう。後で詳しく聞かせてください」

フナQが眼鏡が光ったような気がした。いや、そんなにたいしたもんじやないから期待しないでね？

あれこれ話しているうちに気づけば皆で対策を出し合っており、それをフナQがどこからか用意したホワイトボードに列挙している。

1. こちらがカンをすることで嶺上牌を奪う。

私の案。この案はこちらがカンでなければ話にならない。積材を揃えるスピードで真面目からやりあつて能力持ちに勝てるかどうか。加えて、能力の原理によつては無意味かもしれない。つまり、嶺上牌が見えている知覚系か、カンすると有効牌や和了牌を引くという自摸強化系なのか。能力の系統によつて通用するかどうか依存してしまふ点が問題だ。前者なら通用するが、後者には効かない。

2. 生牌を切らないことで大明槓を防ぐ。

怜の案。中盤以降は徹底的に生牌を切らないという戦略だ。自分視点二つ以上見えていない牌を切らなければ確かに大明槓による責任払いは無くなるが、自分の手牌も狭めてしまう。順子手に寄せればその狭さもわずかに緩和されるが、それでもまだきつい。それに根本的な話、暗槓へは何の対策にもなっていない。というか怜ならピンポイントで鳴く牌が分かるからこんなことする意味ないじゃん。

3. 他家と協力してドツ楨・バトルして四楨散了を意識させる。

セーラの場合。ネタ枠。いくら高打点が好きとはいえドラ増えまくってリスキーすぎるでしょ。1と同様の理由で狙ってできることじゃないし、他校が意図を理解して（あるいは理解したとしても）乗ってくるとは思えない。

「一番現実的なのは1やない？ マシってだけやけど」

「狙えたら狙うくらい気持ちで行きましょう」

「浩子、それ狙わんやつや」

今列挙したのは能力を使わなくてもできる対策。能力を使う方法なら二つ、いや三つは思い浮かぶ。でも実際は対策なしで真正面から戦うつもりでいる。こちらを妨害してくるわけではないなら、和了られる前に和了ればいいだけのこと。一応、様子見していくつかの策を試すぐらいはするけど。

「この手合いは私にとつては鳴だから問題ないかも」

「お？ ダジャレか？」

「違う」

意図しないダジャレで揚げ足取られると誰でもムカつく説、あると思います。

セーラはこんな風によく擲揄ってくるし、フナQは私を実験動物ばりに研究対象にしようとする。恰は清水谷さんがいない時に膝を枕にしようとしてくる（そのくせ67点

とか微妙な点数を付ける)し、清水谷さんは不意に距離を詰めてくる。千里山麻雀部は騒がしくて仕方がない。

……最初は渋っていたが、今では麻雀部に所属してよかったと思っっている。ここでは自分の能力を存分に発揮してもいいのだから。勝つことが正義な大会では、持つ者は遠慮なく能力を使っている。もはや麻雀ではなく異能力バトルと考えれば、遠慮もなくなるというもの。さすがにそこまで言うのは麻雀に青春をかける高校生達に失礼かもしれないが。

「私の能力知ってるでしょ？ 手牌に制限がかかる能力は対策しやすいんだよ。2回戦はできればそっちは使わないけど」

「竜華く、また藍が舐めプしようとしてるで〜」

「いや清水谷さんこれは監督とも話し合っただけで決めたことであって戦略的な意味が——あつ」

何より、部員という友達ができたこと。これに勝る理由はない。

怜……病んでさえいなければ……

「ほな、行つてくるわ」

「お願いします、先輩」

「無理せんといてな、怜」

「きばれよ」

「怜、気負わなくていいよ。いつも通りね」

ついに千里山女子の初陣の時が来た。清水谷さんの膝枕から起き上がった怜は、励ましの声を背に控室を後にする。

「インターハイ6日目、2回戦の第3試合は千里山女子と姫松高校の大阪の強豪2校が争う好カード！本日の実況は私、佐藤。解説は戒能プロです」

「グッドモーニング、です」

残された4人はモニターで観戦する。ただ応援するために見るわけではない。インターハイでは前後半のインターバルでアドバイスができる。前半戦を見て、前情報と齟齬がないか注意しなければならない。

「出場校の紹介です。まずは強豪真嘉比を抑えて2回戦に進出しました、岩手県代表宮

守女子。先鋒は小瀬川白望。続いて長野県代表清澄高校、片岡優希」

宮守女子は次鋒のエイスリン、副将の白沢塞、大将の姉帯豊音が要注意だろうか。清澄に関しては地区大会の牌譜も見て研究したが、初出場なのでどの選手も情報が少ない。特に次鋒の染谷まこ、副将の原村和は変な打ち筋はしていないので、良い成績を残している割に対策という対策はできなかった。だからこそ、フナQと清水谷さんなら互角以上に渡り合えると確信している。

「そして春季大会5位の南大阪代表姫松高校、上重漫」

姫松はほとんどの面々が合同練習で面識がある。上重さんを除いて、特徴的な能力を持つ打ち手はいない。エースの洋榎さんは戦い慣れているセーラが相手をするので、心配はしていない。セーラは私との対局で能力者への耐性はある程度できているが、洋榎さんには戦績は若干負け越している。

先鋒と大将戦ではこちらから対策するのではなく向こうが対策してくるだろう。私達はそれを見て、対策の対策を講じる形だ。

「迎え撃つ北大阪代表は前年度インターハイ3位、春季大会2位の成績を残し第3シードでの出場となります、千里山女子。先鋒は園城寺怜」

そして我らが千里山。千里山は怜と私でダブルエースと呼ばれているが、今年は3年生が4人で、その全員がエース格の実力を持つ。フナQも堅実な打ち手で、情報分析担

当としてのバックアップも優秀。自分達のことながら、隙のないチームだと思う。今年こそは団体戦で全国優勝を獲る、と監督や部員達の今年に掛ける期待は大きい。

「いよいよ、ステージA2回戦第3試合が始まります」

東1局 親 片岡優希 ドラ ①

さて。藍もフナQも片岡さんに要注意と言ってたけど、私がする対策はいつも通り。立直や和了の未来が見えたら、自分が鳴くか誰かに鳴かせてずらす。もともと、後者は他家の協力がある程度必要やけど。

「リーチだじえー!」

3順目でもうリーチ。予想はしていたけど、東発が最大の難所。疲労もごつつ溜まるわ。

怜 南家 手牌

④⑤⑦222589一二七八九 〔白〕

どのみち裏目を引かんように頻繁に未来視しているからそう変わらんはずやねんけどな。気力を削られるというか、気持ちの問題やねん。

瞳孔が開き、視界は緑に染まる。自摸る牌が手牌に乗る音、打牌音と擦過音が反響して聞こえる。

怜 打〔白〕

小瀬川 西家 打〔五〕

上重 北家 打〔白〕

片岡 ツモ

〔④⑤⑥②②③③④⑦⑦⑥⑦⑧〕 〔4〕

——視えた。

視界を染める緑は収束し、私の意識は現実に戻還する。

リーチ一発ツモ平和断么九一盃口の親跳。こんな和了らせるわけにはいかんわ。上重さんは私の白に合わせ打ちして放銃を避けようとしとる。ハナから和了りを阻止する気はなさそうや。一方、小瀬川さんのど真ん中〔五〕切り。明らかに意志のある無筋切りで、誰かに鳴かせてずらそうとしとる。逆にいえば、こちら側の鳴かせにも反応してくれるつちゆうことや。

小瀬川 河

〔西⑨〕

この河。普通なら巡目早すぎて何切れば鳴いてくれるんかさっぱりわからん。無理ゲーや。

怜打〔⑤〕

「チー」

小瀬川 チー〔横⑤⑥⑦〕

でも、視えた未来は一つだけやない。行動によつて変わる複数の未来、その一つに〔⑤〕を切ると鳴いてくれる未来が視えた。

「ツモー」

片岡 ツモ

〔④⑤⑥②②③③④⑦⑦⑥⑦八〕〔一〕

「リーチツモ平和、1300オールだじえ」

そして、どうあがいても和了られてしまうのは変わらんってことも知つてた。安目で済ませることができただけ御の字や。

「ダル……」

小瀬川さん、諦めてないとええんやけど。

「ここからは私の連荘で終わらせる。この試合に東二局は来ない！」

いや、それは流石に無理やろ……。と思うたけど、藍がトビ無しルールで下級生の部

員達相手に32連荘とかやってたな。途中から絶望通り越して意地でも阻止しようと躍起になってたから良かったものの、あんなことされたら普通は麻雀辞めてまうで。絶望与えてるはずの本人の方が顔色悪なつとったのはなんでなん？ 部内の練習でも日頃から派手な対局ばつかしとるから感覚麻痺してたけど、やっぱ藍はおかしいんやなくてあの時は再認識したわ。

東1局1本場 親 片岡優希 ドラ〔7〕

怜 1巡目 手牌

〔②③④12444568五白〕〔七〕

さっきのはただの精神攻撃や、そう思うことにしよう。気を取り直して、清澄の親を流すことに集中するで。とはいえ未来視をしても、1巡先では間に合わない可能性がある。今度こそはうまくいく可能性もあるが、さっきのように早い巡目では未来視をしても得られる情報量が少なすぎる。自分の自摸を見て手を作るという面では役に立つんやけどな。

体力温存したかったけど、仕方がない。童華達には内緒で藍と泉に協力してもらった特訓、早くも活きそうやわ。

ダブル、2つ先へ——

再び視界が緑に染まる。しかし今度は見える光景が罅割れていて、私自身がダブって見える。

怜 打〔白〕

小瀬川 打〔西〕

上重 打〔南〕

片岡 打〔②〕

怜 自摸〔7〕 打〔1〕

小瀬川 打〔発〕

上重 (自摸切り) 打〔南〕

片岡 リーチ 打〔横5〕

怜 自摸〔①〕

清澄が3巡目にリーチ。前巡に〔②〕を切ってる。ここを鳴くしかないか。流石に2巡先となると起こりうる未来の可能性が一気に増えるから、複数の未来を視ることはできない。鳴きや重なりを考慮しない手牌の切り方だけで計算しても、14の2乗で196通り。組み合わせ爆発ってやつやな、知らんけど。

「チー」

怜 チー〔横②③④〕 打〔一〕

これで、自摸巡が一つずれた。清澄が引く牌は上家の姫松が未来で自摸切った牌。さつきはずらしても和了ったけど、ずらしても聴牌するとは限らない。まして本来なら2枚切れになるはずの南。これでも清澄が聴牌する可能性は――

1. 元々、手牌で南が対子だった場合

改変後は南が刻子になる。これで聴牌するのは、〔①②③⑥⑦⑧ 一二三四五南南〕〔南〕とかのパターン。改変前は〔①②③⑥⑦⑧ 一二三四五南南〕〔一〕とかで聴牌してたことになるな。

2. 元々、手牌で南が孤立牌だった場合

改変後は南が雀頭になるかシャボ待ちでの聴牌ということになる。しかしこの場合、改変前は孤立牌を切らずにリーチしたことになるため、改変前も南を引いていたか南単騎待ちでのリーチだったということになる。後者やった場合はリーチどころか和了られる。……どんな確率やねん、と言いたいけどオカルトはそういう常識で考えたらあかんのやったな。

3. 元々、南を持っていなかった場合

これは聴牌できない。もしリーチをかけられるなら、2巡目で既に聴牌していたことになる。

私の麻雀の腕は皆と比べてまだまだやけど、こういう思考力は未来視を活かすためにも必死に鍛えた。今回の場合はこんなこと考えてもしやあないけど。いずれにせよ、私にできることはこれしか無かつたんやし。上手くいってくれればええんやけど。

3 巡目 片岡 打〔南〕

果たして清澄の先鋒は南を自摸切つた。

怜 自摸〔六〕

そしてこれが、清澄が引いて聴牌となるはずだった有効牌。萬子は要注意やな。

それからというものの、卓上に動きが見られなくなつた。先程の一瞬の攻防がなかつたかのような静けさ。和了りの遅さに違和感を覚えたのか、清澄の先鋒の顔には若干の焦りが見えとる。ポーカーフェイスとか無理そうやもんな。

〔ツモ〕

怜 ツモ

〔4445678五六七〕〔8〕〔横②③④〕

〔600・1100〕

東2局 親 怜 ドラ〔白〕

「っ」

何とか清澄の親を流したと思うたら、今度は対面の上重さんが圧力を放ってきた。これが例の爆発つてやつか。フナQが言うてた、6から9の上の数牌が集まるつちゆうやつ。上重さんの爆発の条件は実はよう分かつたらん。合同練習でセーラや竜華、藍と対局した時には爆発してた。強敵と戦うと発動するらしいって話やけど、確実ではない。親番とはいえ、さつきみたいなことをバカスカやつてると身が持たない。ここぞという所、それこそこの対局なら清澄の親番を流す時だけにしたほうがええ。今まで通り、一巡先だけでやり繰りする。

6巡目 片岡 打〔5〕

「ロン」

「じえ!？」

上重 ロン

〔⑦⑧⑨67789七八九東東〕〔5〕

〔2600〕

見えてたけど、リーチをかけずダメで三色のみなんてなあ。しかも上重さんの河には九索。能力的に、この巡目でその手牌ならチャンタ一盃口も狙えたはず。東場の速さに対応するために火力を捨てて待ちを広げ、堅実に和了ってきた。親は流されたけど、こ

れで東場はあと2局。心強い味方と見るべきか、新たな脅威が現れたと見るべきか。

東3局 親 小瀬川

「ツモ！ 1000・2000だじえ」

清澄もスピードが落ちたわけやない。どうせこつちの手は間に合わんしそんな高くないことが見えてたから、特に妨害もせんかった。

東4局 親 上重 ドラ (③)

「ちよいタンマ」

今度は宮守かい。逡巡する時は、高い手を作ってるんやったか。和了りを諦めるわけではないけど、東場ははよ流してしまいたいから親以外なら誰に和了られてもまあ許したる。高い手でも自分の親やなし、姫松を削れるなら尚更や。

「深い所にいたなあ」

小瀬川 ツモ

「一二二三三五六七南南白白白 (一)

「ツモ。3000・6000」

南1局 親 片岡優希 ドラ〔4〕

ようやくと南場に持ち込めた。さっきまでようやくつてくれたな、こつからは私の独擅場や。

「リーチ」

怜 打〔横三〕

取り出したリーチ棒を天高く掲げ、真つすぐ振り下ろし卓に突き立てる。立直つてい
うくらいなんやから、リーチ棒は真つ直ぐ立てるものやろ。……いや、冗談やけどな。

「ツモ」

手牌が開かれるのときつかり同じタイミングで、リーチ棒が倒れる。

怜 ツモ 裏ドラ〔六〕

〔③④赤⑤⑥⑦23477四五六〕〔⑤〕

リーチ一発ツモ平和断么九ドラ3。

「40000・80000」

南場に持ち込めば、清澄の早和了りはなくなる。ということとは、面前での聴牌が間に
合うようになってリーチがかけられる。上重さんは相変わらず爆発したままやけど、火
力を早さに変換するといっても毎回できるわけやない。未来の見える私に、平均聴牌速
度で敵うわけないんや。小瀬川さんの特徴的な打ち方は、高い手を狙うために当然遅く

なる。せやから東場をさっさと流して南場で稼ぐ、これが今回の戦術。単純やけど有効やろ？

先鋒戦終了

千里山 1 2 2 1 0 0

宮守 9 8 6 0 0 0

清澄 9 1 8 0 0 0

姫松 8 7 5 0 0 0

実践能力解析 I (2単位)

次鋒戦が開始し、モニターには対局室の様子が映し出されている。控え室で浩子を応援しているのは私とセーラだけ。清水谷さんは怜を迎えに行つて、そのまま仮眠室に直行したらしい。特別疲労の溜まる試合ではなかったと思うが、これからのことを考えると無理はいけない。少しでも疲労が溜まった状態で動き回ると、怜の体に負荷が掛かる。

「へえ。あの清澄の次鋒、まるで全部分かつてるみたいだね」

宮守の留学生、エイスリンは13巡目までに門前で聴牌する確率が異常に高いのだとか。この門前というのが肝で、公式戦での副露率がなんと0%という徹底した門前党。このデータから、エイスリンは鳴きをする必要が無い能力を持つているというのが私とフナQの共通見解だ。

しかしこれに矛盾した驚きのデータが存在する。それは、地区大会での和了率が全国1位だということ。門前にこだわるとリーチをかけられるので点は高くなりがちだが、速度は鳴きを活用する打ち方に比べて落ちるので和了率は下がるはずなのに。

この局で警戒すべきは当然、エイスリン・ウィッシュユアート。そう思っていたのだが、

東一局で彼女を差し置いて清澄の染谷まこが和了した。

「分かつてるって言うたら、あの留学生の子の方がよっぽどやる?」

「確かにね。怜みたい……っていうか、見えてる範囲でいつたらそれ以上かもしれない」

まるで山にどの牌が何枚残っているか、これから何がくるか全て分かっているようだ。しかも自分だけでなく、他家の自摸や配牌まで把握しているように見える。つまり、卓上で起こる全てを知っているかのような動き。そういう意味で、怜の未来視を上回っていると言える。

「でも、行動までは見えてない」

「というと?」

「さっきの清澄の不自然な鳴き。あれから全てが狂いだした」

染谷 和了手牌

〔45678五五六七八〕〔9〕〔横123〕

一向聴のタンピン一盃口を捨てて両面チー。エイスリンの13巡目までの和了率を意識して早さを求めたと言うには向聴数を落としているし、和了牌が〔9〕の一气通貫のみはやりすぎだ。こういう悪待ち中は中堅の十八番だった気がするのだが。

「あの鳴きで和了れるってことは、清澄がエイスリンの能力の穴を突いているってことの証明だよ」

「鳴きが攻略法ってことか?」

「うーん。どうだろう」

能力の解明を先にしないと確かなことは何も言えない。しかし、系統の判別がつかないという点が解明を阻んでいる。卓上の全ての牌を把握しているのだとすれば、知覚系かもしれない。しかしそれだけだと和了率全国1位は獲れない。宮永照のような純粋に和了りに直結する和了系や聴牌加速系の能力や、天江衣のような他家の和了率を下げることでも自分の和了率を上げる支配系を上回れるとは到底思えない。恰がそうであるように、何もかも分かっているも他家に和了られることだってあるだろう。

だから、自身の和了率を支える何かがあるはずなのだ。門前で手を進めると有効牌を持つてくる聴牌加速系とか? そんな単純な能力で和了率1位を実現できるのだろうか。13巡目以内というと、普通に他家に和了られてもおかしくはない巡目だ。自分や他家の自摸への干渉、強力な支配が必要なはず。13巡目……13という数字は、自摸牌を除いた手牌の数と同じだ。つまり理論上は13巡あれば手牌全てを入れ替えてどんな形にも持つて行けるということになる。全ての自摸を操るのがエイスリンの能力ということか? しかし支配系にしては、特に能力を持つていそうもない清澄の鳴き一つで破られていた。

「いや、支配範囲と正確さ故の脆さか」

天江衣の支配だつて、136枚全ての牌の位置を操っているわけではない。他家の全ての配牌と自摸をコントロールしているように見えて、実は一向聴に縛り付けられるなら配牌も自摸も何でもいいのだ。だからこそ地区大会では宮永咲に積材を集めることを許してしまったし、カンでなくとも鳴けば聴牌まで持つて行けた。支配が緩んだ時は遠回りに打っただけで聴牌する者もいた。厳密に支配しているのは精々が海底牌ぐらいなのだ。

一方のエイスリンは、かなり多くの牌を事細かに制御している。己の力を過ぎた領域まで支配を広げると、それだけ一つ一つの牌への支配力は弱まる。それゆえか、配牌や自摸を自由自在には操れず何らかの制限があると見える。例えば余りにも確率の低い現象は起こせない、とか。翻数を制御できるのであれば大会最多得点も獲れてしまうし、それ以前に毎局天和地和で和了ればいい。が、現実はそうなっていない。

「効率や打点を無視した想定できない鳴きや打牌をすれば、エイスリンの支配は破れるのかも」

あるいは、支配系でなくとも牌に干渉する能力者がいるだけで一気に崩れるか。

「それ、浩子には言うたん？」

「いや、今気付いたことだからね」

「じゃあ、前半戦終わったら伝えないとあかんな」

「ここに座つても清澄の鳴きが謎を解く鍵だつてのは気付いただろうし。生のデータがあれば、フナQなら自力で気付くかも」

気付かなくとも、エイスリンはこのまま清澄に任せておいたら何とかしてくれる。そしてエイスリンの支配を破るには大抵の場合で打点を下げる必要があるので、清澄が稼げる点数は微々たるものになるはず。この次鋒戦の目標は先鋒で稼いだ点数を極力減らさず中堅へ繋ぐこと。点棒のやり取りが安くなるのはこちらにとっては都合がいい。「ツモ」

東三局 浩子 ツモ ドラ〔4〕

〔一二三四〕②③④⑧⑧③4〔2〕〔横一二三〕

〔500・1000〕

平和一盃口と断么九を捨てて鳴き三色とドラだけ。普段のフナQなら絶対にしない。これなら大丈夫そうかな。

次鋒戦終了

千里山 124500 (+) 2400()

姫松 100200 (+) 1600()

清澄 99900 (+) 8100()

宮守 75400 (112100)

次鋒戦は若干清澄のペースで終わったが、宮守以外に大きな得失点はなかった。

「中堅戦は千里山女子の江口セーラ選手と姫松の愛宕洋榎選手が獲得点数を競い合うデッドヒート。清澄の竹井久選手は序盤は点数を大きく減らしましたが、なんとか半分を取り返しました。対照的に、宮守の鹿倉胡桃選手は最初は良い調子でしたが最終的にはマイナスに転落することとなりました」

中堅戦終了時点

千里山 135400 (+10900)

姫松 112000 (+11800)

清澄 83100 (116800)

宮守 69500 (15900)

中堅戦もつつがなく終わり、リードを維持したまま迎えた副将戦。ここが先鋒戦と並んで何が起こるか分からない難所だ。

愛宕一族の例に漏れず防御寄りな打ち方をする、姫松の愛宕絹恵。完全デジタル派のインターミドルチャンピオン、清澄の原村和。そして我らが千里山の清水谷さん。この面子なら、清水谷さんが負ける要素は皆無とっていい。愛宕絹恵は、彼女より圧倒的に強い姉と互角以上に渡り合える清水谷さんの敵ではない。原村和は雀力で測ると五分だが、対戦相手の体温・呼吸・鼓動から精神状態すら見抜く『無極点』モードの清水谷さんには、観察眼・手牌読み・直感で及ばない。

と、ここまではデジタルな打ち筋の面子が揃っている。しかしこの卓には、予測を覆しかねない不確定要素が存在する。その不安材料こそが、宮守の白沢塞の存在だ。

彼女は過去の牌譜から、『和了りや向聴数の進みを封じる』能力を持っていると考えられる。単体攻撃版の天江衣と言えばその恐ろしさが分かるだろうか。原理的には『特定の個人の自摸に干渉する』能力と考えられるので、より強い支配力でのゴリ押し突破は可能だろう。だが清水谷さんに牌に干渉するような能力は無いし、持っていたとしてあの銘苅を封殺するほどの支配力に勝てるかどうか。

そもそもこの手の妨害能力は、正面からの対抗は効率が悪くなるようにできている。持ち得る力が同格でも、妨害側の方が少ないリソースで勝てるようになっていくのだ。

東3局、清水谷さんが『無極点』モードへ移行した。この状態になると、河からどの牌がどれだけ使われている可能性が高いかを推理し、そこから山に何が何枚残っている

かも割り出す。この山読みの冴え渡りによって聴牌速度が速くなる。

「やっぱり、こちらをマークしてきましたね」

にも拘らず、先程から手が全く進んでいない。白沢塞の仕業と見て間違いない。事前に分かつていたことではあったが、彼女の能力は使用には疲労が伴うようで、常時発動は不可能。要所で封じてくるとしたらここしかない。

どうせ封じられるなら『無極点』を使わなくていいのでは、と思うかもしれないが、それは違う。相手がマストカウンターで消耗するからこそ、通常時で封じられる心配がなくなる。親番の終了後に『無極点』を使い、次の親番を安心して迎えられるようにする。手が進まなくなったら途中で解除されないよう攻めつ気を出しつつ、バレない範囲で才りの準備をしていく。そんな作戦を立てた。

はずだったのだが。

「千里山女子、清水谷竜華選手。清澄の原村和選手に2度目の満貫放銃です」

「彼女の放銃は珍しいですね。特にこの状態に入った時は」

清水谷さんが『無極点』状態で放銃した。しかも特に警戒していなかった原村和に。

「あつれー?」

「藍、どういうことや?」

「全然分からぬ。私達は雰囲気で麻雀を打っている」

「んなわけあるかい」

ぐおおお、こんなのは初めてだ。フナQも私も頭を抱える。清水谷さんの防御力と、清澄の捻らない打ち筋や無能力者ということを加味すると偶然以外で放銃は起こらないはず。これで2度目だし、何らかの能力が働いてるんじゃないかとは思うんだけど。

清澄が実は能力を隠していた？

白沢塞の能力プロファイリングが間違っていた？

あるいはあるいは、姫松に何かされた？

「おもしろい、おもしろいですよこのデータ」

「実に面白い」

「二人がおかしなつてもうた」

前後半のインターバル。清水谷さんから事情を訊きだすと、返ってきたのは思いもよらぬ答えだった。

「温度変化が感じ取れなかった？」

「原村さんの体温が異常に高くなってな。風邪でも引いてはるんやろか」

参ったな。まさか発熱でサーモグラフィーを攪乱するなんて、そんな抜け道があると

は。清水谷さんの聴牌察知は、単なる河読みのみでなく、緊張状態による体温や心拍数の上昇を感知するとかそういう原理だ。厳密にはもつと多くの要素が複雑に絡まり合っているらしいが。

「そうでなくても呼吸や鼓動の乱れがほとんどなくて、聴牌気配が読みづらかったってのもあるんやけど」

清澄の原村和、実は相性が悪いのか……？

「原村和に関しては、『無極点』の感覚には頼らんほうがいいですね」

「普通に打つても十分戦えると思うし、私もそれがいいと思う」

次鋒戦といい、無警戒だった清澄が思わぬ活躍を見せている。しかし後半戦は清水谷さんも慣れてきたのか、逆に直撃を獲る場面も増えて収支はプラスに転じた。

副将戦終了

千里山	137300	(+1900)
姫松	105200	(-16800)
清澄	81600	(-11500)
宮守	75900	(+6400)

チート転生者に対する監督の心情を述べよ（配点：25点）

千里山は先鋒で稼いだリードを維持しつつも次鋒、中堅、副将とじわじわと伸ばし大将戦へとバトンを繋いだ。ここまでの試合運びは、監督として私が出した作戦通りの展開になった。いよいようちのエースオブエース、大将の出陣や。

と思ったら藍が控室を出て対局室へ向かうその足を止めて、思い出したかのように振り返った。

「皆は、決勝にどの高校連れていきたい？」

ついでおつかい頼まれようか、と言うようなノリの軽さ。対白糸台……というより対宮永照を見据えて、決勝と一緒に勝ち上がる高校を選別するという意図だろう。確かにそれができれば、優勝の確率は上がる。上がるが、他校の着順を操作してその上で勝つ、なんてことができればの話。

戦う前からもう勝った気でおる。普通なら、そんな舐め腐った態度の奴はきつく注意する（こんなことをぬかす奴はうちの指導歴の中でも藍以外にいないが）。

「私は清澄やわ。先鋒戦での感触からして、片岡さんが味方になるって考えたら東場だ

けでも楽できそうや」

「怜の負担が減るなら、うちも賛成したいけど……。それで藍が手抜くのは許さへんで」
「どうせ準決でシードと当たるので、どこ選んでも一緒な気がしますけど……。うちも清澄ですかね」

しかし、この場にそれを傲慢と捉える者はいなかった。

「余裕かますのはええけど、足掬われんよーにな」

唯一戒めたのがセーラ。もっともそのニヤついた顔を見れば、揶揄っているだけで本気で注意しているわけではないのは分かる。

「監督はどうですか？」

「勝つならなんでもええ、好きないようにしい」

結局、監督の私も含めて誰も異を唱えることはなかった。今度こそ扉の向こうへと消える藍を見送った後、ソファに腰掛けた。

「はあ」

気づけば出ていた溜息は藍の無茶苦茶な発言にか、それを咎めることもしなかった自分にか。

「2回戦第3試合は副将戦を終えて千里山女子が2位と32100点差で他校を大きく

突き放してトップ。他3校はベスト8をかけた2位争いの様相を呈しています」

モニターは控室から大将戦へと向かう各選手達を映している。

「大注目の大将戦。宮守女子高校からは姉帯豊音選手、最下位からの逆転を狙います」

宮守は2回戦までに大将に負担をかけない形で勝ち進んできたため、一見何の変哲もない選手に見えるほどにデータが少ない。私も浩子も確証を持ってないので、先入観を持たせないために藍には牌譜以上のことは何も言っていない。

「清澄高校からは宮永咲選手。地区大会では和了の多くが嶺上開花によるものです」

「このデータは目を見張るものがありますね」

「姫松高校、末原恭子選手は順位を維持できるか」

「彼女の活躍次第で、大阪2校の準決勝進出もありえます」

藍曰く、清澄はやりあうまで確実なことは言えないがどうとでもなりそうとのこと。姫松は合同練習でも戦っていて情報は十分だし、油断はできないが順当にいつて負ける相手ではない。

「そして千里山女子高校からは満を持して、個人戦チャンピオンの小鳥谷藍選手が登場します」

そして我らが小鳥谷藍。彼女の麻雀ははつきり言つて異常だ。しかし私は、相談されない限りは個人の打ち筋には滅多に口を出さない。例え異常な打ち筋であっても勝て

ているならそれでいい。下手に矯正して個性を殺す方がまずいからな。

私が監督として指示を出すのは、主にチーム全体としての試合運びや対戦校の対策。とはいえこれに関しては浩子や藍にほとんどお株を奪われている。藍の凄い所はあれだけの強さがありながら浩子とは別ベクトルの分析力を有していることや。浩子はオカルト・非オカルト問わずデータに基づいて相手の打ち筋を導き出す。一方の藍はオカルト専門で、膨大な数の能力を有するが故の知識と経験から相手の能力を推論してその法則を暴き出す。浩子がデータサイエンティストとしたら、藍は理論物理学者とでも喩えようか。

そういうこともあって、藍は特に手のかからない奴や。というか扱いに困つとる。藍について私が指示する最大にして唯一の作戦は、団体戦での先鋒に置くか大将に置くかのオーダー。もちろんチーム全体としての作戦は藍にも伝えているが、最終的には本人に任せているのが実態。監督としては不甲斐ない限りやが。大将に置いているのは、去年の団体決勝の反省を活かしてのこと。先鋒で大きく点を稼いでも、大将戦までの間にヘイトが集中してしまつて皆の負担がデカくなる。かといって、決勝進出校のエース達相手に飛ばすほど稼げるかどうか。去年の個人戦を見てたら、藍ならやってみせそうやけどなあ。今年は怜という対エースの申し子がいるのがこのオーダーにした理由でもあんねんやけど。

「小鳥谷選手は昨年にエースとして2年生ながら初出場し、個人戦では一昨年のチャンピオン宮永照選手を倒して王座を奪いました」

「あの対局は内容も衝撃的でした。まさか宮永照が4位になるとは誰も予想できなかったでしょう」

「そういえば、戒能プロも高校時代に宮永照選手に勝利していますよね」

「ええ。私がディフイートした時は万全の状態ではなかったですが」

「では、小鳥谷藍選手は戒能プロと同じくらい強いということでしょうか」

「どうでしょう、もしかしたら私より強いかもしれません」

「それはなぜ？」

「私には、個人戦決勝のアレが偶然だとは思えません。まだ力を隠しているとすれば――」

彼女との出会いは、1年前の春まで遡る。体験入部を終えて、入部希望者達のリストに載っているそれぞれの戦績と部員による備考欄を見ていると、目につくモノがあった。その生徒の名前は小鳥谷藍。セーラと同卓して戦績は2位。まあ、これはええ。半荘一回の戦績では大して何も分からへんし、この体験入部で見ているのは牌譜から傾向や特質をある程度把握するためにやっとなることや。性格診断であつてIQテストでは

ないって感じやな。

「2年生？」

目についたのは名前や戦績ではない、学年だ。2年生で入部した者は千里山の歴史上ほとんどいない。転校生か、千里山がまだ全国大会常連校やなかった時代に記録があるくらい。

「セーラ、これどういうことや？」

「忘れ物を届けにきてくれたはったみたいやけど、俺が体験入部生と間違えてしもて対局したんです。それで……ああもう、後は俺やなくて竜華に聞いてください」

部室にいる竜華を捕まえて訊いてみる。

「セーラとの対局を見て、なんか凄いもの秘めてるって感じたんです」

「それで？」

「入部させました」

させたって、そんな強引な。理由も曖昧やし。

「とにかく、この1か月で見極めてください」

力量を見極めるために毎年行っている、最初の1か月の練習試合のことか。1年生から3年生まで全員参加するこれは、地区大会のメンバーの選抜を兼ねている。とはいえる程度同じ実力同士の対局になるようにはしとる。そこでどこまで這い上げられるか

やな。前年度レギュラーにして現部長の竜華が言うんやから、今のところは信じてみようか。

1か月後。

「何やこれ」

散々目を通した戦績表を片手に、眉間を揉む。例の2年生小鳥谷藍は、どの対局も他を大きく突き放して成績トップ。竜華の提言で前年度の一軍メンバーに混ぜて打たせてみたところ、そこでも圧倒。この1か月でトップ率100%という化け物染みたというか、化け物そのものの成績を残している。

確信した。彼女は白糸台の宮永照のような怪物に違いない。

こんな才能がうちの学校で丸1年眠っていたなんて信じられへん。聞けば小学・中学共に麻雀部やクラブに所属したことはないというんやから更に驚きや。

こうなると、その強さの秘密が知りたくなる。監督としても、元プロとしても。だから訊ねてみた。

「ローカル役？」

ローカル役なんて言葉を耳にしたのはいつ以来やろか。プロになってからは縁のない話やし、ルールの固定化されてきた現代では尚更聞かない。今でも雀荘に行けば独自

ルールでやつとる所もあるけど。

「はい、ローカル役を目指す手が早くなったり打点が高くなります。正確には、ローカル役でしかあがれないというか」

「それは、なんとまあ」

なるほど。何らかのローカル役ができて、実際の麻雀の役ができていなければ和することはできない。そう考えると色々難儀しそうやな。

「例えばどんな？」

「そうですね……手っ取り早くて分かりやすいの、何があつたかな」

少し考え込む様子を見せると、卓に座ってこう言った。

『『オープンリーチ』を見せましょう』

私とセーラ、それに竜華が卓について説明を受ける。

『『オープンリーチ』』。

リーチ宣言時に手牌を公開するという、かなり異色にして比較的ポピュラーなローカル役。通常のリーチの1翻に代わって、または1翻追加して2翻の役となる。オープンリーチに放銃した場合は役満払いというルールもあり、これは意図的な振り込みを防ぐためである。ただし先制リーチ者の放銃の場合は2翻の扱いとすることも多い。これは追っかけオープンリーチの存在がリーチのリスクを激増させてしまい、誰もリーチし

なくなつてゲーム性を著しく破壊するためだ。また、手牌の公開は手牌全ての場合と、待ちに関係のある部分だけの場合の2種類ある。

——以上、藍による説明。

「確かに、オーブンリーチぐらいなら私も知ってるけどな。ローカル役になりやすいって話やったが、これやとリーチと変わらへんのやないか？」

あと、練習試合のルールでは当然こんな役無いし、藍の強さの証明にはならん気がするが。

「まあそれはそうなんですけど。見たほうが早いです」

今回はオーブンリーチ有りの対局を行い、細かいルールは先に説明した通りの2翻で、分かりやすくオーブン時は全ての手牌を公開する。ただし役満払いは無しとした。

「リーチ」

8巡目 藍 打〔横四〕

「オーブン」

藍 東家 手牌 ドラ〔二〕

〔三四五③④⑤⑦⑧⑨4555〕

〔346〕待ち

「で、この後どうすればええんや？」

「お好きにどうぞ」

お好きにどうぞ？

これは彼女の言った『ローカル役であがりやすい』ということを証明するために始めたことやが。それはつまり、何をしようかどうせ和了るからお前らは何をしても無駄やぞ、と言つてることになる。出和了りは期待できひんつちゅうのに、随分な自信やな。それに、ここに同卓してるのが誰か分かつてんのか。前年度レギュラーのセーラと竜華、この子らには練習試合で散々勝つてるから良いにしても。

「面白い」と言うやないか。元プロの私を舐めとんのか？」

ははは、と乾いた笑いをぎこちない表情で返す藍。気付いてなかったんかい。なんや気が抜けたわ。

愛宕雅枝 南家 手牌

（二七八①②⑧⑨③③④④中中）

絶対に自摸れる自信があるつてことになるが、（3）と（4）はこつちが半分以上抑えとる。

「ポン」

セーラ 西家 ポン（白白横白）

「ポン」

セーラ ポン（発横発発）

「へへーん、お好きにどうぞって言われたからな。こっちも景気よく行かせてもらうんで」
セーラが大三元の気配を匂わせる。中は切れへんな。

「カン」

清水谷 北家 カン（裏一一裏） 新ドラ（一一）

む、竜華がドラ8の倍満確定。なんやえらい大味な局になってきたな。

清水谷 河

（東南西3⑤赤5）

（7①9③二）

しかもこの河、前々から思うとったけど萬子の染め手が濃厚。門前混一色か、鳴いても赤一つ持ってたなら三倍満。いや、字牌の切り出しや場況から見ると清一色の数え役満なんてこともあり得る。

中は切れない。萬子も切れない。

愛宕雅枝 南家 手牌

（七八333444666中中）（七）

ほんでこの手牌や、もう呪われてるとしか思えへん。和了り牌を引く前に死んでまいそーや。私の元プロとしての経験と勘も、地雷原の真っ只中にある錯覚すら覚えるこの状況に警鐘を鳴らしている。

愛宕雅枝 打〔4〕

「ロン」

藍 ロン

〔三四五③④⑤⑥⑦⑧⑨4555〕〔4〕

藍に振り込むしかない。〔6〕やと平和、〔3〕やと三色もつくが、〔4〕で振り込めばオープンリーチの2翻のみ。〔34〕は四枚見えてるから裏は載っても2枚まで。最悪でも満貫出費で済む。まだ中や萬子は通るかもしれないとか、そんな温いことをするようならプロにはなっていない。リスク管理を考えるとこれが最善の選択。

「オープンリーチのみ、裏は……」

裏ドラ〔③⑨〕

「2つで12000です」

「ちやつかり裏2……まさかこれがあんたの特性つちゆうことか?」

「いえ。ツモ和了りなら高めが出るような気もしていますが、これは多分ただの偶然です
すね」

「多分?」

「リアル麻雀はあまりしませんし、オープンリーチなんてそれこそできる機会がないので。サンプル数が不足しているんです」

ネット麻雀はそこそこするらしいが、これほどの強さを持ちながら卓を囲んでやる麻雀はほとんどしないらしい。それゆえ自分の特質に関する知識は小中学生の段階で進歩が止まっており、この一か月の練習試合でそこそこの数の新しい発見があったという。

「それよりも、二人の手牌を見てください」

「ちえー、まじか。デカいの張ってたのに」

セーラ 手牌

〔22789 中中〕〔発横発発〕〔白白横白〕

「うちもええとこまで行つとつたんやけどなあ」

清水谷 手牌

〔三四五七七八八八九九〕〔裏一一裏〕

「こ、れは」

戦慄した。手牌全てが当たり牌。どれを切つても放銃は避けられなかった。竜華もセーラも既に張っており、中や萬子を切れば役満に振り込む破目になっていた。藍に差し込むという私の判断は間違っていないかった。

「この状況も全部あんたの仕業なんか？」

「さあ、どうでしょう。少なくとも毎回こうなるわけではないです。さつきも言った通

り確実なことを言えるほど知らないんですよ」

ただ、監督ほど強い人なら普通の人より直撃を獲った時のメリツトがでかいとか、そういうのも関係あるかもしれませんね——と、付け加えた。

「あなたの強さは片鱗だけでも分かったわ。こういうのが他にもあるってことやろ？」

席を立ち、監督室へ戻ろうとする。このシーズンは地区大会のレギュラーの選定で忙しい。今日もコーチ陣との会議の予定が入っている。この子は今年のレギュラー入り確定として、後日もっと詳しく話を聞かせてもらおう。

「何処へ行くんですか」

「ん？」

「まだ清算が終わっていませんよ」

ゾクリ、と背筋がざわつく。感情を宿していないかのような伽藍堂の瞳が私を見ていた。

「……いえ、まだ対局は終わっていませんよ。見せるものもありますし、終わるまでやりませんか」

瞬きをする、元の自信なさげで申し訳なさそうな表情をした彼女がそこにいた。気

のせいかな？

「まあ、ちよつとぐらいいええか」

腕時計を見て、時刻を確認する。まだ会議まで40分ほど時間がある。半荘一回ぐらいは問題ないだろう。

卓に座り直す。藍の親で対局は続行された。

愛宕雅枝 一巡目 手牌

〔一一三三四四五五六七八九〕 〔一二〕

脳内に警鐘が鳴り止まない。プロ時代でもここまで危機感を感じたことはなかった。まるで奈落の底に落ち続けているような感覚。光の届かぬ暗闇の中で、己の罪科を問う声が聞こえた気がした。

「監督、どないしたんですか。監督の番ですよ」

セーラの呼びかける声で我を取り戻す。数秒程度、座ったまま呆然としていたことに気付く。

「大丈夫ですか？ もしかして、体調悪いんですか」

「いや、大丈夫や」

一巡目にここまで手が止まるのを不審に思ったのか、竜華もセーラも心配そうな顔を

していた。改めて、何やこの手牌。配牌清一色とか異常事態にも程がある。向けた視線の先に、藍を認める。まさか、またこの子がなんかしたんか？

愛宕雅枝 打〔一〕

「ロン」

藍 ロン

〔一一一二三四五六七八九九〕 〔一〕

「48300。終わりですね」

眩暈がする。また、や。何を切っても当たり牌、しかも役満。見せるものというのはこれのことだろう。

「で、これは何や？ また偶然とでも言うんやないやろな」

苦笑いで首を振る藍。

「オープンリーチに振り込んだら役満ってルール、覚えてますか？」

ああ、そんなルールあったな。今回は採用せんかったはずやけど。……まさか。

「役満払いのルールが適用されている場合は起こらないんですけど、オープンリーチに振り込んだ人からは直後に必ず役満の直撃を獲るようになってます」

必ず。さつきは多分とか濁してた割に断定的な表現が出てきた。つまり、今まで百発百中ということ。

「アンタら、こんなんを1か月も相手しとったんか？」

「ほら。私の言った通りやったでしょ、監督」

このレベルのオカルトかまされたら、対策なしでは全く太刀打ちできんやろ。そりやトップ率100%も獲るわ。

「でもホンマにヤバイのはアレなんよなあ」

「アレ？」

「そちらは今度お見せしますよ。お忙しいところを引き留めてしまい申し訳ありませんでした」

腕時計を確認していたのを見て用事があることを察したのか、謝られてしまった。これも監督の仕事やしな、と下げる頭を止めて部屋を去った。

「2回戦第3試合大将戦、開始です」

大将戦開始のアナウンスで、考え事に耽っていた頭が覚める。ああ、そういえばそんなこともあった。後日、セーラ達が言っていたアレとやらを見せられてまた頭を抱える破目になって。それで漸く、怪物とかそういう範疇を超えていることに気が付いたん

や。

あの子が負けるビジョンが見えない。全力を出した藍には、誰も勝つことができな
だろう。そもそも、一度でも本気で麻雀を打った事があるのだろうか。勝ちたいと思っ
て己の限界の先を死に物狂いで模索するほどに、必死で打ったことが。

あの子は競技としての麻雀を打っている。それはプロの世界では普通で、何も間違っ
ていない。しかしインターハイに出場する高校生として、青臭い情熱が足りていないの
ではないかとも思うのだ。あまりにも強い力を得たが故に、今まで本気も出せず。いざ
本気を出せる場と機会に恵まれても、必死にはなれない。あの子の心の何処かで、自分
の力への後ろめたさが枷となっている。竜華が口酸っぱく咎めるのは、そういう所を見
透かされとるんやろな。願わくは、彼女が討ち果たすべき強敵が現れて欲しい――
なんて、すっかり教育者に染まってしまったな。

何で廊下に記者がいんだよ教えはどうなってんだ教えは

「出遅れたわ!」

対局室や控室といった会場の一部は、出場校やスタッフ以外の立ち入りが禁じられている。しかし控室から対局室へ繋がる通路には、一般の人が入れる区域が含まれている。ここでは、控室から対局室へ向かう選手の姿を写真に収めようと記者達が屯するのが恒例である。

対局室へ向かうチャンピオンの姿を写真に収めようと、私達ウィークリー麻雀TODAYも通路の脇を固める記者の列に混ざって張り込むつもりだったのだが。

「西田さん、流石にこの人混みじゃ写真すら撮れないんじゃないすか」

チャンピオンと同じく千里山のエースである園城寺怜選手は、病弱体質を理由に対局当日の取材を全面的に拒否している。取材できる千里山の注目選手が一人減ったためか、元々多いチャンピオンへの取材は更に爆増。結果、不祥事を起こした政治家への取材もかくや、という数の記者が通路を埋め尽くすこととなった。

「何としても一枚ぐらい撮るのよ」

「無茶言わないでくださいよ」

チャンピオンが現れるのを今か今かと待ち構えていると、急に奥の方が騒がしくなった。待ち人來たる。どうやら控室から出てきたらしい。

「チャンピオン、今回の対局の意気込みを」

「一言お願いします」

対局前の取材は、対局室への到着に遅れが出る可能性があるため基本的には控えるのがマナーだ。取材の少ない選手なら一言ぐらい取材しても特に問題ないが、強豪校のエースクラスともなると山のように取材が殺到するので、対局後にまとめて取材攻めするのが通例となっている。こうして通路で記者達が待ち構えることを許されているのも、ひとえにそういった暗黙の了解を守っているおかげなのだ。

「あいつら、マナー悪いわね」

にも拘らず声をかけているのは、道のど真ん中を陣取っていた記者達だ。ここら一帯が記者でごった返しているので追いやられて前に出てしまう者もいるが、彼らは意図的に進路を塞ぐかのような場所取りをしていた。いくらなんでも目に余る行動だ。警備につまみだされてしまえ。

先走って取材しようとした記者達を見て出し抜かれると思ったのか、その近くにいた記者達も次々に取材を敢行しようとする。いよいよ収集がつかなくなってきたところで、それは起きた。

——退け

耳ではなく心に響くような、暴圧的な口調に反して清涼な声が喧噪を貫く。瞬間、記者達が一齐に道を空けた。先程まで周囲一帯に響き渡るほどの声で騒いでいた記者達は、すっかり静まり返っている。背中にヒンヤリとしたものを感じて、それが私の汗ではなく壁に張り付いているからだということに気付く。遠くにいた私でさえも、知らぬ間に身を引いていたのだ。

「じゃない、道をあけてください」

発言を訂正した声の主は、小鳥谷藍選手その人だった。空いた道から、黒髪に藍色の瞳をした少女がこちらへ向かってくる。通り過ぎるまで、その瞳が光っていたような気さえた。そのまま彼女はこちらには一瞥もくれず、対局室へ向かっていった。後に残されたのは、呆然とした記者達である。

「あれが、チャンピオンのオーラってやつですかね」

「そうなのかしら……」

しかしあの時感じたのは、威圧感とかそういうものではなかった。確かに口調は乱暴だったが、気圧されるというより自らの無意識が体を動かしていた。道を空けなければ

ならない、という社会通念上の規範に従ったまで。人として当然の行いをしたただけで、そこに違和感はなかったのだ。

対局室に入ると既に他3名がそこにいた。内2名は席に座っており、1名は今まさに入ってきたばかりのようで、扉の傍で突っ立っていた。控室を出るのも遅かったし、ほんの数秒ではあるがマスコミに足を取られたので一番最後になってしまった。対局開始まで時間はまだあるので、皆が早いだけか。

扉の傍に立つてこちらに背を向けている子に、どこか既視感を覚える。そうだ、宮永照だ。なぜ彼女がここにいるのか。

「宮永さん？」

「えっ、はいそうです」

声をかけると、その子は返事をして振り向いた。しかし想定していた顔と違って面食らう。そうか、この子が宮永咲。映像で顔は見ていたが、後ろからだ制服以外で見分けがつかない。

「あー、っと」

「？」

「こんなこと聞くのも失礼だけど、宮永照さんの従妹か何か？」

「いい、妹です」

「そっか、道理で似てると思った」

特にその髪の毛が。髪型とか長さもそうだけどツンツン尖つているところとか。愛宕姉妹、監督とフナQも目元が似てるし、やはり姉妹というか血族は似るのか。待て。ということは姉が東京で妹が長野？ ……これは本当に失礼なこと聞いちやったかな。

立ち話もそこそこに、台上の卓へ向かって歩く。そこに、見知った姿を認める。

「久しぶりだね、末原さん」

声をかけると振り返ったのは姫松の大将、末原恭子。彼女は姫松の参謀でもあり、対戦校の分析に長けている。うちでいうところのフナQポジかな。交流試合をするまでは、てつきり愛宕一族の洋榎さんの方がその役目だと思っていた。聞くところによると、先鋒の上重さんをレギュラーに推薦したのは彼女なのだから。

「あந்த、春季大会は来んかったしな」

「風邪引いて休んでたんだけ」

あの時は本当に肝が冷えた。補欠の子に急に出てもらったことになったし、恰が私の分

まで点稼ぎ屋として頑張らないといけなくなった。補欠の子は態度には出さないよう努めていたけど、大会に出られて不服そうではないのを見ていて分かった。世間的にも千里山は私がいなくても十分強いという評判が立ったので、結果としてはこれはこれで良かったけど。

「今日という今日は、思うようにはさせへんで」

「じゃあ、私の対策はもうバツチリってことなのかな」

苦い顔をしているのを見るに、分析はしても具体的な対策はできていないのか。ローカル役だということに気付いたら、ようやくスタートラインに立てる。だが、分かったところで何ができる？ 日頃から私の闘牌を見ているフナQですら、私に勝てたことは一度もない。データに基づいたありきたりな対策は、今のところ意味を成していない。

だからこそ、末原さんには少し期待している。姫松は時折、私やフナQですら思いつかなかった奇抜な発想で能力者を倒してきた。その裏には末原さんがいたはずだ。

単に負ける、ということなら恰に数回負けている。そうではなく、自称凡人の末原さんに負けることがあるば——あれば、何なんだろう。ともかく、私がそれをどこかで期待しているのは確かだ。

「席決め、もうほとんど終わってるみたいだね」

「あんたが来るの遅いからやで」

「色々あつてね」

卓上に余つた牌は二つ。咲さんと私の分だ。

「どうぞで」

「じゃあ、失礼して」

咲さんに促されて、牌を捲る。刻まれていた文字は西。つまり、私の下家には末原さん。対面には咲さんが起家として座ることになる。

上家に目を向けると、座つていても分かるくらいとても背が高い女性がいた。長い黒髪に黒の制服と全身が黒で統一されており、同じく黒の山高帽にはチャームポイントに白のリボンが結んである。彼女こそ宮守の大将、姉帯豊音。

「よろしくお願ひいたします」

「お二方は初めまして。どうぞよろしくお願ひします」

「よろしくね」

「よろしくお願ひします」

全員に挨拶もしたところで、そろそろ席に座ることにする。今思えば、座つてからの方が礼儀としては正しかったかな。

対局開始のブザーが鳴る。

地区大会では私に回ってくるころには殆ど決着が付いていた。この試合でも既に2位との差が開いていて、私の役割は薄い。だから清澄を2位にするという条件を課すことで、役目を無理やり増やした。少しは齒ごたえがあるといいんだけど。

先負

東1局 親 宮永咲 ドラ〔4〕

咲 東家 配牌

〔①③④11222ニ五六七八〕〔西〕

私の親で始まった大将戦。現在3位の清澄高校は、トップと5万5700点の差がある。しかもそのトップは全国ランキング2位の強豪、千里山高校。大将は前年度個人戦チャンピオン。

緊張を解くため、部長からの指示を今一度思い出す。

「千里山を狙うのは避けた方がいいわ」

当初は1000点しか持っていないと考えて打つ、という作戦だった。しかしこの卓に座った今ならわかる。この3人を相手にしてそれは無理だ。

部長はそう感じた時のための案を用意してくれた。というより、副将戦が終了した時点で思っていたより千里山の一人浮き状態だったため作戦を変えざるを得なかった。

「今の咲じゃ、チャンピオンには絶対勝てないわ」

絶対に勝てない。その言葉を、以前にも言われたことがある。染谷先輩の雀荘で藤田プロと戦った時だ。しかし、その言葉を部長の口から聞くことになるとは思わなかった。

勝たなければいけない理由を抜きにしても、私にだつて勝ちたいという気持ちがある。絶対に勝てないとまで言われると、流石にムツとする。確かに個人戦チャンピオンともなれば一筋縄ではないだろう。しかし、実際に戦ってみるまではどう転ぶかは分からないはず。

衣ちゃんと戦った時は、一時は9万点以上の差をつけられた状態から勝つことができただけから。たとえチャンピオンが衣ちゃんより強くとも、5万点の差をひっくり返せないとは限らない。そう主張したけど、部長は首を横に振った。

「咲が衣に勝った時は、対局の中で一向聴地獄や海底撈月という分かりやすい特徴が現れたでしょ。でも今回はそれが無い」

チャンピオンの持つ『千里山のトリックスター』という異名は、その変幻自在の戦い方からきているという。鳴きを多用する打ち手かと思えば遠い所から面前で高打点を作り上げるなどは序の口。打点が高くなるわけでも回し打ちする場面でもないのに牌効率を無視した選択をしたり、和了を目指さずオリもしない訳の分からない打ち方をするとか。極めつけは人和での大会最多和了者という恐ろしいデータもあるらしい。大

会のルールでは人和が採用されていなくてよかった。

「え？ でも……」

チャンピオンには特徴が無いと言いたかったのであれば、それは間違っている。過去の牌譜から、主要な警戒すべき特徴は分かっている。それらの正体や攻略法が分かったというわけではないけど、何を警戒すべきかは分かっている。

「連続和了、人和、そして去年の個人戦決勝の異常な対局……。それら目立つものだけを対策するのでは足りないの」

部長は言う。

私には嶺上開花がある。優希ちゃんは東場での早和了り。原村さんはデジタル打ち。染谷先輩は卓上を表情として記憶し、部長は悪待ちをする。私達全員に、自分の打ち方というものがある。

しかし、小鳥谷藍という選手からは芯が見えてこない。底が見えない。未解明の謎が多すぎる。

もし、気づいていないオカルトがあったとしたら？

もし、脅威度を見誤っているオカルトがあったとしたら？

もし、まだ見せていないオカルトがあったとしたら？

「何をされているのか分からないうちに負けるわ」

絶対に勝てないと言われたことはショックだったけど、そこまで聞いて一理あるとも思った。

「だからこそ、情報を得る必要があるの。この2回戦を勝ち抜けば準決勝で、おそらく決勝でも戦うことになるわ。咲はそれまでに正体を見破らないといけない」

部長は不利な状況にあることを認めた上で、全国大会優勝を諦めていない。私がいずれ勝つことを待っている。部長の期待を裏切るわけにはいかない。沈みかけていた心に火が灯った。

「さしあたって、まずは2回戦を勝つことに集中しましょ。千里山が一番避けたいのは姫松に捲られること。徹底的に防御を固めていけば準決勝に進出できるんだから、無理をする必要が無い。私達がそれを追って無理をするのは危険よ」

ガチガチに防御を固めた相手から直撃を取るのは至難の業。そして攻撃のために踏み込んだ分だけ、他校に隙を晒すことになる。悔しいけど、2位狙いの方が現実的。

「姫松も千里山からの出和了りは期待しない。早和了りで逃げ切ろうとしてくる筈」だから、私が狙うべきは姫松高校。2位に浮上することだけを考える。

そう意気込んでいたのに、こんな時に限って自摸が悪いような。いや、普段の調子が出ないという方が正しいか。強烈な違和感がある。

咲 十二巡目 手牌

(②③③③④ 1 1 2 2 四五六七八) (②)

すぐに、違和感の正体が分かった。普段は感じる数巡先の山からの檣材の気配が、何時まで経ってもしない。でも、嶺上牌に何があるかは分かるのが輪にかけて奇妙だ。

カンができない。いや、事態はそれより深刻だ。刻子ができる気配すらない。いつもなら、この巡目には刻子一つくらいはできている筈なのに。しかも今のところポンもできていない。抱えられているのだろうか。これと同じような感覚を、最近どこかで味わった気がする。漂う空気が、どこか似ている。

何が起きているのかは全然分からないが、この異常事態を起こしている元凶は考えるまでもなく分かる。

——お姉ちゃんを倒した人!!

そう思つて、卓上ばかりを見ていた顔を上げると。

「ひっ」

目が合った。

能面のような無機質な表情に、藍色の瞳。それは私を映しているに違いない。その瞳の主は、対面に座る千里山のエースが一角、小鳥谷藍。

恐怖を覚えて、思わず視線を逸らした。あの視線が未だ注がれているのではないかと

想像すると、この局ではもう彼女の顔を見ることはできなかった。

「ツモ」

末原 北家 ツモ

〔45688三四六七八〕 〔二〕 〔横⑥赤⑤⑦〕

「1000、2000」

私の中で高まる不安と恐怖を断ち切ったのは、末原さんだった。早和了りに注意してと言われたのに、意識が千里山の方へ飛んでいた。忘れるな、今戦うべきは千里山じゃない。

でも、もしこれが続いたら……？

東2局 親 豊音 ドラ〔北〕

咲 北家 配牌

〔①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚〕 〔中〕

東2局。焦燥とは裏腹に、今度は刻子ができている。対面の視線はこちらから外れ、顔も先程より穏やかな気がする。やはり何かしていたのかもしれない。

しかし、安堵するのは早かった。

「カン」

藍 カン (裏88裏) 新ドラ (八)

嶺上牌を奪われた!?

大丈夫、嶺上牌を奪われるのは何も初めてのことではない。それでも、大事なものを取られるようなこの感覚は慣れない。涙が浮かびそうになるのをこらえて、気持ちを切り替える。まだ和了ができなくなつたわけじゃ——

待つて、カン?

部長の言う通り、千里山は無理をする必要がない。勝っている今、カンをしてドラを増やすのはリスクでしかないはず。つまりこのカンは、明らかに私を意図してのものであると考えられる。だが、先のような思わず鳥肌が立つ視線はなかった。

何故こちらを狙うのだろうか。狙うにしても2位の姫松を狙った方がいいはず。考えれば考えるほどに、違和感だけが大きくなっていく。

豊音 打 (三)

「ロン」

末原 西家 ロン

(③④⑤666四五八八) (横534)

「7700」

その後東3局も末原さんに和了られてしまい、2位との点差はどんどん開いてしま
う。

東4局 親 末原 ドラ (⑧)

だがチャンスはすぐに回ってきた。

末原 打 (2)

「カン」

咲 カン (横2222) 新ドラ (4)

「ツモ。嶺上開花、8000」

咲 南家 ツモ

(②③④⑧⑧⑧四五南南南) (六) (横2222)

私の大将戦、そして全国大会初の嶺上開花に要した局はたった4局。にも関わらず、
その道のりは余りにも長く感じられた。

南1局 親 咲 ドラ (二)

大明嶺の嶺上開花で責任払いとか、初めて食らった気がする。せつかくいい調子で和了ってたのにペース崩されたわ。

にしても、千里山の動きが不気味や。守りに徹してる割にさっきのカンはちよつと不自然やったし。そのくせ自分で和了ろうとは考えてへんようにも見えるし、辻褄が合わない。こつちの和了を妨害してくる気配もない。うちに和了られるのは怖くないってか？ 舐められたもんなやな。

そもそも、こいつが守りに入るところも納得がいかん。いつもはこちらに主導権を握らせたりしない。ながら麻雀並みに脱力して打っている時でも、もつと攻撃的やった。

まあそれでも、やることは変わらへん。当初の作戦通り、オリと超早和了りを駆使して逃げ切る。

けど拾える点は拾う。例えばこんな手は。

末原 北家 手牌

①②③④ 1 2 3 4 5 6 7 二四 二三

「リーチ」

末原 打〔横①〕

リーチドラ1の三面張。高め三色も付いてくる。半荘2回を耐えるためにも、稼げる

ときに稼いでおきたい。

「追っかけるけどー。とおらば——リーチ」

とか考えてたら、宮守がすぐに追いかけてきた。

末原 打〔七〕

「ロン。リーチ一発ドラ1で5200」

豊音 南家 ロン

〔③④⑤⑦⑧⑨567六八西西〕〔七〕裏ドラ〔7〕

くつ、三面張で嵌張に負けるか。まあこんなのはようある事、切り替えて切り替えて。

南3局 親 藍 ドラ〔中〕

南2局は清澄がまた嶺上開花で和了った。追いすがられとるけど、焦りは禁物や。まだリードはある。そしてこの局は、待ちは悪くないけど役なしでリーチかけるしかない手を聴牌した。

「リーチ」

「とおらば——追っかけリーチするけどー」

末原 打〔3〕

「ロン。リーチ一発一通で8000」

豊音 北家 ロン

(①②③④⑤⑥⑦⑧⑨)3九九九 (3) 裏ドラ (5)

また追っかけられて一発で振り込み。偶然にしても酷いわ。……いや、ほんまに偶然か？

南4局 親 末原 ドラ (1)

「リーチ！」

もう一回だけ確かめる。これで無理なら後はダメでいくしかない。宮守も、千里山や清澄の大将と同じあちら側の打ち手かもしれない。もしそうなら、対策なしでは後半戦に響く。

「通らばリーチ」

「あ、それロンです」

豊音 打 (横七)

やっぱり来た、三回目の追っかけリーチ!!

地区大会や一回戦の牌譜を見たけど、こんな打ち方してなかった。けど、ここまでされたらもう偶然で片付けたらあかん。

宮守の大將が微かに口角を上げる。間違いない、これは――

「え？」

藍 北家 ロン

{ 一 }

「門前清一三暗刻、16000」

……なんか、もう訳分からんわ。

大將戦前半戦終了

千里山 149300

姫松 94700

清澄 94500

宮守 61500

そろそろ狩るか……◆

それにしても末原さん迂闊だなあ、3回もリーチかけるとなると。能力の存在を否定しているわけでもないなら、2回目で気付きそうなものだけだ。

やろうと思えば、1回目の追っかけリーチの時点でも能力の可能性を考慮できるのだ。別に、私が相手の能力を見抜くとかそんな優れた技能を有しているわけではない。雰囲気というか得意げというか。顔に出ていたというほどでもないけど、思わせぶりなリーチ宣言から察しただけだ。

『追っかけリーチなんて稀によくあることでしょ』『そんな段階から警戒してたら何もかんでも能力と疑ってキリがないのでは？』『ミスリードだったらどうする』と考える人もいるかもしれない。大丈夫だ、私もそう思う。

今回は姉帯さんのデータが少なく能力を隠し持っている可能性がいくらでも考えられる、というのが大きい。こういう時は、危険かもしれない行為を先に他人にやらせてみるのがいい。元々積極的に和了るつもりがないのと、聴牌したらダメでいこうかなと考えていたから渡りに船。やることは変わらないのだ。

思惑通り、末原さんがリーチをかけて情報（情報）を取り（石）に行（な）って（た）くれたので警戒は確信へと

変わった。

その後は、末原さんが何故か3回目のリーチをかけ、更に姉帯さんが宣言牌で振り込んでくるという理解を超えた展開だった。もうリーチはでないものだと思っていたので、末原さんのリーチで1回目の驚き、あの手は別のローカル役ルートだと思っていたところ『燕返し』での和了で2回目の驚きをかましてくれた。

『燕返し』。

リーチ宣言牌でロン和了りすることで成立する一翻のローカル役。ただでさえ成立する確率が低いのを更に下げたためドマイナーもいいところだが、このローカル役は追っかけリーチに対してのみとする場合もある。……ああ、そういう理由で補正が入ったのかな。まだまだ研究が足りていないようだ。

余談だが、自分の目の前の山を位置調整する振りをして手牌全てをこっそり入れ替えるという同じ名前のイカサマが存在する。自動卓が普及した現代では（少なくともこちらの世界では）名前含めて廃れてきている。

能力としては、『リーチ宣言牌でロン和了しやすい』『聴牌速度が微差レベルで早くなる』というシンプルな内容。ロン和了しやすいってどういう原理だよと思うが、データに出ているのだから仕方がない。そもそもこの役自体、相手がリーチしてくれるかどうか依存する上に自分が先に聴牌していなければならぬという偶然役なので、少し発

生確率が上がるだけだ。

「藍、手え抜きすぎちゃう?」

前後半のインターバルで、私は控室に帰ってきていた。フナQと監督と一通り情報交換が終わったところで、清水谷さんからの苦言が入る。清水谷さんは何故か私が本気を出さないと怒る。まあ、部長というか部員としてはそれで正しいんだけど。仲間内でやっている実力よりも手を抜くとすぐ察知されるので、それより手を抜くということは段々しなくなっていくた。

でも今回は、手を抜いていたと言われても否定できない。1位で大幅リードしているので守っていれば勝てるとはいえ、ほとんど和了りを目指さなかった。普段の私を知っていれば試合放棄にすら見えるだろう。

「東場は清澄に探りを入れてたし、南場は点数調整したかったからね」

一応の言い訳を試してみる。それもこれも、宣言通り清澄を2位にするためだ。南場は何もせずとも姫松が振り込んだのでやることなかったけど。

「後半戦は本気でやってな」

「手の内を隠しておきたいから全力全開とはいかないけど、後半戦から動くつもりだから大丈夫だよ」

これは監督と相談して決めたことだ。実態は私の要望を通してもらっただけなのだ

が。

後半戦 東1局 親 豊音 ドラ (⑥)

「ポン」

豊音 ポン (中横中中)

後半戦。宣言通り東発から動こうとした矢先、姉帯さんが鳴いてきた。前半戦の追っかけリーチが印象的だっただけに、この鳴きは不自然だ。

リーチはもう警戒されたから出ないと踏んだ？ いや、それならそれでリーチを封じるというメリットがある。武器は使わずとも持つているだけで抑止力となる。終盤や形聴目的の鳴きならともかく、早い巡目での鳴きは自らの武器を捨てることに他ならない。つまり、姉帯さんにはまだ手札があるということか。

「チー」

「ポン」

「チー」

そこから更に、流れるような鳴き。

豊音 東家 手牌

〔裏〕 〔横六五七〕 〔九横九九〕 〔横三二四〕 〔中中横中〕

「ぼっちじゃないよ〜」

てかこれ裸単騎じゃん。

「お友達が来たよー。ツモ、2600オール！」

豊音 東家 ツモ

〔北〕 〔北〕 〔横六五七〕 〔九横九九〕 〔横三二四〕 〔中中横中〕

末原さんは放心気味に、倒された手牌をずっと見ている。姫松は前半戦の2回の振り込みから、インターバルの間に能力の攻略を立ててきたのだろう。大方、リーチをかけずに早和了りするみたいなのが対策といえるほどのものでもないだろうけど。実際、まともな手段ではそれぐらいしかない。

しかし宮守がここにきて新たな手札を切ってきた。あわや3回も振り込みそうになつてまで情報を取りにいったのに対策が無意味になるのは、敵といえど同情してしまいうさだ。それでもここで思考を止めるようではただの怠慢と言わざるを得ない。裸単騎なのだから、今更手牌を見たところで得られる情報は待ち以外の何も無い。和了られてから情報収集するのでは遅きに失している。では、具体的にどうすればよかったのか？

私は、最初の不自然な鳴き以降の姉帯さんの手出し自摸切りを全て覚えた。そこから牌譜を逆算すると、切り順が見えてくる。今回の場合、牌効率セオリを無視した打牌は能力を意識した行動と見えていい。

鳴ける牌が分かっているというような打牌ではないため知覚系能力ではない。同じ理由で裏目を引いていることから聴牌加速系能力では無い。配牌から鳴いて混一色を十分狙える手であったことから配牌系能力との複合の可能性はあるが、それでも裸単騎までするメリットは薄い。和了りまでが早かったので確実ではないが、自分の自摸と全体の河を照らし合わせると、鳴くことで妨害を付与する支配系能力デパフが複合している線は薄い。そして最後の鳴きから一発でツモ和了っていることから、導き出される答えは――

『裸単騎になるとツモ和了りできる』和了系能力。

と、こういう風に考えられる。私自身が複数の能力を持っている関係上、こういった特徴分析は癖になっている。宮永照照のような能力魔がなくても分かるのだ。本来なら、未原さんだつてこれくらいできる実力は持っている筈。先の追っかけリーチの件といい、彼女には初見の能力への対応が遅れる傾向がある。どうにか能力に対応しようとして空回りしている姿は、素質はあるだけに惜しい。

東1局 1本場 親 豊音 ドラ〔2〕

「ポン」

ポン {白白横白}

「チー」

チー {横③②④}

「チー」

チー {横⑦⑧⑨}

「カン」

カン {33横33} 新ドラ {⑧}

「ぼっちじゃないよー」

……なんちやつて」

末原 打〔1〕

「ロン。白、ドラ1。2900」

藍 西家 ロン

{1} {1} {横③②④} {横⑦⑧⑨} {33横33} {白白横白}

「っ!?!」

『シリアルオオタイ
「十一」落拾』。

四副露、つまり裸単騎で和了すると成立する1臈のローカル役。暗槓を含む場合は成立しない。中国麻將に、これに相当する『チャンチュールン全求人』という役があり、これはロン和了に限定される。それゆえか、十二落拾もロン和了に限定されることもある。なにせよ明確な定義が存在しないのがローカル役というものなので、採用する際は事前にしつかり取り決めておくのが賢明だ。ちなみに1索単騎で和了った場合は『金鶏独立』、白で和了った場合は『トウチャオハンチャンシユエ独釣寒江雪』という役も存在する。知名度も採用率も皆無とわかっていいが。

現代麻雀において採用されていない理由は言わずもがな。これがあれば本来は役無しの手でも鳴きまくって和了ればいいだけのゲーム、俗にいう鳴き麻雀になってしまふ。鳴いて役無しで困ることがなくなるので、初心者には嬉しいのだけだ。

重要なのは、そういうローカル役が存在するということ。それすなわち、姉帯さんの

裸単騎に類似した能力を私も持っていることになる。私の場合、『ロン和了しやすい』『役無しで鳴いても後から鬼自摸で役がついてくる』といった性質を持つ。

中国麻將の役もローカル役として認識されるので、前者は全求人に影響されているのだろう。後者の『後付け』能力は『ローカル役で和了りやすい』という能力の根幹と、裸単騎になるだけだと通常の麻雀では役が付かず和了れない、という矛盾を解消するための修正作用と考えている。

ここで、『鳴けば鳴くほど手が狭くなって後から付けられる役は限られてくる』という一般的な事実注意到注意されたい。つまり、『裸単騎で通常の役を成立させようとする後付けが早い段階で遂行される必要がある』ということになる。これは『後付け』の恩恵を受けておきながら、結果的に『十二落拾』にせず別のローカル役で和了るといふ抜けどの存在を示唆しており、単に『役無しの状態で鳴くだけで役の付く有効牌を引く能力』と化す。

これのおかげで雑に早和了りを狙っていけるので、守備を捨てて攻めに回る時にはよく使う。

「ちよーすいこよー」

清澄の宮永咲がそうであったように、自分の技を模倣されるとアイデンティティを奪

われたようなショックを受ける者は少なくない。しかしその明るい笑顔を見るに、姉帯さんは例外だったようだ。能力を複数持つているから執着が少ないのかな。あるいは仲間を見つけて感動でもしているのだろうか。さながら、私と姉帯さんは同じタイプのスタンド使い。それでいくとお互いにスタンド一つじゃないけど。

そして今の姫松からの出和了りで、姫松が三位に転落し清澄が二位に浮上した。

「ツモ。20000・40000」

東2局は私の和了りに触発されたのか宮守がまたも裸単騎で和了り、清澄が親被りした。できれば清澄に和了ってもらって点差を広げておきたかったが、順位は未だ2位なのでよしとする。

東3局 親 藍 ドラ (7)

そして迎えた親番。どの高校も出し惜しみしている暇はないし、情報は十分得ただろう。この卓に私の相手となる存在はいない。宮守の姉帯さんは現状では私の下位互換で、もう少し強力で豊富な手札が欲しい所。姫松の末原さんは対能力者の才能の片鱗が垣間見えるが、対抗手段としての能力を持たず、知識や経験が不足している。清澄の宮永咲はこの中で一番能力が強いが、私との相性が最悪。カンに頼り続ける限り私とは一生勝負にならない。

さて。清澄を2位にはできたし、ここらで点を稼がねば後が怖い。

清水谷さん

「ツモ」

藍 東家 ツモ

〔六六六③〕 〔③〕 〔横222〕 〔横北北北〕 〔中横中中〕

〔中、対々和。2600オール〕

『五門齊』。

萬子筒子索子風牌三元牌の全てを使って和了するローカル役である。鳴きOKの食い下がり無し2翻。中国麻将にも採用されており、七対子でも構わない。簡単さに対して2翻というところがぶつ壊れた。それゆえ門前や対々和限定といった制約を加える場合もある。

私の能力としては、『萬子筒子索子風牌三元牌の5種が揃っている時に有効牌を引きやすい』というもの。これの強力は役の付きやすさにある。5種で4面子1雀頭を作るとして、三元牌が雀頭かつ風牌が役にならない確率は10%。よって役牌で和了り役がつく確率は90%。ダブ東ダブ南の場合は85%となる。

「ツモ」

1本場 藍 ツモ ドラ〔9〕

〔白〕 〔白〕 〔七横七七〕 〔横⑦⑦⑦〕 〔7横77〕 〔南横南南〕

「対々和、三色同刻。4100オール」

加えて、役牌が刻子でない状態で『五門齊』を狙って鳴いていった場合は、先の『十
二落拾』の役保障能力との相乗効果が見込める。ローカル役でしか和了れない私にとつ
て、鳴いても役が付きやすく和了りやすいローカル役というのはありがたい存在で、『十
二落拾』と同じく重宝している。

「ツモ」

2本場 藍 東家 ツモ ドラ (八)

〔三三南南白白〕 (南) 〔横西西西〕 (発発横発)

〔6200オール〕

『四字刻』。

字牌で4刻子(または槓子)を作って和了るローカル役。翻数は2か3ほどで曖昧で
ある。必然的に対々和・混一色が確定する。

藍 河

〔1九九27七〕

〔3北北二〕

「その手で北対子落とし……!?!」

末原さんから思わずといった声が出たが、他二人からも奇異の視線を受ける。この役

は基本的に字一色を作れなかった時の残念賞でしかなく、字一色を崩して作る手ではもちろんない。危険牌を嫌って諦めるにはもったいなさすぎるし、何より他家の河や聴牌気配のなさからして三萬は通る。点棒状況有利とはいえ守りに入るならそもそも最初から鳴かなければいい。和了り牌が枯れているのならともかく、字一色一向聴から放棄するのはもはや奇行でしかない。

だから、彼女たちの驚きは正しい。他のローカル役より早く点数が高いものを狙った訳だが、私にしか理解できない事情を考慮するなど不可能だ。ともかくこれで3連続和了、いよいよ止まらなくなってきた。ここからは巻きで終わらせよう。

3本場 藍 ツモ ドラ〔6南〕

〔三四五六七八567⑤〕〔⑤〕〔裏44裏〕

〔ツモ断么九嶺上開花ドラ1。4300オール〕

4本場 藍 ツモ ドラ〔②〕

〔四四四五五五六六東東〕〔六〕〔①横①①〕

〔対々和三暗刻。4400オール〕

5本場 藍 ツモ ドラ〔1〕

〔②③④⑤⑥⑦⑧⑨東東東北〕〔①〕

「ツモ混一色一気通貫ダブ東。8500オール」

6本場 藍 ツモ ドラ〔四〕 裏ドラ〔北〕

〔2233446688中中中〕〔8〕

「ダブルリーチ一発ツモ中混一色一盃口。8600オール」

これで7連続和了。いつそ妨害されたらそれはそれで面白いと思つてリーチを掛けてみたが、流石の姉帯さんの追っかけリーチもダブルリーチ一発とかいう速度チートにはついてこれなかつたようだ。あるいは支配力で勝つたか。

「ふう」

達成感から、思わず息を吐いた。喩えるなら、軽く朝のジョギングをこなしたようなものか。そういえば東京に来てからはしていなかつたな。折角だし早朝に散策でもしてみるか。

いかんいかん、今は対局中。呑気に明日のスケジュールを立てている場合ではない。まだ最後の仕上げが残っている。

「ツモ」

配牌は見ずに、そのまま倒した。

7本場 一巡目 藍 ツモ ドラ ①

{ 11113789 } { 3 }

「天和。16700オール」

これにて『八連荘』成立。

『八連荘』はインターハイの大会規定にもその名前が記されるくらい、言わずと知れた役満のローカル役だ。もちろん、名指しの不採用という形で。役としては、八連続で和了することで八回目の和了が自動的にこの役に取って代わられるというもの。その名の通りに連荘、つまり和了りの全てが親での8連続和了とするか、単に8連続和了とするかで定義が揺れる。

このローカル役の存在によって、私は宮永照のような連続和了能力を有している。その詳細は『連続和了し続けるほど手が早くなる』というもの。まるで八連荘というローカル役の成立へ向けて、吸い込まれるかのように手が早くなるのだ。八連荘するか連続和了が途切れると効果は切れ、最初からやり直しとなる。宮永照のような打点上昇の縛りは無いが、反面安手になる可能性も残されている。しかしこれは殆ど心配いらぬ。手が早くなっても、舞い込んでくる配牌はなんらかのローカル役の種である。そしてローカル役は通常の麻雀でも採用されている役が絡む形が多いので、往々にして打点が

伴う。

考えてみれば分かる。そもそも役というものは規則性や希少性を評価してつけられる点数だ。それはローカル役も同じ。先の『五門齊』などは、規則的な美しさによって提唱された役の例だろう。規則的な形を目指せば、ローカル役も通常役も大体似たような形に行きつく。だから役が複合する。

しかしこの能力の強力は打点よりも早さの保証にこそある。4連荘目ぐらいからは配牌時点で最終形がどのローカル役かほぼ断定できてしまうほどに早くなり、余程の幸運か何らかの能力を持たない限りは阻止が難しくなる。そして今回のように全て親での7連荘をした場合は、速度のピークに達する8回目の和了は天和が確定する。

この能力の最大の弱点は初動。出かかりを潰されれば流石にどうしようもない。怜に黒星がついたのはこれが原因だ。怜の未来視の前では3連続和了までにはほぼ確実に阻止されて連荘がストップしてしまう。当時は主力打点をこの能力に殆ど頼っていたため、互いに直撃が獲れないままズルズルと差が開き収支負けした。部外の人には私の主能力だと思われている『人和』と『八連荘』を両方とも封殺できる怜は、正に私の天敵だった。

これだけ点差を付ければ手を抜いているようには見えないだろう。セーラにイジラ

れたり、清水谷さんに詰められる心配はない。私の仕事はこれで終わり。後はもう惰性で打っただけ。

椅子に背を預けて天を仰ぐことで対局者達の顔を見ないようにするという、これをやった時のいつもの癖をしながら、そんなことを考えた。

大将戦後半 東3局7本場終了時点

千里山 313800

清澄 325000

姫松 318000

宮守 219000

感動的だな……だが無意味だ

分かつとつたはずやった。これが小鳥谷藍の十八番であるつちゆうことを。どれだけ他で上手くいっても、結局こいつを何とかしないと優勝はできないということも。

だから、この一年間必死で研究してきた。まず、最も特徴的な『人和』と連続和了という二つの和了パターンを徹底的に分析した。すると、連続和了が上手くいっても大体8連続和了で止まることを突き止めた。ここから『八連荘』を連想し、ローカル役という共通点を疑った。過去の牌譜を洗ったところ、半数以上の和了りになんらかのローカル役が絡んでいることを突き止めた。実際は、ローカル役についての知識が無いために何の役か分からず見逃したケースが山ほどあるに違いない。

だが、分かつたところでどうすることもできない。

『人和』はそう頻繁に起こることではないが、小鳥谷が子で彼女より自摸番が先の時には常にこの危険が伴い、第一打は怯えながら打つことになる。予兆が分からなければ回避することもできず、来ると分かつたところで何の牌を切ればいいのかは分からない。何より、公式戦において子の配牌聴牌時の人和成功率はかなり高く、失敗してもそのまま和了り切ることが多い。警戒して初打中張牌とかランダムに切る工夫を入れたところ

で、魅入られたかのように和了り牌を切ってしまう。それこそ超人的な勘や未来でも見えん限りは、確実に躲す手立てではない。小鳥谷の下家になって人和を喰らう機会が減るとか、運よく合わせ打ちできるのを祈ることしかできん。

『八連荘』は、最初の和了から段々と和了する巡目が早くなっていく。全部親で和了した場合の8回目の和了は必ず天和になつとる。せやから、小鳥谷の親番には特に警戒しなくてはいけない。急所は、最初の和了。そこが一番遅いはず。しかしそんなことは当然本人も理解していて、最初の和了は鳴きを駆使して早和了りしてくる傾向にある。3回目を決められるともう誰も止められへん。

更に恐ろしいのは、これら二つが親と子の時を互いに補っていること。子の時はいつでもどこにあるか分からない地雷に怯え、親の時とはとにかく流すことに必死にさせられる。その気になられたら、こっちの気が休まる時なんてあらへん。

そして、これらはまだ氷山の一角に過ぎない。この二つ以外の力の特性はまともに研究できていない。相手がほぼほぼローカル役で和了ってくるなら、手牌の形も制限されて読めるはず？ 確かにローカル役を全て網羅しさえすれば、通常の役にも縛られるという二つの観点から手牌は読みやすくなる。

しかしそれは机上の空論。ローカル役とか関係なく、そもそも捨て牌や鳴きから手牌を読むっていうのは麻雀の基本。それでも100%は読めんし、読めたところで和了ら

れることもあるのが常や。手牌読みは振り込む危険性を減らすのが目的。零れる牌を狙い撃ちとか、そんな芸達者なことはロマンに過ぎひん。あつちだつて何も考えず打つとるわけちゃうしな。つまりこの作戦はあくまで守りの思考。それだけでは勝てん。

口では威勢のいいことを言ったが、本当は分かっていたはず。勝てるわけがないと。それでも、2位抜けでもいいから準決勝進出は果たしてみせる。そう意気込んでいた。

「はは……」

それがこのザマや。3位転落からの怒涛の連続和了を許してしまった。凡人じゃなくても、こいつには勝てない。何故なら、小鳥谷藍は怪物すら喰らう理外の存在だから。

やはりこの1年は無駄だったのか？

否、まだや。3位に落ちたとはいえ、2位とは700点差。親番が2回残っている。何より悔しいやろ、このまま終わったら。私が点を減らし過ぎたつてもあるけど、清澄が2位になってるのは宮永の自力やない。全部全部、小鳥谷がやったこと。このまま何もかもこいつの手のひらの上で終わるなんて、真つ平御免や。勝てなくとも、一矢報いる！

東3局 8本場

3巡目

藍打〔1〕

「カン」

咲 カン〔1111横1〕

——しかしその決意は、余りにも呆気なく踏み躪られる。

「もいっこ、カン」

咲 カン〔裏66裏〕

「もいっこカン」

咲 カン〔裏⑦⑦裏〕

この大明槓からの連続カン、地区大会で龍門渚の大将にしたやつに状況が似とる。あの時と違ってオーラスではないけど、同じように大量の得点差がついとして。

まさか。

「さらにかん」

咲 カン〔裏四四裏〕

宮永の手が嶺上牌に伸びる。その牌は、溢れんばかりの輝きを放っているような気がして。

「ツモ」

花が咲く幻覚を見た。

咲 ツモ

〔⑤〕 〔⑤〕 〔裏四四裏〕 〔裏⑦⑦裏〕 〔裏66裏〕 〔111横1〕

〔四槓子。34400です〕

大明槓による責任払い。しかも四槓子で役満。小鳥谷がこれほど大きな点数を削られるのは初めて見た。あいつも流石に予想だにしなかったのか、目を瞠る。

「面白い。続けて」

虹彩から光が消え、焦点が外れる。藍色の瞳が燐光のように淡く光ったかと思うと、その雰囲気を一変させた。

小鳥谷とは何度か卓を囲んだことがある。しかしこんな様子は見たことが無い……いや、どこかで見たことがあるような。直接ではなく、画面越しに。そうや、去年の個人戦決勝の様子に似ている。

ともかくこれで、千里山の親番は終わった。役満で2位との差が大きくなったのは痛いけど、ここからは私の親番。私のやるべきことは明白。この親で連荘して清澄との点を縮める。懸念事項は、小鳥谷藍。彼女の今までにない様子からして、何か仕掛けてくるに違いない。私が今まで見たこともないような何かを。それはもしかしたら、決勝

の再演となるような何かかもしれない。

「ツモ。 嶺上開花対々和三暗刻三槓子、12000」

「ツモ。 嶺上開花対々和三槓子、8000」

「ツモ。 嶺上開花中、6800」

「ツモ。 嶺上開花赤1、4200」

「ツモ。 嶺上開花のみ、2100」

しかしその予想は外れ、清澄の怒涛の攻勢が続いた。最初の四槓子から数えて6連続和了。その全てが、大明槓による千里山の責任払い。

「成程。 嶺上開花だけじゃないのか」

でも喰らった当の本人は涼しい顔をしとる。

清澄がやけに大明槓からの責任払いに拘るのは、ロンによる直撃は気取られる、または間に合わないと思つてのことやろか。いや、待て。まさかここまで清澄が千里山からのみ点棒を奪つていったのつて、うちら二校を飛ばさんためなんか!?

なんやそれ、完全に蚊帳の外やんか。そもそも飛ばさないためつてのがまずおかしい。どちらかを飛ばせば二位抜いで準決勝進出が叶う。むしろそんなことが狙つてできるなら飛ばしにいったほうがいい場面。一位抜けに拘ろうとしても、千里山との点数差は絶望的。

点数状況が見えてへんのか？ 自動卓の電光表示を見ればすぐに分かるやろ。

千里山	2	4	6	3	0	0
姫松	3	1	8	0	0	0
清澄	1	0	0	0	0	0
宮守	2	1	9	0	0	0

あ、れ。

——それは、見てはいけなかった。無意識に考えないようにしていた、目を逸らし続けた事実。2位の清澄との差は68200点。現在南2局3本場。親番はオーラスの1回を残すのみ。逆転には清澄から親の三倍満以上の直撃が必要で、ツモなら役満でも足りない。あまりにも厳しい条件。守りに入られたら直撃なんて不可能に近い。敗退の2文字が眼前に浮かぶ。絶望的なのは自分達の方だった。

何で、宮永咲の和了りを野放しにしたんや。

私は今、何をしてるんやっけ。

何をしなければ、あかんのやったっけ。

「でも私と勝負がしたいなら、それを前半戦の東一局から使うべきだったね」

自分が今、何の牌を切ったのかさえ、頭に入ってこうへん。

——時は満ち、星辰が揃う。

末原 打〔北〕

「ロン」

——崩落した6つの十三重石塔が、南斗六星の地上絵を描く。

藍 ロン

〔東東南南西北発発白白中中〕〔北〕

「32900。時間切れだ」

——廃墟の夜天には、北斗七星が煌めいていた。

大将戦終了

千里山	279200	(+141900)
清澄	100000	(+18400)
宮守	21900	(-54000)
姫松	11100	(-1106300)

「ありがとうございました」

「ありがとうございました」

「ありがとうございましたあああああ」

礼をしながら、姉帯さんが耐え切れず泣きだす。いつそのこと、彼女のように泣き叫んでくれたほうがマシだ。

「あ……」

言葉を失った末原さんの姿は、痛々しくて見ていられない。だから嫌なんだ。ちよつとやる気になったら、すぐ壊れる。本気を出せ、なんて清水谷さんも無茶を言う。

本気で麻雀なんてできるはずがない。

もう、こんな顔は見たくない。そう思って麻雀から離れた。友達を失くしたことが、根本的な理由じゃない。そりゃショックだったし悲しかったけど、私のせいだと割り切れた。反省して麻雀とは関わりのない友人を作ろうとした。中々うまくいかなかったけど。

そして、希望を見た。仲間を得た。私の力と相対しても尚、絶望に染まらない彼女達を。でも、それは仲間だからだ。死ぬ気で勝つ必要がない仲間だからだ。あの頃の友達に比べれば、精神も熟している。仲間だから、どれだけ酷く負けようと構わない。勝てなくてもいいとどこかで割り切っている。競い合うのではなく、頼ればいいから。

それじゃダメだ。それじゃ私が本気で麻雀をする理由にならない。必ず勝てるゲームなんてつまらない。せつかく手にした友情すら、また緩やかに滅びゆくだろう。

ずるい。私が、ではない。私以外の全員が、だ。

勝利に歓喜し、敗北に涙を流す。自身の成長に希望を抱き、限界に絶望する。弱者を淘汰し、強者に挑む。そんな姿が羨ましい。彼女達にとって麻雀は遊びであり、戦いな

のだ。

私はいえ、決まりきった勝利に飽いて、誰もついてこれなくせに可能性だけは潤沢で、弱者を躡るだけ。敵も味方も、どいつもこいつも妬ましい。私にとって麻雀とは遊びであり、作業だ。

私より強い者が必要だった。そうでなくとも、対等に渡り合える者が。だから個人戦に出場した。チャンピオンになって得たものは、虚無感。ああ、やはり私は駄目なんだと。あの時初めて全力を出して、分かってしまった。蓋をしてきた自分の可能性を見て、察してしまった。一生、誰も私に及ぶことはないのだと。

だったらもう、私の麻雀は単なる遊びでいい。作業になるのが苦痛なら、本気なんて出さない。自分の成長に蓋をし、力も限られた範囲でやりくりして、どうにか勝つ遊びをする。そしたら仲間達とも一緒に遊べるし、肩を並べて同じ敵に挑める。

宮永咲……。今の彼女は安堵の表情を浮かべている。不意の責任払いを喰らった時はちよつと期待したが、彼女も結局は私が今まで絶望させてきた子達と同類。挑む側の彼女が最初からあの大明積を駆使してこなかった時点で、何らかの制限がある。

下位2校を飛ばせばすぐに2位抜けできたものを、こちらを削ることに執着してい

た。1位への拘りがあった、というには動き出すのが遅すぎる。恐らく、ああするしかなかったのだろう。飛ばしたくても飛ばせなかった。後になるにつれ打点が段々下がってきていたし、逆境に立たされると強くなるとかそんなところか。他校を飛ばす行為は、逆境を覆す行為ではないため補正が掛からなかった。

辻褄が合う仮説を立てて満足した私は、彼女に興味を失くす。一人そそくさと対局室を後にした。

毎回ダブリーとか卑怯だぞ！↑

早朝。潮風に吹かれていると、背後からおーいと呼ぶ声がする。ダヴァンもよくここに来るが、こんなことはしない。というか明らかに声が違う。振り返ると、堤防の上の人影があった。黒い髪に藍色の瞳のセーラー服の少女。背丈は私と変わらない。誰何するまでもなく分かる。奴だ。ミーティングでここ最近目に残像が映るのではないかという程見た、小鳥谷藍だ。

「辻垣内さん、何でこんなところに？」

「愚問だな。何故も何も、ここは私のホームだぞ」

「それもそつか」

階段を軽快に下りた彼女は、私の隣までやって来る。

「お前こそ何故ここにいる？」

「散策だよ。折角東京に来たしね」

「余裕だな」

「まあね」

「こちらをじっと見つめて、ふんふんと何事か頷く。

「ガイトさん、やっぱそっちのが可愛いよ」

「かわっ」

下した髪を触ってきたかと思えば、突然妙な事を言いだした。本当に読めない奴だ。あとガイト呼びはやめろ。

「試合の時もそれでいけばいいのに」

「余計なお世話だ」

落下防止用の鉄柵に凭れた彼女は、遠い目をして水平線の彼方を見遣る。一頻り眺めた後、思い詰めた顔をして話を切り出した。

「去年の世界ジュニア、宮永さんで行ったでしょ。どう、いい勝負できた?」

個人戦1位を獲った彼女も、当然世界ジュニアへ出場するだろうと考えられていた。しかし去年の彼女は出場を辞退した。それを耳にした私は、当然納得がいかなかったの。で本人に問い詰めた。彼女が言うには、祖母の危篤が理由だという。春季大会も病欠だったというのだから、つくづく間の悪い奴だ。二つの意味で悪いことを訊いたと思っ
て謝罪したのだが、当人は世界ジュニアに出られなかったことは全く気にしておらず、祖母の方が心配なようだった。

「……結果としては優勝どころか決勝リーグにすら行けなかった。やはり世界は手強

かったと言わざるを得ない。が、手も足も出なかったというわけではない。私達も内容では決して負けてはいなかった」

「そっか。それはよかった」

憂いを帯びた表情。その『よかった』という言葉は、額面通り私達の健闘を喜んでくれるのだろうか。私には、まるで自分が行かなくてよかったというニュアンスが含まれているように感じられた。

「今年は出ないのか」

彼女がそうしたように、今度は私が問う。去年は事情があつて出られなかったが、今年と同じようなことが起きなければ行けるだろう。彼女の存在は、間違いなく世界制覇の鍵となる。去年は彼女の存在により決勝リーグ進出も夢ではないと噂されていただけに、出場辞退が報じられた時は各方面が落胆したものだ。今年こそは、と望む声は大きい。私だって日本の一雀士として、期待せざるを得ない。

「……気が向いたらね」

けれども。そう答えることは何となく分かっていた。やはり彼女は他人の限界を知る事を恐れている。自分よりも強いかもしれない相手が、戦つてみたら実は弱かったと知る事を。こうなつたのは間違いなく私達が原因だ。

「じゃ、私は行くよ。また準決勝で」

去年の個人戦決勝以来、彼女には哀愁が付いて回るようになった。普段はあまり見せないがふとした瞬間に、目を離せばどこかへ消えてしまいそうなほど儂い空気を覗かせる。

卓上では独裁者を思わせるほどの存在感を放っていたのに、今は覇気を感じ取れない。遠くへと去るその背中も、より小さく見える。豆粒より小さくなる前に、ポツリと呟いた。

「戦わずして勝った気になるのはお前の悪い癖だぞ、小鳥谷」

「もう戻ってきはったんですね、お帰りなさい」

東京の散策から帰ってくると、宿泊室にはフナQがいた。ソファに座って携帯を見ると、8月11日9時5分と表示している。

「準決勝もうやってる?」

「はい。今は先鋒戦やっています。今さっき前半戦が終わったところですよ」

今日はAブロックの準決勝。対戦カードは新道寺、阿知賀、永水、白糸台。ここから勝ち上がった上位2校が私達と決勝で戦うことになる。

「他の皆は？」

「園城寺先輩と清水谷先輩はまだ寝室です。江口先輩はさつきどっか行きました」

どれどれ。先鋒は新道寺が花田煌、阿知賀が松実玄、永水が神代小蒔、白糸台が宮永照……か。今の所宮永さんが大量リードしている。

白糸台 145400

阿知賀 84100

新道寺 70000

永水 100500

「永水が意外と頑張ってるね」

「点数的には全然ですけど」

「前半戦が終わったのにラスの高校がまだ70000点以上持つてるほうがおかしいんだよ」

宮永さんは私より容赦がない。隙あらば先鋒戦で準決勝を終わらせに来る。神代さんはマックスモードではないみたいだけど、それでも宮永さん相手に高打点を2回和了っている。新道寺と阿知賀はほぼ焼き鳥状態の中で、頑張っている方だろう。

「時折出る神格がいい抑止力になってるのか」

私には永水のそれぞれの神格の持つ権能までは分からないが、宮永さんならそれも分

かっているだろう。しかし『照魔鏡』を以ってしても、永水の神格が降りてくるタイミングまでは分らない。決勝に強いのを残しているだろうとはいえ、何が降りてくるかもランダム。このタイミングと種類のランダム性が、逆にいい塩梅になっている。打点上昇の縛りがある連続和了の途中で、支配系や加速系の能力が不意に現れると対処が難しい。実際、永水の2回の和了は宮永さんの連続和了を阻止するものだった。

それと、宮永さんが立ち回り難いもう一つの要因がある。

「阿知賀の子、ドラを集めるんだっけ」

「ええ。分かりやす過ぎます」

フナQからタブレットを受け取る。配牌や和了時の平均ドラ数といったデータが表示されていた。ドラ占有率100%は驚異的だ。これによって宮永さんはドラで打点を上げることができない。

「ドラ娘は宮永照に余り牌を狙い打たれてますね」

「凄いいよね。いくらドラを手に抱えるっていつても何がいつ零れるかまでは分からないし、零れる牌に待ちを寄せていかなきゃならないんだよ?」

同じ白糸台の次鋒の、シャープシューターとか呼ばれてた子なら能力的にできそうだけど。

「江口先輩が言うとした『鏡』のおかげでしょうかね」

「『照魔鏡』はそこまで見抜く力はないよ」

「ああ、先輩も去年個人戦で戦ったんでしたか」

「だからこそ恐ろしい。あんなの普通に考えてセンスや技量でどうこうなる芸当じゃない。私には無理だ。あれが能力ではなく純粋な雀力で成り立っているのだとしたら、能力無しでは敵う気がしない。」

「喰らった本人には何を見抜かれてるとか分かるもんなんですか？」

「いや、まったく。鏡が背後に現れて大事なものを見られるような感覚がするだけ」

「え、じゃあなんで先輩はそんなこと知っとるんです？」

「見られて困るようならそれはそれで良かったんだけど、本気でやりたかったから無抵抗は流石に思っただけ。あの時は逆にこっちから——」

「あれ、もうこんな時間やん」

先鋒戦の事で話を咲かせていると、怜と一緒に二度寝していた竜華が起きてきた。

「今何しとるん？」

「向こうの準決勝見えます」

「えー、私も見たい。怜起こして着替えてくるわ」

Aブロック準決勝は次鋒戦が長引いたため昼休憩はなし。私達はセーラが買ってきて

た素麺を食べながら中堅戦を観戦していた。

「フナQのデータ見たけど、ようこそまで分かったなあ」

相変わらずの早食いで一番に完食したセーラは、観戦の片手間にタブレットを弄っていた。私も見たが、特に阿知賀に関する分析が凄い。萬子が集まる次鋒の松実宥、筒子が集まる副将鷺森灼……と思いきや前者は赤い牌なら何でもよく、後者はボウリングの1投目で残ったピンの並びの定石で当たり牌を待つというのが真の能力。

「ボウリングとかそんなん分かるわけないやろ」

「うちのプロファイリングを舐めてもらったら困ります」

位置を直した眼鏡が誇らしげに光る。

「次鋒の方は小鳥谷先輩が似たようなのやってたので分かりやすかったですよ」

「断紅とか紅孔雀のこと?」

『断紅和』
ダンフオンホー

赤色を含まない牌、つまり②④⑧23468東南西北白發のみで和了るローカル役。門前3翻、食い下がり2翻。字牌なしだと清断紅といって門前6翻、食い下がり5翻と清一色と同じ翻数になる。阿知賀の子はこれと完全に真逆のことをしている。事実上の絶一門であり、(234)でしか順子を作れないため対々和との複合を狙いたいところだ。

『紅孔雀』。

〔1579中〕のみで和了るローカル役満。使える牌が5種類しかないため七対子にはならず、鳴きはありだが隣接した数牌がないため順子ができず、必然的に対々和となる。阿知賀の子は索子以外や赤くない牌も織り交ぜられるが、こちらは役満だけあつてとんでもなく手が狭い。通常の麻雀では満貫確定とはいえ和了りにくさに見合っていないため、私も滅多としてこの役で和了ることはない。

「他にきよーいになりそうなんは誰なん？」

素麺をちゆるちゆると啜りながら怜が問う。

「やはりシードだけあつて永水と白糸台はあからさまにヤバいのが揃ってますね」

永水女子は北家に東と北を鳴くと南と西が集まつて四喜和になる副将の薄墨初美、一色を独占する大将の石戸霞。白糸台は第一打に捨てた牌がオーラスの配牌になる中堅の渋谷堯深、他家の配牌が五向聴以下になる大将の大星淡が要注意か。

「新道寺は中堅まではパツとせえへんし、ここが決勝に上がつてくることはないんちゃうか？」

「いんや、そうとも限らないんですわ」

新道寺は見たところ中堅に至るまで能力者がほぼおらず、選手層が薄いように思える。が、曲がりなりにも準決勝まで勝ち進んできたのには理由がある。それは副将の白

水哩と大将の鶴田姫子が圧倒的なエースであるということ。強さの秘密は白水が和了ったのと同じ局の同じ本場で、鶴田が倍の翻数で和了るといふ異質な能力にある。この手の条件が重なったり制約の掛かった能力は支配力が強力と相場が決まっている。確実に和了れるということは、他校の和了を阻止するということでもある。先鋒と並んでエース区間の大将戦でこれができるのは、想像よりも大きい。

「だからこそ、副将まで飛ばずに持ちこたえたなら決勝進出のチャンスはあるつてことです」

ここが決勝に上がってきたら、副将の清水谷さんがどこまで抑えられるかにかかってくる。親番を潰されると『八連荘』が使えなくなるため、私でも危ういかもしれない。まあ、絶対に和了ると分かっているならそれはそれで付け入る隙があるのだが。

「阿知賀は打ち方が特異なのが揃ってるけど、実際に脅威になりそうなのは先鋒ぐらいかな」

むしろ、ここで落ちそうな高校の最有力候補は阿知賀だ。今の所先鋒のへこみを順調に取り戻しているが、打点を先鋒に頼っているためこれ以上点を失えない。となると他校のエース格が揃う大将戦がキツイ。

そして迎えた大将戦。予想通り白糸台と新道寺が暴れることになった。

「白糸台の大将、あんなん隠してたんか。毎回ダブリーってやばすぎやろ」
「藍のマシガン『人和』も相当やけどな」

清水谷さんから耳が痛い指摘が入る。何故そこで矛先をこちらに向けるのか。
「あれはちゃんとデメリットがあるから許されない？」

「ギルティ」

怜からの判決が下る。いやいや、少なくとも怜には確実に躲されてるから目の敵にされる余地ないでしょ。清水谷さんも『無極点』状態だと偶に躲されるし。

それはそれとして、大星淡の能力だ。配牌五向聴で周りを低速にしつつ自分はダブリーという鬼畜仕様。新道寺のコンボ以外じゃ止まらない。それに。

「カンしたら裏ドラモロ乗りか」

ダブリーするときは決まって役無しダブリーの2翻だけど、カンをすると4枚乗るか
ら跳満。打点まである。

「でも出和了り以外じゃスピードはそこまでないのが救いだね」
「いやいや、ダブリーでスピードが無いってんなわけないやろ」
「聴牌の速度ならね。和了りの速度のことを言ってるんだよ」

「そうか、角や！」

突然叫び出したフナQが、興奮した様子でタブレットを弄る。

「角?」

「壁牌の最後の角を超える直前でカンをして、その角を越えた直後に和了ってるんです」
へー、流石フナQ。そんな特殊な能力は持ってないから見当も付かなかった。でも、前半戦でカンをしたのに和了れていない局があったような。ということは、他の能力の妨害を受けている? 確か、その局に和了ったのは――

「阿知賀の大将、名前なんだっけ」

「高鴨穩乃です」

私の当初の阿知賀に対する評価は間違っていたが、この時の予感当たっていた。数局後、再び同じ状況がやってきたからだ。

「やはり山の深いところで大星淡の支配が弱まってるみたいですよ」

「最後の角が賽の目で決まるから、勝負の行方も賽の目次第なんだね」

決まりだ。高鴨穩乃は能力者。山の深い所、というなんとも曖昧な場所に支配力を発揮する能力。具体的にどういう支配なのかは分からないが、少なくとも自分に有利に働くものなのは確かだ。

Aブロック準決勝の結果は阿知賀が1位抜け、白糸台が2位抜け。シード校の永水が

脱落という番狂わせが起きた。私が相手をすることになるのは大星淡と高嶋穩乃。支配系盛り沢山で動きにくい試合になりそう。本音を言うなら副将戦で新道寺にほぼ全局和了られるとかの方が楽しそうだったけど。

「さ。向こうの事はこのくらいにして明日の準決勝に備えよか」

明日は私達の準決勝。対戦校は臨海と清澄、そして有珠山高校。臨海はメガン・ダヴァンと辻垣内さん以外は国内での公式試合が今年初となるため、情報が不足気味。有珠山高校も初出場だし、フナQが過労死しそう。それでも向こうの準決勝を分析するぐらいには余裕があるのは、初日から前もって分析を行ってきたおかげだろう。こういう抜け目の無さというか、計画性の高さは監督やコーチに向いていると思う。案外将来は愛宕監督と同じ道を辿ったりして。

「あー、それなんだけど。夜はちよつと用事があるから監督とのミーティング一番乗りにさせてもらってもいい？」

「別にええですけど、何するんです？」

「ちよつとある人達に対局を申し込まれてね」

全国の個人戦や団体戦に出場する選手同士の対戦は禁じられている。つまり、その規則には反しない相手なら問題はないということだ。

月の霊圧が……消えた……？

夜。私は千里山女子高校が宿泊しているものとは別のホテルへ足を運んでいた。ホテルのロビーで、一人の執事と会う。

「お待ちしてりました」

龍門瀏家が大金持ちだということは聞いていたが、まさか本物の執事にお出迎えされるとは。本名は萩原さんだが、よくハギヨシと呼ばれているらしい。彼が目当ての一室まで先導する。

「待ち侘びたぞ」

「いらっしやいまし」

「ようこそ」

案内されて入室した中では、浴衣を着た龍門瀏透華さん、天江衣さん、国広一さんが待っていた。今日はこちらにお邪魔して宿泊りすることになっている。ちゃんと監督や部員に話をつけてきた。歓迎を受けた私は挨拶を交わした後、早速本題に入る。

「もう夜遅いし、いきなりだけどやろうか」

ここへ来たのは他でもない。天江衣と麻雀を打つたためにきた。昨日、2回戦が終わった後に彼女達から接触があり、そこで対局を申し込まれたのだ。私自身、いつか彼女とは戦いたいと思っていた。去年は団体戦で戦う前に敗退していたし、個人戦には出ていなかった。彼女達は地区大会で宮永咲が倒した相手。既に格下と分かっている相手と戦う分には躊躇いはない。彼女達の要望と私の要望が見事に噛み合った形だ。

既に卓は用意されていて、席決めをしたらすぐに開始する。

東1局 親 一 ドラ〔④〕

地区大会の試合を見る限り、天江衣の能力は『他家を聴牌させない能力』と『海底で自摸和了る能力』。『十三不搭』のお陰で”見”に回るデメリットは軽減できる。まずは様子見といこう。

15巡目 藍 西家 手牌

〔一二三四五六七八九南南発発〕

なんとか聴牌はできた。これは事前の情報にもあつた通り。天江衣の支配は局の間ずっと続くとは限らない。流局間近になるとこうして聴牌ができることもある。しかし残りの自摸回数からして和了るのは不可能か。

「ツモ」

18 巡目 衣 南家 ツモ

(一一五六234789(8)(8)(8)) (四)

「海底撈月」

結局誰も鳴きを入れることはできず海底牌が衣に渡った。

「これは梃子摺りそうだなあ」

この支配下で『八連荘』をすることは不可能に近い。その他の『ローカル役』を由来とする能力は聴牌や和了を補助する能力が大半。どれも天江衣の支配を打ち破るには向いていない。『十三不搭』の重ね掛けなら高まつた支配力で力押しできるだろう。しかし飛び終了ありの25000点スタートでは、悠長なことをしている内に天江衣の連荘で終わってしまう可能性が高い。

「おや、チャンピオンさん。もう音をあげるのかい？」

親を流されたのは自分なのに煽りを入れてきたのは、星のタトウシールを付けた少女、国広一。彼女が特殊な能力を持っているという情報はない。外見は私より『トリックスター』感あるのに。ところできつきから気になってただけど、その手錠は何？

そこはかたなく闇を感じるけど、触れない方がいいのかな。セーラなら躊躇いなくツコミを入れるんだろうなあ。

「まさか」

東2局 親衣 ドラ〔3〕

『十三不搭』に頼らずとも、私には支配系と対局したら取り敢えずコレ、という対支配系の汎用的な能力が一つある。今、それを使う。

「何、この圧力。まるで衣が二人……!?!」

能力というものは、相手によっては通用しない可能性を考慮しなければならない。どこまでの相手なら通用するかは実際にやってみないと分からないのだ。支配系能力は珍しいから、こうして対局できること自体が貴重。当然相手をした回数も少なく、ましてこのレベルの支配力を発揮する手合いはほとんどいない。私が天江衣との対局を受けたのは、こうして自分の能力を研究するためでもある。

——18巡目。

「ノーテン」

「ノーテンですわ」

「ノーテンだよ」

「衣もノーテンだ。一体何が起きているのだ、これは」

4人全員がノーテン流局。普通ならままあることではあるが、この卓においては異常

だった。

「衣がノーテンなんて珍しいですわね」

「それより君の方がおかしいよ。全部自摸切りってどういうつもり？」

私はこの局、18牌全てを自摸切った。それでいてノーテンという珍事。こんなことが起こるケースはまずない。いや、配牌時点で好形変化のない一向聴で衣ちゃんの支配により手が進まなかった……とかならありうるのか？

「ノーテンでよくもそこまで押せましたわね。結果的に衣も張ってなかったとはいえ、親の安牌を引き続けるなんて凄い強運……」

胡散臭いものを見るような目で私の河を睨んでいた龍門渚さんが、突然固まる。かと思えばキョロキョロと卓上に視線を迷わせる。

「透華？ どうしたんだい」

「2人の河を見てくださいまし！」

龍門渚さんが私の河を指さす。

藍 河

〔南西北発白①〕

〔東9一1九2〕

〔⑧3南②1白〕

今度は衣ちゃんの河を指さす。

衣 河

〔南西北発白①〕

〔東9—1九2〕

〔⑧3南②1白〕

「河がまったく同じ!?!」

「おやおや、今の今まで気づいておられなかったようで」

先の意趣返して煽り返してやる。偶然でこんな現象を起こすことはまず不可能。当然これは私の仕業だ。

『真似満』。

子が親と同じ河を作ることと成立するという異質なローカル役。流し満貫のような特殊な和了りの一つだと思ってくれていい。子が子を真似しても認められたり、鳴きが入った時の取り決めをどうするかなど様々な面でルールが曖昧な役であり、採用する際は事前に取り決めるよう十分注意されたし。

どこまで真似続けければ役として成立するか厳密な定義はなく、現実的に可能な5〜7

巡目までとするのが一般的だ。点数は名前の通り満貫である……と言いたいのだが、やはりこれもそう簡単にはいかない。長く真似るほど点数を上げることもある。その場合は飜数に則つて5巡目まで続けたら満貫、6〜7巡目までなら跳満、8巡目で倍満にするべきという主張もある。しかし同じ牌を捨てることに成功した時点で和了り扱いになる以上、この例なら5巡目で既に和了つていることになるはずだが、6巡目が来るということは和了り見逃しができるといふことになる。その場合5巡目までは真似られたが6巡目は真似られなかった場合、和了りは無効となるのかの取り決めは事前に行つておくべきだ。

元となったローカル役がそうであるように、私の能力としてもかなり異質な類である。まず、系統が珍しい。支配系デパブであると同時に、系統外アノマリイでもある。この能力分類自体が私独自の基準なのだが、その基準では分類が困難な能力。それを系統外能力と呼ぶことにしている。

まずは支配系の部分から解説しよう。『自分より自摸巡が先の相手を対象に配牌前に発動でき、直前に対象者が捨てた牌が手牌にないならそれを自摸つてくる』。これがまさに今回起きた私と衣ちゃんの河の異常を引き起こした能力。

また『対象者は配牌で刻子・槓子ができない』、『対象者の配牌にある牌は、配牌完了

後に山か私の手にそれと同数以上残る』、『対象者の手に無い牌は山と私の手牌で2つ以上ある時、対象者の手牌にある牌は山と私の手牌で3つ以上ある時しか対象者はその牌を引けない』、『対象者の手に1つあるまたは対象者が直前に捨てた牌が山か私の手牌に2つ以上残っていない時、任意の牌が対象者の手で対子となつてゐる時は第三者がそれを引くことができない』という能力も持つ。

滅茶苦茶ややこしいが、要するに『私が意図的に真似満状態を崩さない限りは対象者と同じ牌を捨てられない状況にはならない』ということだ。

そして肝心の系統外の部分。それは『5巡目まで同じ牌を捨て続けた場合、対象者の全ての能力をその局の間コピーする』というもの。ただし『真似満』とコピーした能力以外の全ての能力が、その局の間消失する。

これによつて先の局は『一向聴地獄』が場に二重に掛けられ、衣ちゃんは聴牌できなかった。相手の能力をそのまま返すことで優位性を崩し勝負をイーブンにする。まさに対支配系用のカウンター能力といえる。

だがこれだけでは説明が付かない謎が一つ残つてゐる。5巡目まで真似ればコピーが完了するなら、なぜ流局まで真似たのか。実際、コピー後に真似満状態を解除してもコピーした能力はその局の間は失われぬ。

その理由こそが最後の能力。『連荘または輪荘まで同じ牌を捨て続けた場合、対象者

の全ての能力を次の局（本場）で無条件で使用できる』。無条件、それは当然他の能力が無効化されずに使えるということ。つまり本来持っている自分の能力と合わせて、一局の間だけが完全上位互換と化す。弱点としては宮永照の連続和了のような、一局で完結しない能力は役に立たないということだろうか。

東3局 流れ1本場 親 藍 ドラ（白）

この一局をどう活かすか。真似満はあくまでもコピー。相手の能力を無効化するわけではない。衣の支配から抜け出たわけではないため、依然として聴牌は困難。海底牌で自摸和了するという能力に関しては、互いに取り合うことになる。

この局、聴牌して海底牌を掴むことができた方が和了れるだろう。あるいは海底牌以外の方法で和了るか。私は既に『十三不搭』を2回溜めている。この状態なら、私の方が聴牌に近い。

藍 配牌

（一）一 二 二 三 ③ ④ ⑥ 東東東白白白

運が良いことに、配牌一向聴。『十三不搭』のおかげで跳満確定。さらに完全一向聴ともなれば、序盤から鳴きを入れて両面待ちの聴牌を取れる機会が沢山ある。相手の手牌次第だが、こちらが優勢か互角であることは間違いない。

「トーカー？」

「透華がまた去年みたいに……！」

龍門渚さんの様子がおかしい。目つきも雰囲気も、人が変わったかのようだ。彼女は一般的なデジタル打ちだったはずだが、何か能力を持っているのか。

——またしても18巡目。

「二二ノーテン二二」

全員ノーテンで流局。龍門渚さんと国広さんは『一向聴地獄』が二重に掛かっているから、鳴きなくして聴牌できないのは寧ろ当たりまえ。天江衣2人分の支配に抗えるはずもない。

しかし配牌完全一向聴の私が聴牌すらできないとは。上家の衣ちゃんから(14②)⑤)が出ればチー、(12)ならどこからでもポンして聴牌を取れる。珍しいこともあるものだ、と言いたい。気にかかることが2つほど。

一つは、東も白も河にでていないこと。私が3枚抑えている以上、持っていれば余る牌。王牌に埋まっていたとか、中盤以降に引いてきて生牌だから警戒して出さなかったと考えれば不自然ではない。東は連風牌で白はドラだし。

もう一つ、これが一番の違和感。私だけでなく全員が鳴けていないということ。とりわけ、私と衣ちゃんは『海底牌を引く』能力が発動している。海底牌は鳴きが入らなけ

れば南家が引くことになる。この局の南家は龍門洩さんだった。私も衣ちゃんも、この局は鳴かなければ海底牌は手に入らない。過去の牌譜を見るに、南家でない時も他家が鳴いて海底牌をずらした時も、衣ちゃんが都合よく鳴いて海底牌を掴んでいた。前の局は私の真似満があつたから衣ちゃんは鳴き難かつたとしても、この局はフリーのはず。私と衣ちゃんのどちらも鳴けないなんてことがあるだろうか？

総合的に勘案すると、これを一挙に説明できる仮説が浮かび上がってくる。龍門洩さんは『鳴きを封じる』能力を有している可能性が高い。

「これは……まずいかも」

何がまずいって、衣ちゃんと龍門洩さんの両名が同卓していることがまずい。どちらか一方なら問題ない。天江衣だけなら『真似満』で何とかなる。龍門洩透華だけなら門前で手作りすればよい。しかしこの2人の支配は噛み合いが悪い、いや良すぎる。衣ちゃんの支配下では鳴けないと聴牌が困難、しかし龍門洩さんの支配下では鳴くことができる。

真面目に攻略法を考えてみる。まず、衣ちゃん。鳴けないというこの状況下なら南一局しか彼女に海底は回ってこないため、次の東4局で『一向聴地獄』をコピーしておくか、南1は捨てて流局まで『真似満』を使ってコピーすればこちらは封殺できる。

次に龍門洩さん。『十三不搭』を数回溜めれば支配を貫通できそう。問題は、衣ちゃ

ん一人分の支配下で龍門渚さんが和了れるのかどうか未知数であること。私のコピーを知らなかったためにこの局では和了れなかったとはいえ、ここで発動してきたということは勝算があったはず。国広さん達の様子を見るに任意ではなく条件発動の可能性もあるけど。

残り局数からして『十三不搭』は三倍満が限度。速度や貫通力に勝手に変換されることも考えると、安全マージンをとって倍満和了で見積もっておくほうがいい。オーラスは龍門渚さんが親なので、本場などややこしい要因を無視すると自摸和了り条件にするためには龍門渚さんとは24000点差、他二名とは20000点差に抑えなければならぬ。龍門渚さんとは現在同点のためそのままだが、衣ちゃんとは現在9900点差。残り11000点差ということは子の跳満以上で即終了、満貫でもツモられたらキツイ。しかし警戒すべきは衣ちゃんだけではない。龍門渚さんが衣ちゃんの支配下で和了れるなら、この親で連荘される可能性が高い。そうでなくとも跳満ツモされただけで条件は崩れる。

この状況で残り4局を乗り切らなくてはならない。しかも『十三不搭』という圧倒的ハンデを背負った状態で。まるでコンビ打ちを相手しているみたいに、能力の連携が出来過ぎていて。流石に私も分が悪いか。

「素直に認めるよ、私の負けだ」

「まだ終わっていないのかい？」

突然の降参宣言に疑問を浮かべる国広さん。先程とは打って変わって茶化してはこない。困惑の方が大きいようだ。いや、というより他のことが気がかりでそういう気分じゃないって感じに見える。

誰一人として聴牌することなくその後の全ての局を流局してオーラスを迎える。

南4局 流れ6本場 親 透華 ドラ〔4〕

「ツモ、6600・12600」

藍 ツモ

〔1223344678889〕〔5〕

対局終了

小鳥谷藍 46800

天江衣 26300

国広一 14500

龍門洩透華 10400

「つて勝つてるじゃないか！」

「いやあ、正攻法じゃ勝つのは無理だなあつてことだよ」

練習とはいえ対外試合で手を抜いて敗北を喫したなんて知られようものなら、清水谷さんどころか監督や部員の皆にもどやさされる。

勝つためには、『真似満』で全部流局させて『十三不搭』で最後に自分だけ和了するという手段を取るしかなかった。やはり龍門渚さんや衣ちゃんに『十三不搭』中に和了られないためにも、念を打って『真似満』で『一向聴地獄』をコピーし続けた。幸い私は衣ちゃんの下家なので、私が親の時以外は衣ちゃんを対象に『真似満』を発動できるし、衣ちゃんが親の時にコピーしておけば親も凌げる。

問題は、この手段を取ると最後まで既定路線で動きが無さ過ぎるということ。何より、単純にやつて面白くない。だからこそ冗談でもなんでもなく、私の負けなのだ。

「それより、龍門渚さんのこれは戻らないの？」

東3局で様子が変わったつきりの龍門渚さん。対局が終わっても高飛車お嬢様に戻らないので首を傾げる。

「うん。前にもこの状態になったけど、4局ほど打った後気を失うまで透華はずっとこのままだったんだ」

つまり麻雀外でも作用する能力ということか。怜の未来視も麻雀外で使えそうだけ

ど、本人に聞いたことがないので分からない。

「国広さん的には、あまり歓迎できる状況じゃないのかな？」

「……ボクは、いつもの透華の方が好きだな」

龍門瀏さんのことを憂うその姿に、怜に対して過保護な清水谷さんが重なる。

——能力を使うことはできない

「月の気配が雲散霧消した……!？」

「あ、れ。私、一体何を」

「透華！」

意識を取り戻した龍門瀏さんに、国広さんが抱き着く。荒療治だけど、効果ありだ。

「小鳥谷さん、うちで一緒に働かないかい？」

何故か、国広さんから勧誘を受けている。私が何かをして龍門瀏さんを治したということとは明らかなので、それが理由ではあるんだろうけど。余計なお世話でないなら良

かった。

夜食を食べた後も入浴している間もずっとこの調子で、その度に断り続けている。残念ながら私にメイドの資質はないし、仮に雇われるとしても大阪住まいなので長野に引っ越さなくてはいけなくなる。というか雇用の権限は龍門渕さんにあるのではないのか。

「それより藍よ、まだ全然本気を出していないだろう」

「えっ、あれで!？」

「何でそう思うの?」

「去年の個人戦決勝のアレは、藍の仕業だろう。よもや偶然とは言わせぬぞ」

「ああ、そういえばそんなものもあつたねえ。ボクは完全に忘れてたよ」

彼女達が思い浮かべているのは去年の個人戦決勝で一度だけ使い、それ以来公式戦では封印した能力。部内の練習試合では怜相手に偶に使っているが、それでも加減をしている。

「それに、先の心髄に響くような託宣。まだ何か隠していると言っているようなものではないか」

「遠慮は要りませんわ。貴女の本気を見せて下さいまし」

元に戻った龍門渕さんはそう言う。

「でも……」

彼女達に絶望されるのは困る。この後寢床を共にまでする相手と空気を悪くするのは嫌だ。それとは別に、対局したら龍門瀏さんがまたあの状態になりかねないという問題もあるんだだけだ。

「あまり衣を舐めるでないぞ。お前が相手にしてきた人の領域で燻っている者共と一緒にしてもらっては困る」

この場で本気を見せるかどうか。大会でもないこの対局には何の想いも籠っていない。彼女達から望んでいることだし、受けるショックは小さい。龍門瀏さんも後でまた戻せばいい。よくよく考えたら問題はないのか。

「分かった。半荘一回だけね」

「そうこなくては。満月ではないが、衣も今出せる全力で当たろう」

思えば、最初からこのつもりだったのだろう。こうして対局の場を設けたのも、私の全力を見たかったから。私は天江衣という餌にまんまと釣られたというわけだ。私も彼女達を利用したわけだし、代わりにこちらの手の内を見せるのは妥当な対価。そう思うことにしよう。

「清澄に情報工作でも頼まれた？」

「まさか。純粹に衣の興味だ」

「別にいいよ、今日ここで見た事を清澄に伝えても」

知ったところでどうせ何もできない、と後に続けようとして、その言葉は飲み込んだ。
 「ほう、では入れ知恵するも一興か。その驕傲、仇となつても知らんぞ」

「ぜひお願いしたいね」

衣ちゃんはまるで自分は人じゃないみたいなのを言いたが、とんでもない。月の加護を受けようが神の力をその身に宿そうが、人は人。

この世には何人たりとも逃れられないモノがある。それは法ルール。法律、条令、契約、常識、暗黙の了解、約束、物理法則……人は沢山の法に縛られて生きている。

東2局 対局終了

小鳥谷藍 56000

国広一 24000

龍門洩透華 23000

天江衣 13000

つまり法ローカルルールを作る能力を持つ私こそ、真の支配者ルーラーといえよう。

能力設定 I

複雑で誤解を招きやすくなってきたと思うので、11話終了時点の主人公の能力についての公開情報をまとめました。ページまるごと設定の垂れ流しなので、興味のない方は読み飛ばして下さい。

以下は主人公の能力を相対的に理解してもらうために用意した指標です。各パラメータの説明とその例を載せてあります。

あくまでも本作が想定する設定なので、原作の描写と乖離が多々あることでしょう。矛盾や扱いが難しく敢えていい加減にしている部分もあります。なので参考までに。

☆系統

配牌系：配牌に影響を及ぼす。

渋谷堯深

聴牌加速系：自摸に影響を及ぼす。聴牌までと和了りで受ける影響が変わらないならこれ。

上重漫、薄墨初美、小瀬川白望

和了系：和了りや和了り方に影響を及ぼす。配牌・聴牌加速系の複合型は和了系扱い。

久
宮永照（連続和了）、弘世董、鶴田姫子、姉帯豊音、宮永咲（嶺上開花）、竹井

支配系：他人の配牌・自摸や場全体に影響を及ぼす。

天江衣、龍門瀏透華、大星淡、高鴨穩乃、白沢塞

知覚系：情報を扱う。

清水谷竜華、園城寺怜、福路美穂子、辻垣内智葉、宮永照（照魔鏡）

系統外：上記では分類が困難な能力。

夢乃マホ、宮永咲（プラマイゼロ）

☆支配力

能力同士が直接衝突した時の強度。相性を考慮していないので下剋上もある。同じ数値でも差がある。

5：特定行動の達成や制約を負うことでようやく発揮できるレベルの支配力。

鶴田姫子

4：ムラがある能力の最大出力に相当。または条件や適用範囲の狭さなどのデメリット付き。

天江衣（満月の夜）、高鴨穩乃（最高状態）

3：大半の能力を封殺・貫通できる。

天江衣（夜）、大星淡

2：大半の能力はこれ。モノによっては無能力でも支配を崩せる。

天江衣（昼）、片岡優希、エイスリン・ウィッシュユアート

1：能力というより技術に近いが、現実で再現するのは難しい。

末原恭子、染谷まこ

☆消費

能力の燃費の良さや使用にかかる制限の分類。一概に序数で表せるとは限らないので、アルファベットで表記する。

A：実質無制限。

宮永照（連続和了）、宮永咲

B：能力の出力に波が生まれる。

天江衣、大星淡、高鴨穩乃

C：使用回数や頻度、持続時間などに何らかの制限がかかる。

清水谷竜華、宮永照（照魔鏡）、夢乃マホ、片岡優希

D：使い方で消耗度合が変わる。過剰使用で疲労を覚える。

白沢塞、園城寺怜

以下は主人公が有する能力。《》は親能力。□はそれに含まれる子能力。作中で明言しなかった設定も記載。記載している能力でもまだ公開していない効果もある。

《ローカル役》

ローカル役でしか和了れないが、ローカル役になりやすい。

【人和^{レノホ}】

子の時に配牌聴牌しやすい。配牌聴牌時、自身の一巡目の自摸番までに他家から出和了りやすい。

——未公開情報有り——

和了系 支配力：4 消費：C

【十三不搭^{シーサンブータ}】

配牌前に任意発動。親または子の第一自摸で、面子や搭子が一つもなく対子が一つだけある状態になる。代わりに次の配牌の打点か速度が良くなる。連続で使った場合、打点換算で1回で満貫、2回で跳満、3回で倍満、4回で三倍満、5回で役満級の手になる。6回以降も速度がバフされるので無駄にはならない。

配牌系 支配力：5 消費：A

【オーブンリーチ】

リーチ宣言時に手牌情報を公開することで発動。ツモ和了りなら高めが出やすい。役満払いのルールが適用されていない場合、振り込んだ人から直後に役満の直撃を獲る。和了牌を他家に取り込まれている場合、取り込んだ数が多いほどその他家は振り込まざるを得ない状況に追い込まれやすい。

——未公開情報有り——

和了系 支配力：3（高め）、5（清算） 消費：A

【燕返し】

リーチ宣言牌でロン和了りしやすい。聴牌速度が微差レベルで早くなる。

和了系 支配力：1（聴牌加速）、2（ロン和了） 消費：A

【十二落拾】
シリアルラオタイ

裸単騎になるとロン和了りしやすい。役無しで鳴くと役がつく有効牌を引く。

和了系 支配力：2 消費：A

【五門齊】
ウーメンチー

萬子筒子索子風牌三元牌の5種が揃っている時に有効牌を引きやすい。

聴牌加速系 支配力：2 消費：A

【四字刻】

手牌に字牌があるほど、字牌が刻子になりやすい。

聴牌加速系 支配力：2 消費：A

【八連荘】

連続和了し続けるほど手が早くなる。全て親で7連荘をした場合は8回目の和了は天和が確定する。八連荘するか連続和了が途切れると効果は切れ、最初からやり直し。

和了系 支配力：1～5 消費：A

【断紅和】

タンロンホンホ

任意発動。自摸る牌を赤くない牌に限定できる。

聴牌加速系 支配力：2 消費：A

【紅孔雀】

任意発動。(1579中)を独占できる。

支配系 支配力：4 消費：A

【真似満】

自分より自摸巡が先の相手を対象に配牌前に任意発動。直前に対象者が捨てた牌が手牌にないならそれを自摸ってくる。意図的に真似満状態を崩さない限りは対象者と同じ牌を捨てられない状況にはならない。

(対象者は配牌で刻子・槓子ができない。)

(対象者の配牌にある牌は、配牌完了後に山か自分の手にそれと同数以上残る。)

(対象者の手に無い牌は山と自分の手牌で2つ以上ある時、対象者の手牌にある牌は山と自分の手牌で3つ以上ある時しか対象者はその牌を引けない。)

(対象者の手に1つあるまたは対象者が直前に捨てた牌が山か自分の手牌に2つ以上残っていない時、任意の牌が対象者の手で対子となっている時は第三者がそれを引くことができない。)

5 巡目まで同じ牌を捨て続けた場合、対象者の全ての能力をその局の間コピーする。『真似満』とコピーした能力以外の全ての能力が、その局の間消失する。

連荘または輪荘まで同じ牌を捨て続けた場合、真似た相手の全ての能力を次の局(本場)で無条件で使用できる。

支配系・系統外 支配力：4 (配牌・自摸)， none (コピー先参照) 消費：A，
none (コピー先参照)

《ローカルルール》

—— 未公開情報有り ——

(こいつ、直接脳内に……！)

今年で70回の開催となる高校生達の夏の祭典、インターハイ。私にとつてはこれが初出場。団体戦は私達千里山も決勝まで駒を進めたものの、白糸台が優勝。敗北を喫した他校は涙を吞んだ。しかし個人戦がまだ残っている。強豪校千里山は、もちろん個人戦も全国出場している。といっても私だけなのだが。

全国大会の予選は都道府県大会の予選と同じく総合得点による順位で本戦への出場が決まる。私は1位と僅差で予選2位抜け。トビが無ければもつと稼げたんだけどな。毎回均等に削るのは面倒臭くてやってられない。幸い、本戦はトビなし半荘1回のトーナメント方式で行われる。

このレギュレーションは去年の宮永さんの暴れっぷりを考慮してのものではないかと思っている。25000点スタートの1回きりの勝負では、1位が圧倒的に暴れた場合に2位と4位が実力を反映しているか疑わしい。実際そういう意見がプロや関係団体から出たという噂もある。団体戦のように半荘2回に増やすなどの処置は、対局時間が延びるので嫌厭したのだろう。それに結局25000点スタートだとそういう能力者の対局ではまたトビ終了するので順位の健全化効果は薄い。

明日は決勝を含めた本戦があるので、最後の調整をする。宿泊室で一人黙々とタブレットを見ていると、清水谷さんが肩越しに覗き込んできた。

「それは何を見とるん？」

「宮永照のデータだよ」

決勝に上がってくるだろう選手にいくらか目星はつく。その中でも対策すべき選手となると、更に絞り込まれる。三箇牧高校の荒川憩さんと北大阪予選で格付け済み。臨海女子の辻垣内さんは随分と麻雀が上手いようで、油断さえしなければ脅威度は高が知れている。

私が今一番ライバル視している選手は宮永照。僅差とはいえ予選総合得点では負けているし、前年度チャンピオンということもあってその強さは評判だ。現役の高校生最強。そして恐らくはプロに交じっても遜色ないであろう実力。そんな彼女とは是非とも万全を期した状態で、全力で戦いたい。

「珍しいなあ、一人の選手にそこまで入れ込むなんて」

「できる対策は全部して、使えるものは全て使わないと個人戦に出た意味がないからね」
使えるものは全て使うという言葉に何か引つかかったのか、清水谷さんがジト目になる。

「そーいや、団体戦ではいつものアレ使ってなかったやん。……手抜いてたんやったらマジで怒るぞ?」

勝てたのならともかく、団体戦は優勝を逃したのだからチームとしては見逃せないことだろう。

「いやいや、『ローカルルール』はルールだけあつて宣言する必要があるし。公式戦じゃ使えないよ」

法律然り、知らなかったでは済まされないのである。それでも明記・明言する必要がある。したがって能力の発動には対局前または各局の前にルールを伝える必要がある。前例がないのでどういう扱いになるのか分からないが、ルールの強要を仄めかすような発言を大会でしたら失格になるに違いない。

そういえば、欧州選手権には対局中に歌う選手がいると聞いたことがある。日本のインターハイだとどうなるんだろうか。三味線もある程度見逃される緩さだから問題なのか、あるいは局と局の間のインターバルなら見逃されるかも。しかし恐喝とも捉えられかねない発言は、これからする対局に対して影響を及ぼす可能性があるのではやはり駄目だろう。

「宮永照なら、鏡みたいなのに気つけろよ」

スマホを弄っていたセーラが、会話に首を突っ込んできた。

宮永照は東一局は「見」に回り、それ以降相手の能力を見透かしたかのような動きをする。対局したプロによると、打ち筋やクセまでは分からないようだが。その人はなんと呼んでいたか。

「確か、『照魔鏡』だったかな。話聞く限り知覚系の能力だと思うんだけど」
「その対策は出来てるん？」

私の能力も十中八九見破られるだろうが、無効化ではなく単に能力を看破されるだけならば問題はない。なにせ本人ですら使いこなせている自信がないほどに、私の能力は多すぎる。手の内が分かったところで全ての能力を同時に対策することは不可能だ。私と何百局と打って手の内も明かしている清水谷さんですら、未だに翻弄されている。とはいえ、自分の能力を一方的に見透かされるといっは気分が悪い。

「うーん」

「なんや、藍にしては珍しく自信ないやん」

「私には知覚系能力がないからさ。実感のまったくない能力は対策がなかなか思いつかないんだよね」

私は2つある親能力の1つ『ローカル役』から派生して多種多様な子能力を持つっており、その範囲は和了系、支配系、配牌系、聴牌加速系と多岐にわたる。したがって、能力者と対局した時も大抵は自分でも似たモノを持つているため性質や弱点を見抜きや

すい。しかし、宮永照の『照魔鏡』や清水谷さんの『無極点』のような知覚系能力だけは持つていない。

「何言うてるん。あるやんアレが」

「え？」

「どういうこと？セーラ」

「ほら、藍がリーチした時にビビッと来るヤツ」

リーチした時にビビッと……？

「もしかして、『オーブンリーチ』のこと？」

「そう、それや。藍がリーチかけた時、たまーに手牌のイメージが浮かんでくるやん」

オーブンリーチは手牌を公開することで成立する。しかし通常のルールでそれをしてたらチョンボになるだけである。『十三不塔』だつて役としては成立しないがメリットは存在して、能力としての体裁を保っていた。しかし『オーブンリーチ』は前述の通り通常ルールでは聴牌したところで手牌を公開できないので、これ単体だとローカル役判定を得られない。公開というデメリットを背負えないと、何の効果も得られない。門前で聴牌しやすいとかはあるかもしれない。あつたとしても実感できないほど微々たるものすぎて、フナQに調べてもらおう気も起きない。このように、能力と呼ぶには致命的なまでの欠陥がある。

そこで色々調べた結果、『リーチ時に相手の脳内に直接手牌のイメージを送り込む』能力があることが判明した。これをする事でオープンリーチが成立し『高め自摸和了り』や『振り込んできた相手から役満確定』といった諸々の恩恵を得ることが出来る。これは相手に対して情報を送るものだが、見方によつては知覚系能力とも捉えられる。冷静に考えたら、私はテレパス能力を持っているということになる？

「ちよつと試してみよつか」

むむむむむ。

はあつゝゝ!!

「どないしたんや、そんな眉間に皺寄せて」

「いや、念を送ろうとしたんだけど。駄目か」

麻雀外だと能力が発動しないとかもあるけど、基本的にこの世に存在する殆どの能力は麻雀外でも発動すると私は考えている。その最たる例が、私の『ローカルルール』。この能力は定義が非常に曖昧で、こういう能力だ、という説明は困難だ。私の持つ能力の中で最も未解明な事が多い。特に麻雀外でとなると能力の性質上不用意に使うわけにもいかないので、研究は進んでいない。

今の所分かっているのは、『他人への行動の誘導』ぐらいだ。ゝしなくてはならない、

くしてはいけないという風な言葉を伝えることで発動し、一時的に義務感を植え付け行動を誘導する。そのため強い意志を持って抗おうとすれば逃れられる程度のものであり、強制というほど強力なものではない。勿論そういう使い方もできる可能性はあるが、やはり怖くて試せない。

能力を使うということを意識していなければ発動することはないのだが、厄介な事に、感情が高ぶっていると暴発することがある。そんな時にうっかり命令口調で喋ろうものなら、それなんてギアス？な超能力と化す可能性もあるので、普段から言葉遣いには気を付けている。

他にも清水谷さんの『無極点』は、麻雀と関係なくても頭を使う場面で発動することがある。定期試験で突然足を組みだして試験官にやんわりと注意されたことは、暫く部内で弄られていた。

だから『オープンリーチ』も麻雀外でテレパス能力が生えてくると思ったのだが。

……そういえば『オープンリーチ』の時はそんなに力まずに、牌のイメージが頭にあった。というか、テレパシーなのだから伝えたい何かが必要になる。何でもいいから何か伝われどが駄目なのは当然。今度は具体的な言葉を思い浮かべてみる。

(聞こえますか……セーラよ……今……あなたの……心に……直接……呼びかけてい

ます……)

「うわあ、何や何や!」

「セーラ!? 急にどうしたん」

セーラが突然辺りを見回して騒ぎ立てる。

お、これはいけてるのかな? 清水谷さんにも試そう。

(ファ○チキください)

「きゃああああああ!」

——数分後。

「もう二度とせんといてな」

「はい」

酷い目に遭った。具体的にどういう目に遭ったのかは、互いの名誉のために伏せさせていただく。ともかく、こちらから相手への一方通行のテレパシーができるようだ。

「せや。テレパシー使えば、公式戦でもさつき竜華が言うてたアレ使えるんやないんか

「？」

「それ、私も思った。後で試していい？」

「ええんやけど、ちよつとは加減してな」

「ちよつとセーラ、藍に手加減なんてさせたあかんで」

『ローカルルール』は紙に書いたルールを見せても効果を発揮する。内容を相手に宣告したという事実が重要なのだ。だからテレパシーでもいける可能性は高い。

ちなみに言語形態は主要な自然言語であれば構わない。但し相手が理解できないと多少効力が減衰してしまう。エスペラント語のような人工言語、ASCIIコードやシーザー暗号のような極端な情報変換では効力はほぼゼロになる。よって基本は日本語を使う。いざという時のためにヒンドウ語でも覚えようかと思ったが、面倒臭くて止めた。

ともあれこれで私の最大の切り札が決勝で使える。団体戦の前に気付けていればと思わざるを得ないが、後の祭りだ。

「まあそつちはそつちとして。後は『鏡』の対策を考えたいね。清水谷さんも知覚系だし、何か思いつかない？」

うーん、と思索する清水谷さん。知覚系の能力は他の能力と比べて特に直感的で、理論的な説明が難しい。正直この分野は専門外なので、頼りになるのは怜や清水谷さん

だ。

「そういえば合宿の時に一回だけ、普段の藍と生体反応が違いすぎて行動がまったく読めん時があったわ」

「竜華が集中モードやったのに調子悪い時あったな。あの時は藍がなんか怖い顔してたからよう覚えとるで」

「怖い顔」

「多分それ。顔や息遣いもそうやけど、なんか捨て牌に違和感があんねんな」

「そんなに顔に出るような能力あったっけ？ 自覚してないけど変な顔してたってちよつとシヨックなんだけど。」

「あ」

相手の能力をコピーする『真似満』があった。捨て牌に違和感といえれば間違いなくこれだろう。大抵の場合、コピーのために5巡や一局を捨てたりするよりも普通に攻めた方が強い。そのため支配系に対する万能解ぐらいでしか使わない。そして支配系は滅多に遭遇することがないので、能力の存在そのものを忘れかけていた。

清水谷さんが理由を持って捨てた以上、それを真似た私の捨て牌からも同じ理由が読み取れる。しかし『無極点』発動中は鼓動や息遣いという情報に頼るので、それらと卓上の状況が一致していないと推理を誤る。それで調子が狂ったのだろう。

だが、清水谷さんは生体反応が違うとも言っていた。これだけは説明がつかない。「これはどういうことだ？」

「え、何。なんかついてる？」

じつと見過ぎたせいかな、体中を探る清水谷さん。

……辻褄を合わせられる解釈を一つ閃いた。

思えば、そもそも能力のコピーからして原義の『真似満』とは関係がない。能力の存在を前提とした麻雀の役の定義なんて存在するわけないのだから当たり前だが、『能力のコピー』は捨て牌を真似る、つまり『真似』^{コピー}という概念から生えてきたのだろう。だとすれば、それが能力に留まる理由はあるのか。

捨て牌や能力だけではなく他にも色々コピーしているのではないかな？

『無極点』中の清水谷さんは目も雰囲気も違う。コピーした能力を行使していた自覚はないが、自動的に似たようになるのかもしれない。捨て牌、能力、体温、息遣い、鼓動や代謝まで何もかもをコピーしたとするなら、どうだ。

「宮永照に通用するかは分からないけど、試してみるのはいりかも」

宮永照が何を基に能力を見抜いているのかは分からないが、同じ知覚系である以上、清水谷さんのようにコピーした何かによって攪乱できるかもしれない。

加えて、『真似満』の一時コピー中は他の能力を放棄する。都合よくいくとは限らない

が、能力が不活性化した状態なら看破されない可能性だつてある。

何より、宮永照自身に『照魔鏡』をかけられるのが大きい。こちらも相手の隠し札を把握できるのだから、情報戦の上では五分に持ち込める。

うん、考えれば考えるほどやり得な気がしてきた。保険にしては十分ではないか。

「そっちは肝心の連続和了は？」

「そっちは既に対策してきてる。今さつき手札が増えたから、今日中に作戦練り直すけど」

大幅に方針変更することになる。『ローカルルール』は我ながら卑怯極まりない能力と自覚しているが、私の全力で戦うからこそ今回の個人戦に出た意味がある。公式戦では使えず、部員相手にさえ手加減して使っていた能力。自分でさえどこまでできるのか限界を知らない能力。それを今日、一切の遠慮を捨て完全解放する。真正正銘の全力。私がどこまで通じるのか、これではつきりする。

「優勝は、千里山女子高校2年小鳥谷藍選手！ 前年度チャンピオンを打ち破り王座を

手にしました！」

私の個人戦は呆気なく終わった。呆気なく、優勝した。全てが作戦通りだった。全てが既定路線だった。

あれでは勝負にならない。諭えるなら。私は異能力バトルをしているのに、彼女らはまだ異能力麻雀をしている。住む世界が違ったのだ。全ては戦う前から決まっていた。そののなんてつまらないことか。

——勝兵は先ず勝ちて而る後に戦いを求め、敗兵は先ず戦いて而る後に勝ちを求む

孫子の兵法である。現代ではよく『事前に準備している奴が勝つ』という意味合いで用いられる。しかし今の私には、これが運命論染みた言葉に聞こえてならない。遺伝子や才能といった段階から既に準備は始まっており、勝者は生まれついた時から勝者で、敗者は生まれついた時から敗者とも言えるのではないか。

「すごいです、藍先輩！」

後輩からの憧憬。

「藍ならでざるつで信じでだで〜」

同期の涙交じりの歓喜。

「おめでとう」

先輩からの祝いの言葉。

「ほんま、ようやったな」

監督、コーチからの称賛。

全ての声が遠のいて聞こえる。各々の反応を、どこか他人事のように見ていた。山のようにいたであろう記者のインタビューも気づけば終わっていた程に、私は放心していた。

胸の奥にぽっかりと開いた孔。私の心に歓喜は無かった。

——周りの人間と、決定的な何かがズレている。

この世に生まれ落ちた時から、それは運命付けられていた。家庭でもどこか浮き気味で、本心で語り合えるような親友とは縁がなく。

それもそのはず。私は転生者で、元々あるべきではない後から付け加えられた存在。正道ではない。友達を失ったのも、自己満足の報いを受けただけ。考えてみれば、どれもこれも私の力を象徴するかのようだ。

ああ、そうか。漸く理解した。

私は、この世界で独りなのだ——

藍染

——荒川憩、宮永照、辻垣内智葉、小鳥谷藍の4名は次の制約を負う。

——1. 連続和了した者は8連続和了しなければならない。

——2. 誰かが連続和了した場合、その者が7連続和了するまで他家の和了りを禁ずる。

どこからともなく聞こえたその声は機械音声のように無機質で、見下すかのように冷たい。

小さく首を振るう。いつも通りのつもりだったが、幻聴が聞こえるほど緊張していたのかも。前年度チャンピオンとして、個人戦2連覇の重圧は思っていたより大きかったのかな。

……なんて、そんな訳がない。まだ席決めを終えて自動卓によって山が積まれたばかりで、対局は始まってすらいない。しかし戦いは既に始まっていると考える。対局者を見ると、私と同じように周りを見渡して声の主を探していた。ただ一人、千里山の小鳥

谷さんを除いて。

犯人は彼女、ということでもいいのかな。あの声は実際に発されたものではないことを、他の2人も分かっているみたい。耳ではなく心の中に響く声を聞くのは初めての感覚だった。こういう能力を持つ人もいるんだ。

ただ声を届けるだけの能力ではないのは明らか。まずは様子見をする。小鳥谷さん、彼女との対局は初めてで『照魔鏡』を使うことに変わりはないのだし。

東1局 親 憩

「ツモ。10000・20000」

東1局は、私が見に回ることを熟知している智葉がここぞとばかりに攻めつ気を出して和了。

照 河

〔五⑤④六六七〕

〔七九九九①〕

藍 河

〔五⑤④六六七〕

〔七九九九〕

あからさまに異常な河。これもまた彼女の能力なのだろう。でも同じ事。それも含めて見させてもらう。

彼女達の背後に、地中から『照魔鏡』が現れる。鏡は彼女達を映し出す。智葉と荒川さんは最近対局したばかりなので、その能力と本質が鏡に映ることはない。ただ姿が映るだけ。本命は、小鳥谷さん。

見える、その本質が。彼女の能力は『連続和了』と『真似満』、そして『照魔鏡』。

「……………え？」

鏡に映っていたのは私だった。対面に座る私が、私を見つめる。唯一違うのは、その瞳が藍色であること。

何度瞬きをしても、見える光景は変わらない。困惑する私に事態を把握する間も与えず、私の背後に鏡が現れる。

見られている、私の全てを。私がそうしたように、彼女もまた『照魔鏡』で私の能力を、本質を見抜いたのだ。互いの鏡が消え去って漸く、これが彼女の能力『真似満』によって齎されたものなのだと理解した。

彼女の本来持つ能力は見えなかった。その気になれば、化けの皮を剥いで彼女の内に

潜む真の能力を暴けたかもしれない。しかしいざ見ようとした瞬間、莫大な情報が流れ込んでくるイメージと、私が気絶する幻覚を見た。『照魔鏡』が私に警告を与えたのだ。鏡に自我があるとは思えないので、融通の利く能力だった、あるいは今しがた覚醒したと考える。こんな事は初めてだ。

——後から考えれば、見なくて正解だった。仮に警告が杞憂に過ぎなかったとしても、見えていれば戦意を喪失していただろうから。尤も、遅いか早いかの違いでしかないのだが。

「ツモ。5000オール」

東2局、私の親番。ここで勝負を仕掛ける。

「ツモ。8000オール」

2連続和了。これで妨害はできなくなった。この対局、私と小鳥谷さんのどちらが2連続和了を決めるかで勝負が決まると言っている。あの文言、他人だけにルールを強制するのではなく対称性のあるルールになっていた。恐らくそこが急所。自分でルールを設定できても、あからさまに有利な文言にはできない。更に一度決めたルールは彼女自身にさえ覆せない制約があると考えられる。つまり私がこうして連続和了に入ってしまうえば、彼女自身も止められない。

「ツモ。1200オール」

それにしても妙。小鳥谷さんに動揺や焦りが見られない。この程度はリスクの内として織り込み済みということなのかな。確かに私の連続和了より小鳥谷さんの連続和了の方が平均打点は高い。でもそれなら連続和了の成功回数で上回ればいい。

「ツモ。1600オール」

能力の詳細は分からないが、このルールにしたのは失策。この卓には私の連続和了の最大の障害になると予想していた荒川さんがいる。その彼女の能力を7連続和了まで封じてしまった。いくら打点上昇に制限がかかるとはいえ、8回目までに役満を出さなければいいだけのこと。その程度で私の連続和了は止められない。荒川さんの能力も、小鳥谷さんが他に能力を持つていたとしても、打点も支配力も乗った8回目なら貫通できる自信がある。

「ツモ。2400オール」

しかしこれは仕方のないことなのだろう。初出場とはいえ、彼女の連続和了は8回目天和になることは団体戦での活躍ぶりから広く知られている。7回目までは他家が和了れないようにするこのルールは、彼女自身がそこに至るまでを妨害されなかったものだと容易に見当が付く。この対局には荒川さんがいるので、小鳥谷さん自身の連続和了を確実に決めるためにはこうするしかなかった。8回目がその対象外なのは、同

不吉な手にしか見えない。確かに私にとつては8連続和了目ともなれば打点上昇で役満手が来ることはある。それにしてもこの配牌は、打点上昇の幅が飛躍し過ぎていて。次は跳満がくると思つていたけど、これでは役満確定になつてしまう。

北に伸びた手を、一萬に変える。

いや、どちらも罫だ。ここは手を崩す。

一索を切ろうとした手が、再び止まる。一瞬の逡巡の後、やはり北を切つた。誓つて欲を搔いたわけではない。そこまでの思考全てを読まれている可能性が頭をよぎつたからだ。あくまでもこの選択は攻めの一手ではなく、守りの一手。

「ロン」

藍　ロン

〔19①⑨一九東南西北白発中〕〔北〕

〔34100〕

8連続和了目を、失敗した。いや、失敗というのは適切ではない。何を切ろうと当たつていた。初めからこうなる事は決まっていたのだから、失敗も何もない。今の状況を表すなら、嵌められた、が正しい。

ところで、初めからというのとは一体どこからなのか？

その答えはすぐに、嫌でも思い知らされる。

——ルールを破つたな？

相変わらずの機械染みた冷徹な声。それでいて、今度は責め立てるかのように怒気を孕んでいる。

「罪人に刑罰を」

一つの意志に統率されたかのように、声が重なった。

思わず喉を鳴らす。

様子がおかしい。小鳥谷さんだけでなく、荒川さんや智葉までも。何かに取り憑かれたかのように雰囲気ガラリと変わった。声音が、脳裏に響いたあの声にどこか似ている。

東3局 親 智葉 ドラ (④)

照 配牌

{ 1 2 2 3 4 4 4 5 6 6 7 8 8 9 }

照打〔9〕

〔ロン〕

憩ロン

〔111234567899〕〔9〕

〔32000〕

東4局親藍ドラ〔南〕

照配牌

〔①②②④④④⑤赤⑤赤⑤⑥⑥⑥⑧⑧⑧⑨〕

照打〔⑨〕

〔ロン〕

智葉ロン

〔①①①①②②③④④⑤⑥⑥⑦⑧⑨⑨⑨〕〔⑨〕

〔32000〕

南1局親憩ドラ〔8〕

照配牌

〔一二二三三三三赤五五七七七八八九〕

照打〔九〕

「ロン」

藍 ロン

〔一二一二三四五六七八九九九〕〔九〕

「32000」

南1局終了時点

小鳥谷藍 75900

辻垣内智葉 46900

荒川憩 40900

宮永照 | 63800

4連続で第一打役満放銃。一瞬にしてトップから最下位へと転落した。

身を持って彼女の能力を知った。ルールを破った者は他の者から報復を受ける。二度と這い上がれないように、失格の烙印を押されるのだ。

私はふと、この能力の真の恐ろしさに気付いてしまった。この能力はもしかしたら、どんな能力を以てしても止めることが事実上不可能かもしれない。

まず、この能力は支配力を発揮するタイミングが巧妙すぎる。だって、ルールはただ宣言しているだけ。ルール自体に強制力がないということは、ルール自体には一切の支配力が無いということ。如何なる手段を持ってしても、無いものを無効化することはできない。

では、どこで支配力を発揮するのか？

当然、ルールが破られた瞬間。ペナルティを与えるという形で、支配力が働く。それまでは手出しができない。

この能力には支配力を高める3つのトリックが存在する。1つは、条件発動型の能力であるということ。もう1つは、本人さえもルールの適用範囲に含めるというリスクを背負っていること。

これだけなら、より強い支配力で押し込めば無効化できる。条件とリスクで2段重ねにバフされた支配力には、並大抵の能力では打ち勝つ事はできないだろうけど。普通ならこの手段が取れるから、どんな能力にだって理論上は攻略法が存在する。しかしこの能力は最後のトリックのせいで、それができない可能性がある。

ルールを破った時の異常な配牌からして、一見ペナルティは配牌を操作しているよう

に思える。つまり配牌操作能力と考えられる。だがもし、この能力が本当にルールに干渉しているとしたら？

同卓して対局を開始した時点で、ルールが改変されることに同意したことになる。嫌なら対局を拒否すればいいのだから。でも普通の遊びならともかく、公式戦でそんなことはできる訳がない。つまり回避不能。

この仮説が正しければ、同卓者4人分の支配力を間借りしていることになる。だって皆同意しているのだから。つまりこの能力の支配力は同卓者の誰にとつても、自分の支配力+ α 。その卓にいる者には絶対に覆せないことになる。

震えた。腕を抑えれば、鳥肌が立っていた。

あくまでも仮説、あくまでも仮説。そんなわけがない、そんなわけがない。

それでも私は、どこかで確信していたのだろう。言い聞かせても震えは止まらず、寧ろ悪化した。腕だけでなく全身が震え始める。

戦わないことだけが唯一の弱点なんて、こんな能力があつていいのか。神を降ろすとか、イタコとか、そんなのが兎戯に思えてくる。世界だとかプロだとか、そんなの足元にも及ばない。彼女は最強とか、そういう次元で語ること自体が滑稽で鳥肌がましい。人間の背比べに天体を持ち出すようなもの。一番背が高いのは太陽、なんて言うのは幼

稚園児くらいだ。

そっか。今まで私が倒してきた人達は、こういう気持ちだったんだ。

敗北への恐怖は無かった。ただ、彼女への畏怖だけがあった。何のために対局しているのかすら忘れさせる程に。避けようのない世界の終焉が訪れたかのように、ただ怯えて時を過ごした。

そこからは彼女の独擅場だった。連続和了を封じられた私も、ルールを破ればどうなるかを見せつけられた二人もそれ以来攻めつ気を失い、小鳥谷さんがこの場を支配し続けた。最初から何もかも掌の上だったのだ。

その伽藍堂の瞳には、最早私など映っていなかった。

小鳥谷藍という存在

「藍は、高校卒業したらどうするつもりなん？」

パチン、と小気味いい打牌音が響く部室。私は気になっていた事を訊いた。インターハイに向けて部員は皆、練習に夢中。だが三年生は、進路を気に掛ける必要もある。

「うーん。まあ、大学行こうかなって思ってるよ」

「プロとか目指さへんの？」

切り出そうとした牌を掴んだまま、藍の手が止まる。

「……別にいいかな」

彼女の実力なら成れるはずなのに。否。彼女を知るものなら、成るべきと口を揃えるだろう。

「元々、麻雀をやっているのは清水谷さんに麻雀部に入れられたからだし。皆と遊ぶためにやってるだけだよ」

？だ。切っ掛けはそうであったとしても、今は違う。個人戦に出場したのがその証拠。紛れもなく自分のためだ。

指摘を口に出すことは、この関係性に罅を入れるだけだと知っている。

藍は小学生の頃、そのあまりの強さに友達を失ったのだという。勿論それも彼女が全力を秘す理由なのだろう。誰だって、そんなことは二度と繰り返したくない。

でも、理由はそれだけではないはず。私には藍の気持ちが分かる。彼女は私と同じだから。

藍の麻雀を見ていると、昔の私を思い出す。全力を出すことを恐れていた小学生の頃を。

怜にわざと差し込んでいたことを知られた時、友情を失ったと思った。後日怜に挑まれた麻雀で、本気で相手をさせられた。初めて自分のために和了った役満も、つまらなく感じた。全力で麻雀を打って楽しむなど不可能だと思っていた。そんなことをしたら皆すぐ死んでしまうやんか、と。

でも怜が私の目を覚ましてくれた。怜を助けているつもりが、実は私が助けられていたのだと知った。私は危うく本当の友達を失うところだったのだ。藍にはそんな目に遭って欲しくない。全力で麻雀を打つ楽しみを知ってほしい。全力でぶつかり合うからこそ得られる、本当の友達が彼女には必要だ。

私には怜がいた。でも、藍には私にとっての怜はいない。本気の彼女の相手になるよ

うな存在がない。私にはその役は不可能だった。

去年に藍が優勝した時、私達は心の底から喜んだし、盛大に祝った。彼女と周囲の温度差には、後になってから気づいた。藍は、単に優勝したかったのではない。自分がどこまでできるか、挑戦するつもりだったのだ。でも、優勝した時には挑戦どころか対等に渡り合える相手すらいないことに気づいてしまった。

それでも尚、藍は今年も個人戦に出場する。その理由は一つしかないことを、彼女は自覚しているのだろうか。

藍はまだ、自分と戦いになる存在が現れることを諦めきれていない。

相手が自身に敵わずとも、全力で向き合うことが友情の鍵となる。そうした怜は今や、私と対等に渡り合える実力を得た。いつか現れるかもしれない藍にとっての怜に對して、私と同じ過ちを犯させないため。私は藍に無理を強いる。

願わくば、どうか早く。彼女が完全に諦めてしまう前に。

私にはただ待つことしかできない。

「駄目ね、まったく分からない」

手にした紙を放り投げて、仰向けに倒れる。和と優希、咲がAブロックの準決勝を見るため出払った清澄の宿泊室で、私達は明日の準決勝のために牌譜分析をしていた。その牌譜というのが、千里山の大将にして個人戦チャンピオンの小鳥谷藍のもの。その注力は、他の選手の比ではない。彼女を攻略しない限り、私達に優勝はないのだから。彼女の対策だけに残り一日を丸々かけるつもりだが、それでも尚時間が足りないというのが本音。

「これでは私、あまり役に立たないわね」

美穂子が、申し訳なきように目尻を落とす。風越のメンバーである彼女は、本来私達に手を貸す必要はない。それでも個人戦があるからと、この研究会に参加してくれた。彼女はその能力を活かして、対戦の映像からチャンピオンの癖を分析してくれている。「大丈夫よ。普通に牌譜検討してくれるだけでもありがたいから」

美穂子が自分のことを役に立たないと卑下したのは、決して力不足だからではない。ただ、もはや癖を見抜いたところでどうにかなるレベルを超えているだけ。それでも根気強く付き合ってくれる彼女には頭が上がらない。

「咲なら何か分かるかもって、思ったんだけどねえ」

実際に卓に座った者にしか分からない事があるかもと、昨日の試合の後に問い詰めたのだけだ。

一つは、積材が思うように集まらない局が一度だけあったということ。もしこれが彼女の能力によるもので、対局中常に發揮されるのであれば、咲にとつての天敵に他ならない。

もう一つは、後半戦をプライゼロで終わらせたのは余裕があったからではなく、プライゼロに持つていく方法でしか2位浮上できる気がしなかったということ。ツモやロンで他2校から削ろうとすれば、逆にこちらが千里山に狙われるという危険を感じたのだとか。かといってロンによる千里山からの出和了りは聴牌気配から気取られる。天江衣のような聴牌気配を読む力があるのか、持ち前の技量からか。あるいは咲固有の癖を見抜かれているのか。大明槓による連続責任払いは傍から見ているとこちらがペースを握っているように見えたが、実際は寧ろその方が簡単だと感じたからに過ぎない。

それ以外は、概ね私達が得た情報と同じだ。総合すると、チャンピオンが想定以上にこちらの対策をしているということになる。対策を練るところか、状況は更に悪化したと言っている。

「連続和了と人和、ねえ」

連続和了は徐々に和了する巡目が早くなる傾向がある。親の時しか連続和了しないと思っていたのだけど、過去の牌譜を漁ると僅かだが子の時から連続和了を始めているパターンも見つけた。でもその時は8回目が天和になつていなかった。このことは当然、本人も理解しているでしょうね。だからこそ、親番以外では滅多に連続和了しない。彼女の親番に狙いを絞って最初の和了をさせず早和了で流す、というのが結論。このへんはやはり、咲のお姉さん——白糸台の先鋒と似たようなもの。

人和は咲との試合では見せなかつたけど、狙って回避することは不可能。通常の麻雀の理屈では太刀打ちできない。癖や当たり牌の傾向など何かがあればと思って美穂子に頼んだけど、見つからなかつた。

既に十分脅威的なのだけど、これだけでは不自然な打ち筋を説明できない。私達が気づいていないオカルトが。まだ何かあるはず。そう思って牌譜と格闘していたのだけど、状況は芳しくない。完全に手詰まりに陥っていた。

「例の連続和了の親の2本場での和了り。これが一番不自然なんじゃ」

2本場 藍 東家 ツモ ドラ (一八)

〔三三南南白白〕 〔南〕 〔横西西西〕 〔発発横発〕

藍 河

〔一九九二七七〕

〔3北北二〕

その時の和了形と、河がこう。

〔三三南南北北白 白〕の形から、北を対子落とし。そこから〔二〕、〔白〕と自摸ってきて聴牌という流れになる。

あり得ない選択。普通この形なら誰だつて字一色を夢見て〔三〕切りしたくなる。この巡目ではまだ誰も聴牌していないし、それは河からも十分推察できる。残る〔南北白〕は河に出していない。

字一色は断念して堅実に和了りに行く。〔北〕切りはそういう性格だと説明できても、その後の〔二〕切りの選択もおかしい。〔三〕は残る2枚とも河に出ている。つまりシャボ待ちの所を〔三〕は雀頭で固定して、〔南〕のみの待ち。〔二〕切りではなく〔三〕を切つて、〔二四〕の両面待ちでも良かったはず。確かに対々和と南は付くが、端から字一色を捨てておいて今更この程度の打点を求めるのでは一貫性が無い。

「私の『悪待ち』と似ている……?」

この選択によって発揮される何らかの能力による補正を信じた。そう捉えることもできる。

「確かに、(一四)待ちを(南)待ちにしたのは『悪待ち』みたいなものと説明できる。でもそうすると今度は(北)切りのほうが説明つかんくなる。あそこで(北)を残して(三三)を切っていたら字一色で和了れとおからのう」

「それって結果論じゃないかしら?」

「結果論だからこそ意味があるんじゃない?」

通常であれば公開情報から得られる確率こそ重要で、見えない情報——結果論に踊らされているようでは勝てない。だが、奇妙な打ち方をオカルトする手合いにおいてはそれが逆転する。確率に縋り、事実から目を背ける者が負ける。そういう世界なのは、私も痛感している。

『悪待ち』は、待ちの数を減らす代わりに待ち牌が変わる。流石の私も、(一四)待ちを(一)待ちにするようなことはしない。待ちを変えたことで本来和了れなかったものが和了れるようになるからこそ、意味がある。

この理論に照らし合わせるなら、(北)を残しても字一色で和了れていたのに態々(北)を捨てたのでは意味がない。

「ただ打点を落とすただけつちゆうことになるのう」

「通常の麻雀でも、結果論の世界でも不自然な打ち方。そう言いたいよね？」

通常の麻雀ではありえない選択をしたということ、この捨て牌選択には間違いなくオカルトが絡んでいる。しかし結果論で考えたと裏目になっている。オカルトを持つ者は、オカルトを見越して行動する。とすると、オカルトが絡んでいるのに結果論で裏目というのは矛盾している。この違和感は、まことに言われないと気付かなかったかも。

山の状況が分かるようなオカルトならこんなことは起きない。かといって、「北」を捨てたからこそ後の「南白」を引いてこられたというのは些か受け入れ難い。永水女子の薄墨初美という、『北家で北と東を鳴くことで南と西が集まる』という例があるが、あれは鳴くことによつて自摸順がずれている。鳴きなどの各家の行動もある程度込みで、全ては山が積まれた時点で決まっていたと考えればそう不自然ではない。しかし牌を切るだけではどちらにせよ自摸順はずれない。捨て牌の違いによつて他家の行動選択に影響を及ぼした可能性もあるが、今回はどう動いても他家が鳴きを入れられる場面は無かった。つまり――

「打牌によつて山の状態が変わったことになってしまっわね」

「まさにシュレディングアの猫、遅延選択実験じゃー！」

「それ、使い方合ってるの？」

聞きかじりの量子力学ネタほど信用ならないものはない。

とはいえ、まこの言うようにどう解釈すればいいか分からないのは事実。今まで私達が見てきたオカルトは、運命付けられているかのように奇跡的な現象が起こっていた。一方、このケースはそれに当てはまらない。山の初期配置に干渉する過去改変、または牌自体が一瞬にして置き換わる瞬間移動や現実改変と解釈せざるを得ない。

ああでもないこうでもない、私とまこの間で議論が白熱する。一步進んでは、また新たな謎にぶつかるとの繰り返し。

この方向性で攻めるのは間違っているのではないか、と他の牌譜を漁っていると。

「こりゃ、どつかで見た覚えがあるんじゃないがのう」

「本当!?!」

食い気味に問い詰めると、つい最近見た、と頭を掻きながら答える。まこは卓上を顔として記憶する。もしまこに見覚えがあるというなら、それは過去に似た打ち手を見たということ。それが能力者であるなら、能力もまた似た者同士である可能性が高い。つまり、チャンピオンの謎を解き明かす最大の鍵となるはず。

「染谷さんが最近見た打ち手というと、臨海女子の郝慧宇かしら」

「そう、それじゃ」

美穂子の助け舟に、まこが反応を示す。

臨海女子。そちらの研究は他所の2回戦を観戦しながら済ませていた。ハ才は、まこ

の準決勝での対戦相手。香港から来た特待生で、昨年のU-15アジア大会では銀メダルを獲得している。彼女の特徴は、中国麻將のルールを前提としたような打ち筋にある。

「チャンピオンの打ち筋にも、中国麻將が入ってるってこと？」

「いんや、わしゃ中国麻將のルールなんて詳しくは知らん。似た雰囲気を感じただけじゃ」

チャンピオンの打ち筋には、牌効率や打点を考慮した攻撃、危険牌を考慮した防御といった観点から見ても、不自然な点が多い。しかしその選択が、結果的には良い方向に働いている。その点が、ハオの特徴と酷似している。

「ああでも、この連続和了の4本場は日本でも有名な『三連刻』じゃな」

4本場 藍 ツモ ドラ ②

〔四四四五五六六東東〕 〔六〕 ①横①①

『三連刻』。同色で連続した3つの刻子を揃える不採用役であることは、私も辛うじて知っている。喰いタン後付け、赤やウマオカ、責任払いの取り扱いといった細かいルールが違いこそすれ、役は画一化されて久しい。役の有り無しで揉めていたらキリがないからだ。初めは大規模な公式大会や団体が協議してルールを固定化し、それが個人大会、雀荘、仲間内でも浸透していき、いつしかそれに倣うことが暗黙の了解となってい

たという。何しろ、私が生まれるより前の話だ。不採用役なんて、今時知っている人の方が少ない。

気になってスマホで検索を掛けてみると、『三連刻』のことを中国麻将ではイーツーサンチエガオ『一色三節高』と呼ぶらしい。

『三連刻』、『人和』。どちらも今では採用されていない役ね」

「例の連続和了も、8回で終わることが殆ど。『八連荘』とすることもできるのう」

3つの偶然が重なれば、それはもはや必然オカルト。自然、私達は結論へと至る。

『ローカル役』。それがチャンピオンの能力」

私達にはローカル役の知識なんてない。でも文明ネツの利器トの力を借りれば、後は一つ一つ検証していくだけ。どのような場面で、どのようなローカル役になるのか。それが分かれば対策の糸口が掴める。視界がついに開けた。

牌譜を再度洗い出して一時間後。結果的に、チャンピオンの和了からは同じようにローカル役に該当するケースが幾らか見つかった。

しかし分かることが増えれば増えるほど、喉元に棘のように刺さって取れない不可解さをより浮き彫りにした。

「やっぱりさっきの字一色取らずが引つかかるわね」

「あの形が何らかのローカル役で、自分の能力の方を信じたってことじゃないかしら？」
美穂子はそう言うが、あの違和感が私の思考から離れない。どうしてもその反論を否定したくなる。

「私だって毎回『悪待ち』をするわけじゃないわ。仮に和了れなくても十分狙うに値する手だと思わない？」

点数状況的に無理をする必要が無いとはいえ、それを言うならそもそもこの連続和了自体必要ない。事実チャンピオンは意図的に和了をした以上、点数を稼ごうという意志はあることになる。であれば、この役満手を逃す理由はどこにあるのか？

「あくまで8連続和了達成の方を重視して、ローカル役を目指すことでの和了補正を信じたと考えればどう？」

「……それなら、まあ」

それも考えられるけど、そうせざるを得ない理由があるとしたら。もしそうなら最大の弱点となり得る。そうあって欲しいという願望にすぎないのかもしれない。でも私の中では既に、理屈を超えた結論が出ていた。

『ローカル役でしかあがれない』と。

有珠山高校エ……

「ほしいわ、この子」

監督がまたしても浮気性を発揮する。モニターには去年の個人戦決勝の映像。監督が欲しいと言ったのは小鳥谷藍のことだ。

「うちの先鋒はサトハでスヨ」

学校の方針で留学生を取る臨海女子は、日本人しかオーダーできなくなつた先鋒が唯一の日本人枠。その席は既に私が座っている以上、他の日本人を取るということは私を外すという意味でもある。ダヴァンは私を庇うつもりなのか、ムツとした表情で抗議した。心配せずとも、監督はそういうつもりで言ったのではないと思うが。

「そうじゃなくて。私が日本代表を組織するなら、彼女は外せないという意味。それもエースでね」

「そんなに強いのか？」

ネリーが小鳥谷の強さに疑問を呈する。映像を見るだけでも、圧倒的な強さであることは分かるだろうに。意地を張っているのか、自信があるのか。

「強いなんてレベルじゃない。あれはもう無敵だ」

映像だけでは何が起きているのか分かりづらい。傍から見ていると、いつも通り宮永照が連続和了を決めたが、4連続で初打役満放銃という天変地異級の不運に見舞われたようにしか見えない。ネリーも、それが間違いなく能力による物だとは確信できているだろう。が、点数のインパクトが強すぎるが故に威力だけが全てだと思ひ込んでしまっている。そちらは寧ろおまけに過ぎない。

対局した私は知っている。映像で見ると以上に、実際は遙かに恐ろしい事が起きているのだと。これが最初から最後まで緻密に練られた罠であるということには、あの卓に座った者しか分からないのだ。

「確かに、サトハや宮永照に勝った実力なら世界ジュニアでも通用するでしょうネ」

「勘違いしてるみたいだけど、私の言う日本代表は世界ジュニアじゃなくて世界選手権よ」

だからこそ、小鳥谷の強さを正しく認識できている監督に驚いた。

「サトハ、そろそろ聞かせて。大将にネリーを推薦した理由を」

「どういうことでスカ？」

私が進言せずとも、監督は大将をネリーに据えるつもりだった。それでも私は、ネリーを大将にするよう念押しした。

「あるんでしょ、この子の対抗策」

宮永曰く、他人の支配力を間借りしているが故に何者にも打ち破れないという。そしてルールを破れば即集団リンチ。一見無敵の力だが、その強力すぎる支配力を担保するために生じる隙がある。

準決勝 中堅戦終了

千里山 1 4 7 1 0 0

臨海女子 1 3 1 3 0 0

清澄 1 1 1 4 0 0

有珠山 1 0 2 0 0 0

シード校2校がぶつかると準決勝は激しい戦いになることが予想されたが、副将戦まで存外呆気なく進んだ。

というのもまあ、対局者を見れば分かる。

まずは先鋒戦。

有珠山高校の本内成香。こっちは警戒する必要はない。寧ろここが削られ過ぎると後々の状況によつては飛んでしまわないか気を配らなければならぬため大変だ。

清澄高校は片岡優希。2回戦で戦っているのでやる事は同じ。東場をさつさと流せばいい。私はここを決勝に持つて行きたいが、他の皆が無理して意識する必要はない。

そして、最も警戒すべき臨海女子の辻垣内智葉。というか、先鋒に限らずシード校の臨海女子はどこも要注意だ。しかし一巡先を視ることができる怜にとって、間合いを見計らう彼女は恐るるに足らない。

この対戦カードから起きた試合展開は、実に単純明快。東場は臨海と千里山が協力して速攻で流し、清澄を封殺。南場で臨海女子と千里山女子の一騎打ちが行われ、相性差で怜が勝利しリードを得る。流石エースキラー怜、頼りになる。有珠山は何かとぼつちり喰らつてた。

そして次鋒戦。

有珠山高校は松森誓子。何というか、この高校は副将と大将以外特筆すべきことが無いんだよね。普通に麻雀打つ分には悪くないんだけど、正直準決勝どころか2回戦に出てこれるレベルかというところ……。

清澄は染谷まこ。やはり2回戦で戦っているので省略。

臨海女子は郝慧宇。彼女は中国麻將の役に則つた打ち方をする。ハッキリ言って、私

との対局に慣れた千里山レギュラーにとつてはそこまで脅威ではない。相手の未知の法則に従った打ち筋に惑わされず自分の打ち方を貫き通す心、そしてその法則を見抜く力が身につけている。私も中国麻將の役由来の能力を持っているので、実戦形式で練習もできる。そして何よりそれらを最大限活かせるフナQが次鋒というのが、対戦カードとしてこれ以上ない最適だった。

結果、点数の移動こそ少なかつたものの臨海女子からの直撃を喰らうことなく、堅実に和了を重ねてプラス収支で一位をキープ。

最後に中堅戦。

有珠山は（ry

清澄の竹井久はラスの有珠山を背負つて3位という苦しい立ち位置だが、んなこと知るかとはばかりに果敢に攻めたてた。何だかんだここが中堅戦一番のネック。悪い待ちを敢えて選択すると分かっているれば危険牌を絞れるのだが、相手はそれを逆手に取ることもできる。能力が曖昧で応用性が高く、こちらが能力無しだとスピードで押しきるか多少の攻撃は喰らいつつも高打点による期待値差で勝つしか応手が見えない。

臨海女子は雀明華^{デューミョンゾウ}。彼女は自風牌や場風牌を集めるといふ分かりやすい能力を持つており、シンプルゆえに風牌を抱えて防御にも使える優秀な能力だ。

同じ風牌が4つ集まることはなく、自風牌は毎回暗刻で持っているのがほぼ確実。歌

うと場風牌も集め出して対子になりやすい。

専門家には劣るが、私も字牌を狙って集めることはある程度可能だ。次鋒の郝慧宇と同じく実戦形式で対策を練られたのは大きかった。幸いなことに風牌を集められるからといって字一色や小四喜を狙うのは現実的ではないようで、打点も混一色絡みくらいか。役牌がデフォオなのでドラ重ねて役牌のみダマのケースが怖いが、それさえ警戒していれば不意を打たれるリスクは軽減される。となれば後は高打点で勝負するセーラが、最高打点に伸び悩む臨海女子とのダメージレースで最悪でも互角に持つて行つてくれる。

攻撃面でまだ何か隠している可能性もあるが、幸い状況が味方した。臨海女子の気持ちとしては、有珠山高校がトビそうな状況下で無理に一位のうちの捲るより3位の清澄に捲られる方が今は怖い。

結果、清澄に場を荒らされたがそれでも千里山はプラス収支を維持して1位をキープ。堅実に守りに徹した臨海女子が2位。全体的に上位3校の差が圧縮される形になった。

ここまで順調だったが、副将戦となつて雲行きが変わる。

「臨海女子の副将……メガン・ダヴァンやったか」

フナQの分析によると、メガン・ダヴァンは自分が聴牌している時に他家の聴牌を悟る能力がある。更に自分と相手が聴牌した時、3順目に当たり牌を掴ませて直撃を取る。

姉帯豊音の先負を彷彿とさせるが、これはそれより尚厄介だ。まず相手がリーチしなくても聴牌さえすればいいというのがデカイ。更にこちらが鳴いて聴牌しても発動するようで、スピードで逃げる事ができない。自分が聴牌している時限定とはいえ、聴牌気配察知能力でこちらの攻撃タイミングを読まれるのも痛い。それでいてカラ切りによる聴牌隠しもしてくるので、こちらはメガン・ダヴァンの聴牌気配が読みにくい。運よく先に聴牌していたとしても向こうが聴牌していたら直撃を喰らうので、突っ走るには勇気がいる。

「清水谷先輩も『無極点』状態なら聴牌気配を読めるんですけど」

「私とおんなしでりゅーかも頻繁には使えんからなあ」

寝そべった怜が枕に顔を押し付けながら、若干くぐもった声を上げる。怜は先鋒戦で消耗しすぎた。東場は片岡優希の早和了り潰し、南場は間合いを読んできると辻垣内さんと未来視続き。特に辻垣内さんは消耗もなく常時こちらの隙を窺ってくるので、息をつく暇がない。副将戦までになんとか試合観戦ができる程度には回復したが、清水谷さんも心休まらなかっただろう。

「二「テンパイ」」

「流局です。4人全員の聴牌で臨海女子の親が続行されます」

点数状況的にはうちがまだ勝っているものの試合展開は完全にダヴァンが支配し、刺すか刺されるかのスリリングな戦いが繰り広げられている。

「4人全員聴牌で流局なんて見ててハラハラするわ」

「いや……セーラ、これは」

「どうかしはったんですか、小鳥谷先輩？」

そうか。その手があったか。

「メガン・ダヴァンは多軒聴牌には対応できない」

前半戦終了後インターバル。私はそれを清水谷さんに話した。

ダヴァンの能力の最大の救いは、両者聴牌となって発動しても必ず負けるとは限らないところだろう。3巡目が来るまでにこちらが和了ってしまえばいい。狙ってそんなことができればの話だが。聴牌後2巡目までに和了れなかったら聴牌を崩して再聴牌。この『和了抽選』を和了れるまで行うのが一番安全な策。しかしダヴァンが聴牌していなかった場合は無駄足になるし、無理に聴牌を崩すことで打点が減少するのが痛い。あとフリテンになりやすいと、良いことが無い。

だが聴牌者が増えるとそれだけこの『和了抽選』の回数が増え、ダヴァンにとっては他家に和了されるリスクが高まる。

「うちらは1位で無理する必要が無いから、その『和了抽選』だけ狙っていけばいいってことやんな？」

「うん。それで2位で私に回すことになっても構わない」

「2位かあ。それはちよつと悔しいから、もつと積極的攻めにも行きたいところやけど。藍がそう言うなら、分かったわ」

でも、と清水谷さんは続ける。

「代わりに約束して。次の大将戦、アレを使うって」

……。

「い、いよ」

私が卓に着くのは、この夏が最後。清水谷さんには、私の心なんてお見通しみたいだ。そろそろ、すっぱり諦める覚悟をするべきかもしれない。

「大盤振る舞いしちやおうかな」

そのための布石は打った。信念を曲げてまで龍門測を通して清澄に情報を流した。臨海女子の大将選びには私を意識した筈。辻垣内さんは情報をどう活かすのだろうか。白糸台の大将も、最も多くの情報を持ち帰った宮永さんが何をしてくるか読めない。

全ては、この夏で決する。

後半戦。

約束通り、清水谷さんは防御に徹した。しかしここでついに有珠山が動く。

「左手や！」

8000オールの倍満ツモ。

有珠山は一日に一局だけ左手を使う。そしてその時には必ず大きな手を和了る。メガン・ダヴァンの3巡目直撃を凌ぐ支配力。いや、単純に3巡目がくるより先に和了ったからともとれるが、そこまで強力な使用制限があるなら真正面からでも勝てたであろうことは想像に難くない。

だがこれで有珠山は打ち止め。花火のような一発を和了ったが、それだけ。未だ点差は大きく開いており、副将戦で3位を捲れるかどうかも怪しい。後半戦開始早々に使ってくれたのは寧ろ有難い。原村和はデジタル派のため動きが読みやすい。これで警戒すべきはメガン・ダヴァンのみとなった。

あとは計画通り守る――

「手牌を伏せた？」

メガン・ダヴァンの突然の奇行。明らかに何か仕掛けているのだとは思うが。

「データには無い行動です」

「ここ最近で獲得した能力か、それとも隠してきたのか。」

「これじゃ手牌分からんやんか」

「私はさつきまでテレビ見てなかったからなんも分からへんわ」

「覚えていれば何とかなるけど、観客は面白くないね」

「フナQが局を変えると、モニターには理牌された手牌が表示される。」

「手牌を伏せたどころか、河も見てませぬね」

顔を伏せたダヴァン。確かにあの角度では自分の前の山までしか視界に入らないだろう。

「妙に引きが良いね」

引いてきた牌が有効牌である確率が高い。しかも9巡目で聴牌した。勿論運がいい時はもっと早い手なんてざらだが、明らかに異常な行動にこの強運が重なったことに意味がある。

ダヴァン 手牌 ドラ (6)

(三四五②③④23466白白)

依然俯いたまま。その局中は河を見られない制限でもあるのか。だとするとロン和了が封じられる。いや、自摸運の良さが聴牌後も続くならツモればいいだけだが。

「あれ、リーチしませんね」

リーチをかけなければ役無し。このままではロン和了りできない。いや、顔を伏せているからそれを考慮する必要はないのか。だとしてもリーチを掛けない意味は何だろう。

そのまま一巡自摸切りして、ダヴァンの手に役が付く。

ダヴァン 自摸（二） 打（五）

「これで三色付いたなあ」

ここで、ダヴァンが顔を上げ手牌を立てた。

「お、見えるようになったで」

「単に打点が欲しかったのか、手役制限か」

「はい?」

私自身、『ローカル役でしかあがれない』という制約が常日頃かかっている関係上、こういう何かに縛られたような手順みには敏感だ。

顔を上げた以上、その局中河を見れないという仮説は消えた。恐らくロン和了もできるだろう。それができるなら、和了るといふ一点にだけ限って言えば最初に聴牌した段階で顔を上げてリーチすれば良かったはず。問題は、それをしなかったのか、できなかったのかのどちらかという事。

1. 手牌と顔を伏せている間は引きが良くなるから、三色を狙いたがった。

2. リーチ以外の手役がなければ能力を解除することはできない。

どちらにせよこのタイミングで解除した以上、聴牌後も自摸運上昇は働くが和了牌は引いてこれないということは確定した。

「そして打点に固執するわりには解除してもリーチはかけない」

解除後にリーチをかけない理由があるのか、それともやはり手役制限があつたのか。

「あい、一人で納得しとらんと説明してえな」

「未完成の推理だから、今の段階だと説明しても納得できないかも。全部分かつたら言うよ」

これ以上推理するには情報が足りない。実際に戦っている清水谷さんなら不完全でも伝えるべきだが、生憎もうインターバルはない。

「その前にすぐ終わりそうだけど」

準決勝 副将戦終了

臨海女子 1 3 6 0 0 0

千里山 1 2 9 4 0 0

清澄 1 0 5 5 0 0

有珠山

2
9
1
0
0

取り消せよ……! 今の言葉……!

ネリー・ヴィルサラーゼ、臨海女子の大将。彼女はサカルトヴェロの留学生で、世界ジュニアでも活躍している実力者。

欠点は口の悪さ。対戦相手を煽る悪癖がある。その過激さといったら、姫松の愛宕洋榎の比ではない。

臨海女子はオーダーに各国からの留学生を起用している。世界ジュニアでは敵同士になるために、仲間同士でも手の内を全部は見せないそう。そんな臨海女子の中でもネリーは個人主義すぎるといえるのは、辻垣内さんの評。

「廊下ですれ違った時に滅茶苦茶言われたわ。『2位抜けお疲れ様、千里山でマイナスなのは清水谷だけだよ。足手纏いがいて助かった』って」

「何やそいつしばき倒したるか」

「セーラ、ステイステイ」

まさか清水谷さんが被害に遭うとは思わなかった。

「言わせておけばいいんですよ、こちらの作戦通りなんですから」

「うーんこのロリヒール」

「何いうてんの」

辻垣内さんによると、身長は140cmしかないらしい。何故その情報を私に伝えた。それでも肝心の麻雀に関する情報は与えないあたりはしつかりしている。

「藍！ 遠慮はいらん、ボコボコにしてこい」

「いずみんは目には目を、バッドマナーにはバッドマナーをつて言つてたわ」

「それはFPSかなんかの話ですよね」

時計を見ると、もう試合開始まで10分を切っている。最後まで騒ぐセーラの声を背に、控室を後にした。

対局室で、私は獅子原爽、宮永咲、ネリー・ヴィルサラージェの3名の少女と顔を合わせた。

ネリーはニヤニヤとこちらを見ている。

「……う？」

宮永咲が靴を脱いで、靴下まで脱いだ。願掛けか何かかだろうか。席順は既に決まっている。さて、約束通り最初から使わせて貰おう。

——獅子原爽、宮永咲、ネリー・ヴィルサラージェ、小鳥谷藍の4名は次の制約を負う。

——1. 連続和了した者は8連続和了しなければならぬ。
 ——2. 誰かが連続和了した場合、その者が7連続和了するまで他家の和了りを禁ずる。

挨拶代わりのテレパシー。ルールは敢えて去年と同じ。存在を知らない獅子原さんは忙しく視線が泳ぐ。知っていたとはいえここで使ってくるとは思わなかったのか、あるいは実際に体験するのは初めてだからかネリーと宮永咲の両名も肩が跳ねた。

「そんなルール、まともに取り合うと思う? 拒否するに決まってるよ」

しかしネリーはルールに対して拒絶の意志を見せる。ルールである以上同意しなければ何とかなると踏んだわけか。悪知恵は働くみたいだ。

「で、どうやって確かめるの?」

まさか考えてなかったとは言えない。これによって『ローカルルール』が無力化されたかどうかを知るには、実際にルールを破ってペナルティが発動するか試すしかない。

一回のペナルティがいくらになるかは辻垣内さんから聞いているはずだ。いや、去年の映像を見ればすぐに分かる。他家全員への役満放銃、すなわち96000点。一気にラスへ転落する。

誰かがファーストペンギンになる必要がある。

それができなければ、有るか分らないペナルティの影に怯えて結局ルールを守らざるを得ない。

「くっ」

どうやらそこまで考えていなかったらしい。辻垣内さんはこんな少し考えれば分かるような短絡的で浅い手は打たない。彼女の入れ知恵ではなく、本人が突発的に思いついたアイディアなのだろう。

「がっかりだよ、ネリー・ヴィルサラーゼ。口は達者だけど頭が足りてないんじゃないかな」

こめかみに指を当てるサインをすると、彼女は頬を引き攣らせながら青筋を立てる。煽られた分以上に、100倍に返して煽ってやる。

「哀れみ序でに教えると、その方法では『ローカルルール』は破れない。考えてもみるといい。入国しておいてお前の国の法律には従いません、なんて通ると思うか？」

ルールを拒否する能力なんてものがあれば話は別だが、口で何を言ったところで対局を始めた以上同意したも同じ。第一、そんな簡単に破れるような能力とは呼べない。ギリ、と更に歯軋りをするネリー。

「それとも君の国は治外法権が当たり前の未開国家なのか？」

決定的な言葉で、場の空気が凍る。

何の話か分からず聞いていた獅子原さんも、不味い事態だと気付いたらしい。

「およつと??流石にそれは——」

「取消せ
の言葉
?!?!?!?!?!」

俯いたネリーが、耳を劈くような怒声で獅子原さんの非難を遮った。

すまないがジョージア語はさっぱりなんだ。でも、何を言いたいのかは分かる。

「Don't insult my country」

顔を上げた彼女は、怒りから全身を震えさせて般若の形相でこちらを睨んでいた。

頭に血が上っていても母国語がこちらに通じる訳がないことは本人も分かり切っているのか、言語を直してきた。相手に合わせる事を嫌ったのか、それともよりネイティブに話せる方を選んだのかは分からないが、英語ではあったが。

馬鹿にするだなんて、とんでもない。私はただ質問しただけだ。私にそう思わせたのは、他ならぬ彼女自身の言動が原因。彼女だって世界ジュニアに出場する身。一度でも国を代表しているのだから、己の品性でお里を測られるのは当然だろう。自らの行いが招いた自業自得であり、私に怒るのは筋違いというものだ。

「If you apologize to her, I consider it」

そこまで言つて、初めて気が付いた。思考が攻撃的になつてゐる。どうやら私は怒つてゐるらしい。

「Or force me to take it back」
 「I'll force you to cry and beg for forgiveness」

対局開始のブザーが、鬨いのゴングとして鳴り響いた。

東1局 親 爽 ドラ〔北〕

臨海女子のヴィルサラージェさんと千里山女子の小鳥谷さんが喧嘩をして険悪な中で始まつた準決勝大将戦。憤怒の表情を隠しもしないヴィルサラージェさんと、無表情だが冷徹な瞳で静かに睨み返す小鳥谷さん。前者はその両目に炎を灯し、後者は左目から青白い光を淡く放つ。

卓上は一触即発の空気を醸し出している。

ううつ、こんなに居心地が悪いのは家族麻雀以来だよ。

けど、しつかりしなきや。部長と染谷先輩、それに風越の福路さんまで協力してチャ

ンピオンの秘密を暴いてくれたんだから。

それと衣ちゃん。脳裏に響く声に取り乱さなかったのは、衣ちゃんのおかげ。どうやら2回戦の後に小鳥谷さんと戦ったらしく、その時に見たというチャンピオンが持つもう一つの能力について教えてくれた。それはルールを課し、破った者からペナルティとして点数を徴収するというもの。

一度連続和了したら8連続和了するまで続けなければならず、他人の連続和了は妨害できない。

この状況下で、私が勝つにはどうしたらいいのか。できれば2位の千里山から直撃を獲りたいところだけど、1位と2位の差は小さい。拘らずにどちらか一校に絞って直撃を狙っていくか、自身の得点を重視してツモ和了——嶺上開花を狙っていくのが良いと思う。

その時、獅子原さんから白い雲のような何か霧散した。

この場の何かが変わった気配を感じて、思わず体が反応した。何か仕掛けてくる。

「リーチ」

爽 打〔横①〕

6巡目リーチ。間違いなく何かしてる。ここは流石にオリていくべきだろうけど、如何せん手が読みにくい。

「ツモ」

爽 ツモ 裏 (八)

〔12333334567888〕〔9〕

リーチ一発ツモ清一色一気通貫。(12456789)待ちの……8面張。しかもこの宣言牌、明らかに不要な牌。清一色でここまで引つ張るのは不自然。振り込みも期待して索子出しを誘うために敢えて残したんだ。それは不要な牌を抱えても和了れる自信があるからこそその芸当。

「12000オール」

これで有珠山高校は持ち点を一気に65100点まで戻す。

「続けて1本場！」

「!?」

親が和了つたら本場を積んで親を継続。それが麻雀のルール。何もおかしくない、当たり前前の事。でも、この状況下では喜ばしいことではない。何故なら親にとつては1本場での和了はすなわち連続和了になってしまうから。自分は和了りを放棄して他家が本場分を横から搔つ攫つていくのを黙って見ているしかない。

でも、獅子原さんの様子は違う。

——次も和了る気だ!!

東1局1本場 親 爽 ドラ〔3〕

まずい。獅子原さんはルールを無視して突っ込んでくる。

獅子原さんはルールを破ると何が起きるのか知らないんだ。いや、それどころか最初の小鳥谷さんのテレパシーによる宣言すら幻聴か何かだと思っっているのかも。その後のヴィルサラージェさんとのゴタゴタの印象が大きかったから、覚えていないとまではいえないが気を取られて警戒心が薄れてしまったというのは十分考えられる。

どうする。獅子原さんが連続和了を始めてしまったら、ほぼ間違いないと確信できると。そうなったら、そこで対局終了。私達は3位で敗退してしまう。

連続和了を始めたら、考えられるケースは二つ。

一つは、獅子原さんが7連続和了を達成する前に途中で失敗するケース。流局になった時どういう扱いになるのか分からない。それで連続和了未達と見なされるかもしれない。普通の麻雀なら他家が全員和了り放棄したとしても、和了れないことはさらにある。でも有珠山高校を準決勝まで引っ張ってきたエース、獅子原さんほどの実力者ならこれは心配ないかもしれない。

もう一つが、8連続和了目を小鳥谷さんに潰されるケース。敢えて8連荘目に他家が介入する余地を残している以上、何らかの方法で必ず潰されると言っていいたいだろう。恐

らくは、『八連荘』と対を成すもう一つの代名詞『人和』で。小鳥谷さんにはその自信があつたからこそ、去年の個人戦決勝でお姉ちゃんの連続和了を敢えて許したんだ。

このルール下で連続和了をするのは自殺行為に等しい。

去年のお姉ちゃんを見るに、役満4回分の128000点を稼ぐことができればペナルティを生き残れるだろうけど。仮に耐えられたとして、その場合最も得をするのはやはり小鳥谷さん。他家に32000点分の差を付けられる。

もしペナルティを喰らつてなお収支で小鳥谷さんに勝つつもりなら、6倍役満分の192000点差を連続和了中に埋めなければならない。当然連続和了中は他家全員が和了を放棄するので、直撃で差を詰めることはまず不可能。自分の和了点に換算すると、ツモ和了り縛りかつ全本場で親だとして四分の三の点数で済むので144000点。積み棒分を抜くと137700点を稼ぐ必要がある。一回あたり平均約19671点の和了が必要で、跳満でさえ和了る度に損をする計算になる。

このルール下では、実質的に小鳥谷さんだけが連続和了を許されていると言つていい。

止めなければ。獅子原さんが和了る前に、私が和了る！

「カン」

咲 カン〔裏88裏〕 新ドラ〔七〕

打点は度外視で、とにかく早く和了る。

「ツモ」

咲 北家 ツモ

〔二三四①②③⑥⑦22〕 〔⑧〕 〔裏88裏〕

「嶺上開花のみ。500・800」

東2局 親 藍 ドラ〔四〕

何とか危機は脱した。今度は、私が和了を放棄すればいい。

「ツモ」

藍 ツモ

〔②②②④④⑥⑥⑥赤567西西〕 〔④〕

「門前自摸三暗刻赤1、4000オール」

この局は小鳥谷さんが親。どのみち私に妨害する手段はなかったけど、ここで和了られたのは痛い。

「これでトップ逆転。どうしたネリー・ヴィルサラーゼ、お得意の差し込みはしないのか」

「リーチも掛けなかった奴がよく言う」
やりにくいよお。

東2局1本場 親 藍 ドラ〔③〕

何とかして連続和了を阻止しないと。自分達が連続和了をしないように気を付けていても、小鳥谷さんに和了られたら元も子もない。そしてその場合は有珠山高校が飛んで私達が敗退する可能性がある。

13巡目 咲 西家 手牌

〔三三四五①③⑤⑧⑨⑨②②②〕

なのに、中々聴牌できない。

このままじゃ間に合わない。

「リーチ」

藍 打〔横④〕

遂に余命宣告がなされる。もう一刻の猶予もない。一度連続和了が確定してしまえば終わる。少なくとも、あれだけ意気込んでいた打倒チャンピオンの目は限りなく薄くなる。こんなに呆気なく終わっていいの？ 皆が繋いでくれたバトンが、私のせいで――

ネリー 打〔③〕
「ロン」

爽 ロン

〔四五六七八④⑤23455〕 〔③〕

「3900は4200!」

和了ったのは、獅子原さんだった。首の皮一枚繋がった。ヴィルサラージェさんが、獅子原さんに差し込んだんだ。

でも、これでまた獅子原さんが連続和了をしかねない状況になった。このままではいつまで経ってもこの状況の繰り返し。打破するためにも、早目に何とか2位に浮上しないといと。

準決勝大将戦前半戦 東2局1本場終了時点

千里山 128900

臨海女子 115300

清澄 91300

有珠山 64500

守銭奴わからせ

東3局 親 ネリー ドラ (⑧)

私の状況を確認する。雲は大將戦開始時点で3つ、カムイは3体残していた。そのうち白いのは使ってしまった。カムイや雲を積極的に使わなかったのには理由がある。決勝進出のためには2位以内に入る必要があるわけだけど、そうなるのと2位から直撃を獲るのが効率的。しかし1位と2位の差は小さく、展開次第で覆るような状況。取り敢えずトビを回避するために白いのを使って堅実に稼いで、後は1位と2位の差が開き始めるまで狙い撃ちはせず様子見を決め込む算段だった。

今、1位と2位の点差は当初の6600点から13600点に開き、2位と私との差は100300点から50800点にまで迫った。2位の臨海女子の親番だし、攻めるならここしかない。

——はずなのに。

何かが引つかかる。

さっきのヴィルサラーゼの差し込み。あれは本当に小鳥谷さんの連続和了を阻止したかったからなのか？

2回戦では小鳥谷さんの連続和了はツモ和了だけで5万点〜6万点を各家から削った。もしあそこで連続和了が始まっていたら、うちが飛んでいた可能性は十分にあった。仮に生き残ってもそのまま自分の手で私を飛ばせばいい。

そうすれば、臨海女子は2位で決勝に上がれる。それはヴィルサラーゼも分かっていたはず。なのに阻止した。十中八九、プライドが2位抜けを許さなかったから連続和了を阻止したんだろうけど。元来の性格やチームの方針とは別に、あれだけ小鳥谷さんとチバチになってたし尚更そんなことは認められないってのも分かる。

けど、それにしただって差し込みまでするか？

過去の牌譜では、小鳥谷さんの連続和了は3連続和了達成までは普通に他家に妨害されて連続和了を失敗しているケースが見られる。そう考えるとまだあと2回妨害のチャンスは残っているのだから、差し込まずとも自力で和了るか他家が和了るのにかけてもいいはず。

確かに差し込みは堅実なプレイング。しかしそれを言うなら2位抜けで妥協しないのは堅実とはいえない。加えて、そこまで高いプライドを持っていながら自力で和了ら

ず差し込みなんて……なんというかちぐはぐだ。

自力で和了ることが難しい何かがあるのか、あるいはこの局で阻止しなければならぬ理由があつた？

——その時、私の中で忘れかけていたソレと繋がった。

そうだ、さっきの訳の分からないルール！

頭の中に響いたアレ。何なんだろうと思つてたけど、あれが他の人にも聞こえてたとしたら。

確か、『連続和了をしたら8回目まで和了し続ける』つてのと、『連続和了を許すと他家は和了してはならない』とかそんなんだっけか。

ヴィルサラーズの戦い方は、思えば攻めっ気に欠けていた。元々ここぞというところで一気に攻めるタイプではあるけど。思えば宮永さんもそんな感じだった気がする。というか、宮永さんに関しては明らかに普段より動きがぎこちない。とにかく他人の連続和了を阻止しようとしていた印象だった。自分が和了った後も仕事は終わつたつて感じで、やる気あんのかかってくらい全然攻めっ気が見えなかつたし。

多分だけど、ルールを破ると何かがある。そしてそれを皆恐れている。そんな中、小

鳥谷さんだけが意にも介さず攻めつ気があった。彼女の能力だとすると辻褄が合う。

これが何かしら意味のある能力なら、小鳥谷さんに連続和了を許すと止められなくなる。つまり猶予はあの局にしかなかった。でもあの局では自力では間に合わないというヴィルサラージェは判断して、差し込んだんだ。

小鳥谷さんの和了は早いけど、それは親番の時だけ。やられる前にやる、自分が連続和了をするという選択もあつた筈。その方が簡単なのに、二人はそうしなかった。

だとしたら、今私がすべき選択は。

「ツモ」

咲 南家 ツモ

〔456④赤⑤⑥⑧⑧四五六南南〕〔南〕

〔30000・60000です〕

和了を見送ること。

連続和了。二人はそこに何らかの罠があると察して、いや知っているんだろう。それが分かるまでは慎重にいこう。

要は連続和了をしなければいい。単発で一気に点数を稼ぐには親番で和了りたい。そう考えると次に親番が控える東4局も和了らずに見送るべきだ。この局は宮永さんも前局で和了つたので和了らないだろう。とすると小鳥谷さんかヴィルサラージェがこ

の局の和了者だが、できれば2位の臨海女子には和了って欲しくない。

南1局 親 爽 ドラ (三)

狙い通り、東4局は小鳥谷さんが跳満ツモして南入。ここで仕掛ける。

——赤いの！

6巡目 爽 手牌

(東東東南南南北北白白②③)

うん、いい感じに字牌が集まってきてる。字牌がこなくなる雲を他家に向けたからといって、自分に字牌が上手く集まってくるとは限らない。山の奥や王牌に埋まっちゃったりしてね。今日はかなりついでる。

できれば2位3位から直撃を取りたいところ。一番直撃を獲りたいのはヴィルサラーゼだけど、2回戦や過去の牌譜を見る限りのらりくらりと躲されそうなんだよなあ。小鳥谷さんには……うん。

——『寿命の支配者』！

よって消去法で宮永さんに向ける。点数も2位と近いしこつちを狙ってもそんな変わらなしいし。

これで当たり牌を宮永さんが掴む。

「カン」

咲 カン（裏①①裏）

あれ。

「もいっこ、カン」

咲 カン（裏④④裏）

んんん？

「ツモ。20000・40000！」

咲 ツモ

〔234五五七八〕（九）（裏④④裏）（裏①①裏）

当たり牌をカン材として飲まれちゃった。……向ける相手間違えたかな？

千里山女子高校控室。藍が大将戦に向かった後、怜はまだ完全に回復しきつたとは言えへんから竜華と一緒に仮眠室に戻っていった。明日は大事な決勝が控えとるしな。

藍を応援したい気持ちもあるやろうけど、ここは万全を期したい。

てなわけで、今は俺とフナQの二人だけや。

「今どない感じや」

「あ、監督」

ドアを開けて入ってきたのはうちの監督、愛宕雅枝。フナQの伯母でもある。

「さつきまでコーチ陣と一緒に見てたけど、折角やからあんたらと一緒に見ようと思っ
てな」

「南1局で清澄が和了ったところですよ」

ちやうど、実況解説のアナウンスが現在の状況を説明しようとしているところだっ
た。

「前半戦南2局、またもチャンピオンの親番。ここで現在の点数状況を確認しておきま
しょう！」

やたらテンションの高い実況は、アナウンサーの福与恒子。

準決勝大将戦前半戦 南1局1本場終了時点

千里山 135900

清澄 105300

臨海女子 104300
有珠山 54500

モニターに点数が表示される。現在、藍が2位以下と3万点以上離してトップを独走中。竜華に喧嘩売ったつちゆういけ好かない奴は3位に転落した。ここまでええとこ無しやったし、このままやと口だけの奴になるで。2位と僅差とはいえ、いい気味やわ。「このまま何事もなければええんやけどな」

「どうしたんですか監督。藍なら大丈夫ですよ」

そうや、藍が負けるはずあらへん。それは俺らが一番よう分かつとる。

「せやけど、相手が相手だけにな。有珠山高校の獅子原は藍みたいに変幻自在で、結局最後まで正体掴ませへんかった。ほんで臨海女子には個人戦決勝で藍のアレを直に体験した辻垣内智葉がおる。まず間違いなく対策してきとるはずや」

確かに有珠山高校の手は読めんけど、それは向こうも同じ。臨海女子に知られているつちゆうても、対策なんてできるはずがない。

南2局 親 藍 ドラ (7)

「ツモ」

藍 ツモ

{白白白北①②} {③} {一二横三} {1横23}

「2600オール」

『五門齊』での速攻。これは藍が親の連続和了、つまり『八連荘』を仕掛ける時の初動の定石。ここで終わらせる気か、藍。

南2局1本場 親 藍 ドラ〔発〕

ルールの保護があるから、この本場で和了つて一度連続和了コースに入ってしまったえばもう誰も止められへん。有珠山高校が5万点ちよつとやから、連荘すれば間違ひなく飛ばしに行く。そうなればゲームエンド。狙い通り清澄を2位で引き連れて、こちらは決勝に進出する。別に宮永照に辻垣内智葉を当てても構わんのやけどな。その方が東場も南場もカバーできるし。

ともかく、ここで終わらせるつもりやから次も早い手を狙っていく。そう思ってた。「嘘やろ」

藍 手牌

{一一一二三四五六七八九九九南}

「チャンピオン小鳥谷藍、ここでなんと純正九蓮宝燈聴牌！」

圧倒的強運。昔の俺なら鼻で笑つてたかもしれないけど、オカルトを目にしてきた身として流れというものが無いとは否定できひん。そしてもしあるなら、それは今間違ひなく藍にあると確信できる。でもこれやと——

「ローカル役が付かんな」

「ここにきて能力が裏目に出るんか……！」

純正九蓮宝燈はダブル役満としては採用されていなくていいところもある。現にインハイではダブルはないしな。そういう意味ではローカル役と言えなくもない。けど、これ単体ではペナルティの清算時とかの特殊な状況下でないとローカル役判定を得られることはない。つまりツモ和了りはない。

「捨て牌から染め手が濃厚なので、萬子は全部止められるでしょう」

解説の小鍛治健夜プロの言う通り、見え見えの清一色手。出和了りはまずない。

そして何より、仮に出たとしても藍は恐らく和了らない。

『ローカル役でしかあがれない』というルールを破ってしまった時、藍ベの身ナに何がル起きテるかイは俺達にも想像できへん。あるいは、意図的に破ること自体がでないか。

「リーチ」

「えっ」

藍 打〔横南〕

「……小鍛治プロ、これは？」

「わ、分かりません。今さらリーチを掛けなくても皆オリるでしょうし」

役満聴牌でも、リーチを掛ける場面というのは存在する。四暗刻みたいな高めで役満の時とか、早い巡目で国士無双張つたらリーチ掛けて公九牌を誘い出すとかな。でもこの状況でリーチを掛けるのは、ただ自らがオリるチャンス捨てるだけ。

実況と解説は混乱している。対局を見ている観客も皆同じ心境やろう。チャンピオンはついに狂ったかと。

でも、俺達は違った。

「これは……」

『『オーブンリーチ』を掛けたんか』

役満の場合、役満以外の他の役は数えず不成立とするのが一般的ルールや。でも藍のローカル役の場合は、役満であってもローカル役の形があればローカル役として和了った判定になる。ただし例外もある。それは役満がローカル役を完全に内包している場合。つまり字一色で和了ったからといって、『四字刻』としてローカル役で和了った判定は得られない。

今回の『オープンリーチ』は、その例には当てはまらない。

「確かにこれなら、オープンのデメリットは皆無やな」

「元々萬子の清一色と分かり切ってますからね」

藍の『オープンリーチ』は監督に披露した時より進化しとる。というより仕様を理解して使いこなせるようになったのが正しいか。

リーチ宣言時に手牌情報を相手にテレパシーで公開。ツモ和了りなら高めが出やすく、出和了りならその後の局に役満の直撃を獲る。しかも和了り牌を取り込んだ数が多い奴ほど、そいつは振り込まざるを得ない状況に追い込まれやすくなる。

それはつまり、和了り牌を取り込んだ奴は更に和了り牌を引いてきやすくなるつちゆうことや。そうしてどんどん追い込まれていく。

ネリー 手牌

(二三四七八67⑤⑥南南白白)

今最もその毒牙にかかっているのは——ネリー・ヴィルサラージェ。抱えた萬子の数は5枚と他家の中で一番多い。

「ヴィルサラージェちゃん言うたか。流石に世界ジュニアで結果残してるってだけはあるわ」

監督が感心の声を上げる。

ネリーは運の良し悪し、つまり流れとでもいうべきものを局の最初つから把握しているような打ち方をする。何が当たり牌かまで完全に知ってるのかは分からんけど、自分が和了れへんと分かてる局は最初からすっぱり諦めてオリか差し込みに回る。

今回は藍が和了ると知ってたんやろ。でもそれを止めようとしても、そもそも他家が聴牌してなきや差し込むもんも差し込めへん。恐らくは鳴いてすらしても藍が聴牌つてた、あるいは鳴くと自分が振り込んでまう運命になつてるんやろう。手が狭くなるからな。

やからネリーは、こうなる事を見越して『オーブンリーチ』より先に和了り牌になり得る牌を処理していった。

最初の内は手牌に偏りが無いように均等に捨て、藍が萬子の染め手に寄せたことを確認してからは萬子を優先的に処理。それでもなお5枚も残ってしまったあたり、運がない。

最も多くの当たり牌を抱えたネリーに、次々と萬子が集まってくる。

ネリーー 手牌

〔一一三三三四六七八八九一2⑤〕 〔五〕

こうなるともう、安牌が無くなるのが先か流局するのが先かの勝負。ネリーーは恐らく祈らない。たとえ振り込んでしまったとしても、それもまた運命として割り切つてしま

うだろうから。

だがどれだけ躲して時間稼ぎしようが――

「ツモ」

ツモれば終わりや。

藍 ツモ

〔一一一二三四五六七八九九〕 〔六〕

「16100オール」

藍の連続和了が開始した。それはつまり。

「終わったな」

準決勝の終了を意味する。

ターニングポイント

今、私達は臨海女子高校に僅か1000点差をつけて2位。有珠山高校は35800点。このまま連続和了が続けば、まず間違いないく飛ばせるそうです。それはつまり、私達が2位で決勝に進出すること。

部長や天江さん達に、チャンピオンの特殊な打ち筋については聞きました。未だに、そんなオカルト信じられません。

でも宮永さんや部長は信じている。私が戦う相手でもなし、私の意見だけを通そうとしても和を乱すだけです。だから一先ず、そこに異論を挟むのはやめます。

それによると他人にルールを強制させて、破った者から他3名が直撃を獲るのだとか。去年の個人戦決勝で、宮永さんのお姉さんがそれで役満を第一打に連続で4回も放銃したそうです。

……意味が分かりません。

「咲ちゃん、放心してるじえ」

「私らから託された情報を活かせんかった、とか考えとるんじやろ」

何より、今の宮永さんからは楽しんでるという感じがしません。らしくない、と言
い換えればいいでしょうか。

これが強敵との戦いなら、宮永さんも楽しめたでしょう。でも、もう私達全員が気付
いています。

相手にすらされていない、と。

部長達の分析によると、千里山女子は2回戦の時にわざと私達を2位抜けさせようと
した可能性があるそうです。恐らくは、決勝戦で白糸台に当てるため。完全に盤上の駒
として利用されているんです。

それはお姉さんに会うために麻雀部に入った宮永さんの決意を踏みにじる行為。

本人達はそんなことは知らないでしょう。知っていたとして、どうするも勝手。談合
しているわけでもなしルール上問題ありません。向こうも勝つため、優勝するために
やっていることです。狙ってできる芸当かどうかは別として、千里山女子だけが
やっているわけではないごくごく当たり前の戦略
でも。

「宮永さん……」

本当にこれでいいんでしょうか。

南2局2本場 親 藍 ドラ (9)

私達の控室には、妥協・諦観の空気が漂っていました。それは、モニターに映る選手達も同じだろうと。

「何にせよ、これで決勝に進出できたんだから」

だから、そう落ち込まないで。まだ決勝で報いるチャンスはある。多分そう続けようとした部長が見た先には。

たった一人、戦意を失っていない者がいました。

エルティ
「1」

——モニター越しに映るその瞳に、焔を幻視した。

「ロンー！」

藍 打 (1)

ネリー ロン

(2)(3)(4)(5)(6)(6)(6)(7)(7)(8)(8)(9)(9) (1)

「24600!!」

チャンピオンの連続和了中の和了、それはつまり。

「おおっと、ここで臨海女子のネリー・ヴィルサラーゼがチャンピオンの連続和了を阻止——！」

ルールを、破った？

「どういうことでしょう」

困惑する私達を他所に、モニターから聞こえる実況の声だけが元気に騒いでいます。

「臨海女子の点数状況を見て」

放心状態から一早く立ち直ったのは、部長でした。

「今の和了で110200点じゃが、それがどうかしたんか？」

「ペナルティによる放銃は役満3回分、96000点。つまり臨海女子はペナルティを喰らっても生き残るのよ」

どのみちこのままでと3位で敗退。それならペナルティを喰らっても対局を続行できる道を選んだ、ということですか？

「で、でもそんなことしたら点数が酷いことになります」

「それでも、だじえ」

勝利への道は限りなく遠のく。それでもゼロではない。

冷静になって考えてみれば、当たり前と言えば当たり前すぎる選択。それでも覚悟と

執念がなければ気付けなかっただろう選択。少なくとも私達は気付けなかった。敵ながら、素直に称賛せざるを得ない。そう思います。

——だから、次に起きた事には驚きました。

南三局 親 ネリー ドラ〔9〕

〔2〕^{オリ}

ネリー ツモ

〔222赤5566699〕〔5〕〔中中横中〕

「ツモ！ 8000オール！」

臨海女子が和了したのです。ペナルティを受けずに。

「どういうことだじえ、龍門渕の話と違うじよ」

「あの天江衣（ロリっ娘）、嘘ついたんか!？」

控室はまたしても混乱の渦に叩き込まれました。皆さんは衝撃を受けていますが、私はホツとしています。

「やっぱり、オカルトなんて有り得ないんですよ」

部の皆さんが信じているからって少しでも信じた私がどうかしてました。

「いえ、違うわ」

続く部長の発言は染谷先輩と私、その両方の説を否定するものでした。

「局数が足りないのよ」

局数が、足りない？

「ペナルティってそもそもどういうものだった？」

「破った者から他3名が役満の直撃を獲る、でしたか」

正確には役満である必要は無いらしいです。最大が役満というだけで、チャンピオン本人が自由に決められるのだとか。

「そう。そしてペナルティは平等に徴収される」

あつ。

「気付いたようね。全員が点数を得るには最低でも3局は必要になる。でも今は南3局。2局しか残ってないの」

「だからペナルティは起きなかった……？」

ペナルティを発生させるには局数が足りない、そんなこと気付きませんでした。

つまりこれは、法の抜け道。

「どうやら賭けに勝ったようだ。小鳥谷、お前の国には時効はないのか？」

画面の向こうでは見事この攻略法を実践して見せた当人、ネリー・ヴィルサラーゼさ

んがしてやったりといった表情でチャンピオンを挑発していました。

彼女は決死の覚悟で負けない道を選んだのではなく、勝つための道を選んでいたのです。

その時、つい先ほどまでチャンピオンの左目から放たれていた青白い光がフツと消えたような気がします。目も藍色ですし、光の反射がカメラにそういう風に映ってしまっていただけでしょうけど。

改めて見たチャンピオンの顔は、これまで見たこともない表情をしていました。

それはさながら、砂漠の中でオアシスを見つけたような。あるいは砂粒の中からダイヤモンドを探し当てたような。そんな時にこんな顔をするのだろうかという感想を抱きました。

「他人社垣内さんの入れ知恵で随分得意になるじゃないか」

そう呟いた彼女は、自らの戦略が破られたのに不服ではなさそうでした。

「それに私は、これを時効ではなく『無法地帯』と呼んでいる」

南三局一本場 親 ネリー ドラ〔東〕

勢サミに乗った臨海女子の猛攻は止まりません。

「3」

ネリー ツモ 新ドラ（4） 裏ドラ（⑦⑧）

（三四五六七八八東東東）（五）（裏二二裏）

「ツモ！ 8100オール！」

3連続目の和了で、遂に順位が入れ替わりました。

臨海女子 158500

千里山 151300

清澄 70500

有珠山 19700

モニターに映る点数状況が更新され、臨海女子がトップを取ったのです。

「小鳥谷藍の能力には穴がある」

サトハから小鳥谷とかいう奴の能力の概要を聞いた。曰く、対局にルールを設ける力。それを破れば他家全員への役満放銃という痛いペナルティが待っているらしい。

「簡単じゃないですか、連続和了中に3回以上役満を和了ればいいんです。だからネリーを選んだんでしょ？」

「ないない。最初は通ったとしても『8回目以外は役満で和了ってはならない』とか後からルールを付け加えられたらアウトよ」

監督によつてミヨン雀明華の発言は即否定された。ネリーでもそれは無理。第一、自分の親番が何時くるか事前に分かつてないと運の波をそこに合わせられない。

それにしても、ルールの付け加えか。そういう穴を事前に防がないのは油断か、誘つているのか。

「対局の途中でもルールが付け加えられたり変更されることはあるの?」

「分からない」

『ルール』は対局の始めにテレパシーのようなもので宣言されるんだっけ。それもブラフの可能性があるのか。

「ただ重要なのは、適用範囲には奴自身の名前もあつたということ」

「つまり本人にルールを破らせることができれば攻略できるつてことでスカ?」

メグメガン・ダヴァンが問う。確かに真つ向から能力に対抗できない以上、それしかないように思える。

「いや、それは難しいだろう。八回目の和了を失敗させることは奴の『八連荘』が天和になることからして不可能だ」

「『八連荘』?」

八連荘はインハイには採用されていなかったはず。ああでも、小鳥谷とかいう奴が連続和了の八回目にほぼ必ず天和を和了るってのは聞いたことある。その呼称か？

「世界ジュニアと一緒に出場した際に、宮永と研究会をしたことがあつてな。そこで奴の能力が『ローカル役』に起因しているという推察を聞かされた」

「それって、中国麻將の役も含まれるんでしょうか」

「かもしれない」

落ち込むハオ、お前にはお前のアイデンティティがある。

「何ですかその目は。私が戦いたかったな、と思っただけです」

「今度ラーメンを奢ってあげますヨ」

メグはこういう時ラーメンしか出てこない。ネリーはお金が欲しいんだけど。

「他にもルールを破らせる方法は色々あるのでは」

「鳴きでずらしたり能力で妨害して連続和了を途切れさせるとかはどうでしょう？」

「如何せん奴の手は読みにくいし、それくらいの對抗策は持つてるだろう」

……流石のネリーも連続和了に入るのを妨害するならともかく、ルールを破らせるのは無理そう。だって一度連続和了が始まれば差し込む相手がいなくなるんだから。

「そもそもルール自体が毎回同じとは限らない。公式戦での使用例は一回しか無いんだからな。どんなルールが来ても対応できる策が必要になる」

そんな都合の良い方法があるなら凄いいけど、それこそ夢物語に聞こえる。でも言っていることは正論だ。ルールの内容の粗をいくら探しても、塞がれるかルールを変えられたら振り出した。能力の方に着目して考えなければならぬ。

「小鳥谷は能力の支配力を高めるためか知らないが、『公平性』という制約を掛けている」
サトハは指を二つ立てて言う。

「一つはルールの適用範囲に自分を含める公平性。もう一つは破った者以外全員が点数を得る公平性」

「前者が駄目なら後者を突くってことなのね。はい、よく考えたわ」

監督はネリー達より先に理解したみたい。腕を組みながらしきりに頷いている。一人だけ分かったからってこれ見よがしにされるとなんかウザいんだけど。

「勿体振らずに早く教えてよ」

「全員が平等には点数を得られない状況にすれば、ルールを破っても大丈夫ってことだ」
サトハが言うには南3局と南4局、そして南2局でも輪荘すればルールを無視できるようになる。つまり南2と4局でなら小鳥谷が連続和了を始めてしまっても妨害できず。ただし、あくまでも仮説。前半戦でそれをした場合、余ったペナルティ分は後半戦で徴収される可能性もある。

これは賭けだ。運の波を南2と4局に固める。勿論、対局の8分の3の割合で強運を

得ることはできない。更に前半か後半のどちらかに絞ることになる。高い波を維持するなら3局ほどが限度。それでも私が起家じゃなかった場合は親番がどこかで重なって点数も稼ぎやすい。

南3局2本場 親 ネリー ドラ〔②〕

そう、そうだ。あの時はそう思った。でも今は意地がある。世界ジュニアのことも考えるとヘソクリを見せるわけにはいかない。上等だ。調整した高波に乗っていない時も、与えられた波でやりくりしてきたのはいつもと同じ。

3連続和了、このまま終わらせるつもりなんてない。否、このまま終わらせる。有珠山高校の点数は19700点。大将戦が始まった時を下回っている。運の波はピークは過ぎたがまだ下がり始めたばかり。このまま飛ばすくらい訳ない。

ネリーはお金があるの。お前なんかに負けるわけにはいかない。

その時フツと力が抜けて、急に何もかも読めなくなつた。運の波が感じられない。今のは獅子原か。こいつ、肝心な時に……!!

「カン」

爽 カン〔裏一 裏〕 新ドラ〔三〕

「リーチ！」

爽 打〔横⑤〕

「ツモ」

爽 ツモ

〔二二三四五七八中中中〕〔九〕〔裏一一裏〕

「リーチ一発ツモ混一色中」

裏ドラ〔二五〕

「ドラ6。8200・16200」

数え役満だと。クソ、折角仕留めるチャンスだったのに。

南四局 親 咲 ドラ〔3〕

今ので有珠山は飛びから遠ざかった。役満の親被りで折角取ったトップの座も千里山に移った。まだ波が感じられない。でも恐らくもう波は殆ど引いてしまっただろう。

何もかもが悪い方向へ動き始めている。これは小鳥谷の力ではない。全て獅子原がやったことだ。

ふざけるな。ネリーとこいつの戦いを邪魔するな。

咲 打〔南〕

「ロン」

一巡目 藍 ロン

〔12355678南南西西西〕

〔8000〕

前半戦は、小鳥谷の人和によつて締めくくられた。すっかり油断していた。運の波が読めないから。いや、読めていたとしても自分の振り込みが避けられるかどうかの話。宮永が振り込む分にはどうしようもない。

もうこれで準決勝が半分も終わってしまったのだという感覚と、まだ半分もあるという感覚。

ネリーは気が付けば放心していた。それは決して、絶望や焦りによつてではない。試合である故に発生するインターバルによつて水が差された結果、行き場の失った闘志が不完全燃焼を起こしたためである。つまり、闘牌以外のことが入らなくなっていた。

そしてそれは奴も同じで、有珠山と清澄が去った後もネリー達は暫く卓から動かなかつた。

「……ネリー・ヴィルサラーゼ」

あいつが私の名を呼ぶ。

「正直言つて、驚いた。私の『ローカルルール』の弱点を突いてきたのは君が初めてだ」

小鳥谷は二本の指を立てる。その仕草にサトハを思い出した。こいつとは何もかも違うのに。

「これを使った私と対局した人の行動は大抵二つだ。私の連続和了に気圧されるか、果敢にもルールに歯向かってペナルティを喰らう。いずれも東場の内に起こって、その後の末路も二つに決まっている。私と戦うことに恐怖を覚えるか、勝てないと諦めるか」
何もかも違うからこそ、気の迷いだと思つてサトハとの違いを探そうとしてみた。その時、こいつの顔を初めてしっかりと見た。憑き物が落ちたような、あるいは覚悟を決めたような顔だった。

「見抜くこと自体はそう難しくないはずなんだけどね。皆、弱点を突こうだとか考えられなくなるんだ」

困つたような、呆れたような声音で呟く。

「さつきは辻垣内さんの入れ知恵だと言つたけど、実行したのは君だ。だから勇氣と実力については素直に称賛しよう」

喜んでいられるように見えるし、悲しんでいるようにも見える。

「ネリーはまだお前のことを許してないぞ」

闘志を燃やしているようにも見えるし、怯えているようにも見える。

「分かつてる、私もだ。だから」

怒っているようにも見えないし、楽しんでいるようにも見えない。

「後半戦は本気で相手をする」

小鳥谷の右目が、光っていた。

ローカル役でしかあがれない

「なあ、藍。あんたの『ローカル役』、ホンマにローカル役以外で和了ろうとすると上手くいかへんのか？」

今年のスタメンが私、清水谷さん、怜、セーラ、フナQの5人に決まって1か月経ったか経ってないか。いつもの部室で監督とスタメンで軽く意見交換をしていると、不意にそんな質問が飛んできた。

「そういえば説明してませんでしたね、そういうところは」

もう1年以上の付き合いなのに、肝心な事を教えていなかった。基本的に私は、差し込みでもされない限りローカル役無しでは和了れないようになってる。

「例えば、私がこんな感じの手牌だとします」

藍 手牌

{23488④⑤二二二六七八}

{二二二で、{①③③⑥}}を山とします」

適当に手積みでシャツフルする。下家の監督から引いていって、私が最後に引く。

藍 自摸〔①〕

これで流局。私は四分の一の和了れない牌を引き当てた。

「偶々やないのか？」

「今のは余興ですよ、手積みでしたしね。今度はこうします」

藍 手牌

〔一九①⑨一九東南西北白発中〕

〔山は13枚の中張牌と么九牌39枚〕

国士無双十三面待ち。私の能力の判定ではローカル役ではない。つまりこれでは自摸和了りはできない。

ボタンを押して自動卓を開き、52枚の牌を穴に流し込む。再度ボタンを押すと自動卓が音を立てて唸り、山を積んだ。これで今度はシャツフルに疑いの掛けようはない。

また下家の監督から順番に引いていく。見事に私が引いた牌は13枚中13枚が中張牌となった。

「何回やつても同じです。他の人がそれで和了る場合を除いて、中張牌は私の元に来ます」

単純に52牌の中から指定の13牌を引き当てると考えても、確率は52C13分の1。計算すると6350億1355万9600分の1。

流石に監督も清水谷さん達も啞然としている。

「今度はもつと面白いことをします。と言つても監督は体験できませんけど」

「……どういふことやっ？」

まずは手牌を作る。

藍 手牌

〔①②③④⑦⑧⑨一二三七八九東〕

「ここから〔④〕か〔東〕を捨てれば『鏡同和』キャンドロホとなつてローカル役ありの聴牌です」

『鏡同和』。

2種類の数牌で同じ順子を2組作れば成立する2翻役。門前限定だったり食い下がりが1翻があつたり定義には揺れがある。

「〔東〕を捨てた場合は〔①④〕待ちのノベタンになるけど、さっきの通りローカル役が付かない〔①〕は引けません。〔①〕を捨てた場合も〔東〕は引けない」

山を〔東東①①〕の4枚として自動卓でシャッフルする。

「これで私が〔東〕を捨てたら〔①〕自摸は不可、〔東〕を引くはず。しかし〔①〕を捨てたら〔東〕自摸は不可、〔①〕を引くはず」

つまり捨てた牌と同じ牌を引き直すことになる。実際に何度かやってみた所、確かにその通りになったことを全員で確認した。

「さて、ここからが本題。怜、私が打牌する前に〔東〕と〔①〕のそれぞれを捨てた場合の一巡先を視てみて」

早速、怜が未来視をする。片目が仄かに緑色に光ったかと思うと、素つ頓狂な叫び声を上げた。その反応だと予想通りか。

「うひゃあ何なんこれ、気持ち悪い！」

「怜、大丈夫？」

怜は尻餅をついたかと思うと、床を転がってうつ伏せに倒れ伏した。爆速で怜の介抱をする清水谷さん。

「他の部員もおるんやから、部室であんまはしゃがんようにな」

「何を大袈裟なりアクションしとんねん怜、麻雀でそんな恐ろしいもの見るわけないやろ」

「何が見えたんです？」

監督もセーラもフナQも、怜に怪訝な目を向けている。唯一清水谷さんはガチで心配しているけど。

「ええか、よく聞いてな。〔東〕を捨てたら〔東〕を、〔①〕を捨てたら〔①〕を引いてたんや」

恐ろしいものを見たかのように片手を持ちあげて清水谷さんを掴む。その姿はまる

で死に際に遺言を託すかのようだ。

「……はい？」

「何も変わったこと起きとらんやないか」

フナQは首を傾げる。セーラの怜を見る目は、可哀想なモノを見る目が変わった。

「……いや、それはおかしいんちゃうか」

唯一その異常さに気付いた監督は、4枚だけの牌を指して言う。

「シャツフルされて見えへんとはいえ、山の状態は一つに決まっとるはず。それじゃあまるで」

「まるで捨て牌次第で自摸る牌が変わったみたい、ですか？」

つまりは、見られていないのをいいことに山の配置を勝手に変えているということになる。

「牌を瞬間移動で入れ替えたってことなんか？」

あるいは物体そのものが変形した可能性もある。

「ではそれを確かめるためにもう一つ実験をしてみましよう」

もう一度同じ手牌、山にして自動卓でシャツフルする。ここでスマートフォンでカメラを起動し、ビデオモードにして撮影を開始する。4枚の山牌の裏を見ず触らずに、それぞれの位置に何の牌があるのかを全てカメラに記録させた。

「怜はさつきと同じで未来を視てくれる？」

「う、また見るんか」

嫌々ながら怜が未来を視た。

「……同じやわ」

「それじゃあ、今卓に座ってない清水谷さんがカメラを確認して。ただし内容は言わないでね」

私が(①)を捨てる。下家の監督が引く。対面のフナQが引く。上家のセーラが引く。

藍 自摸 (①)

「どう、カメラと齟齬はない？」

「皆が引いた牌はちゃんと映像と一致してるで」

これを何度か繰り返した。しかし結果は変わらなかった。

「なあ、これ何か違いあるんか藍？」

「さつきのカメラなしとどう違うんでしよう」

「いや、既に異常な事態が起きている。」

「カメラが記録しているのに和了れなかった。それがおかしいんだよ」

私達は先程、捨て牌によって引く牌が変わることを確認した。その仮説として瞬間移動や物体変形の仮説を立てた。しかしカメラにはそのような瞬間は捉えられなかった。

私達が引く前に清水谷さんがカメラを先に確認しなかった場合でも、結果は同じだった。

「つまり瞬間移動でも物体変形でもない、か。ほなもう藍が引く牌は運命づけられてるつちゆうことか？」

「だから、それは最初に否定されたでしょ。運命なら怜の未来視で確認出来るはずだよ」
一般的に殆どの能力は、確率的に0%の現象は起こせない。必ず和了れる能力を持っていたとしても、和了り牌が枯れていたら和了れない。つまり自分に都合の良い運命になるように牌山の初期配置に干渉する能力。

だから支配力が弱いと鳴きでずらされただけで崩れる。しかし鳴きによるずらしは経験や理論によりある程度補えるとはいえ、結局のところ勘。暗闇の中に撃った弾が偶々当たるようなものである。それを当てずっぽうではなく確実に行えるのが怜の未来視。

しかしそんな怜でも捨て牌によって引く牌が変わるといふ予知が出てしまった。つまりこれは偶然ではなく物理的になにか起きている。

「じゃあ、何が起きてるんや？」

監督の疑問もごもつとも、でも完全には絞り込めない。確認する術がない。

「まずは仮説1、現実改変。これは牌を捨てた瞬間に山の配置だけでなくカメラの記録

や清水谷さんの記憶・認識ごと改竄された可能性」

「ちよつと、怖いこと言わんといてや」

「仮説2、過去改変。牌を捨てた瞬間に最初からそれに応じた山の配置だったという風に過去が変わった」

当然、カメラの記録や清水谷さんの認識も変わった後の世界でのもの。この場合は私達の認識も、というか宇宙全体が書き換わっている。これなら齟齬が生まれない。

「過去つて、壮大やなあ」

「怜だつて未来視えとるのに何言うтонんねん」

現実改変か過去改変か、原理は分からない。

だがどちらにせよ、この力は他の一般的な能力の影響を受けない。

先に述べたように、普通の能力はただ運が良いだとか偶然を操つて異常な引きを発生させる。だから鳴きでずらせたり、怜の未来視で結果を見てから行動を変えることで対応ができる。

一方、私の能力——というよりは『ローカル役でしかあがれない』という制約においては必然。現実を書き換えているので運とは違って不確定な要素がなく、確率操作を原理とする能力や鳴きなどの行動の干渉を受けない。

と、そこまでの私の見解を話した。

「あくまでも『ローカル役でしかあがれない』というデメリット効果に対してだけやろう。現に『ローカル役』の能力自体は他の能力の干渉を受けとるしな」

「怜ちゃんの未来視が通用せんくなったと思うたで」

怜が安堵する。目を離していた間に、自分の脳が書き換えられた可能性を示唆されて怯える清水谷さんを介抱していた。さつきと立場が逆転してる……。

「ええ、監督の言う通りです。ですが『オープンリーチ』のテレパシーが『ローカルルール』の宣言でも使えたように、『ローカル役』と『ローカルルール』には密接な関係があります」

この意味が分かりますか、と監督に振ってみる。私の能力ではなく実際の概念の話として、元々ローカル役はローカルルールの一種であるのだから当然とも言える。

「『ローカル役でしかあがれない』という制約は『ローカルルール』によつて掛けられた制約ということか？」

「まあ、それもありませんが」

恐らくは生まれつきあったもので私が掛けたわけではなく、自分でさえ解除できないルールとなっている。仮に解除できたとしても、私の能力の根幹にも関わっているのだから触れない。最初から掛かっているということは意味があるのだろうから。

私が麻雀以外で掛けるルールにはペナルティなんて存在しない。人に掛ける場合は

大抵の場合は強制か誘導だ。一方、この制約は破らせないために現実の方を捻じ曲げてきている。つまり――

『ローカル役でしかあがれない』という制約が現実を捻じ曲げて牌に干渉したなら、『ローカルルール』でも同じことができるとは思いませんか？

「小鳥谷、お前……」

監督と視線が合う。

「右目が光ってるぞ」

――2年生の頃は自分が藍と二人でエース張るところかレギュラーになることすら思ってもみいひんかった。まして、自分が藍を支えなきゃなんて。

放課後。竜華やセーラ、藍のレギュラー陣がインハイに向けて忙しそうにしていた。一方、今年も2軍の私。だからってわけじゃないけど、部活に顔を出さずに病院に定期健診に行った。大きな病院の待合室で横に長い緑のソファに腰掛けながら、モニターに映るテレビを見上げて待つ。そろそろ首が痛くなってきた頃合いで名前を呼ばれる。診察室に向かった時、ふとそれが耳に入ってしまった。

「小鳥谷さん、また来ますね」

そう言つて看護婦さんが病室から出てきた。小鳥谷、という名前に私が反応しないわけがなかった。歩みを止めて病室の方を見る。何を探しているのかと言えば、名前や。扉の周囲に通り目を遣つたけど見つからなかった。そういえば、最近の病院は病室の前に入院患者のネームプレートは掲げへんつちゆう話を聞いたことがある。プライベートの保護のためやとか。

呼ばれているので、その場は諦めて診察室へと向かった。いつも通り問題なし——ちよつと疲労溜まり気味やから気を付けてと言われたのもいつも通り——で、待合室に帰る時にその病室の前で止まった。

友達と同じ苗字つてだけで、親族かもしれないへんつて決めつけるのは早計や。あんまり間かん珍しい苗字であるのは確かやけど、そんなこと言うたら私や竜華だつてそう。確証もないのに病室に立ち入つていいものか。

「お入り」

年の行つた、おばあちゃんの声。えつ、と思わず声が出た。扉は開いてないのに私が立ち尽くしているのを見抜いたんか。こちらからは向こうの様子が見えへんから、扉に磨りガラスがあつて人影が見えたとかそういう訳やない。誘われるままに、私は扉を開け病室へと入つた。

病室には4台のベッドがあつて、そのうち3つはカーテンが完全に開いていて無人だった。でも誰かがここで寝ていた形跡はあるから、今は居ないというだけなんやろう。

「あら、可愛い子」

残りの一つ、側面だけ開けたカーテンにはおばあちゃんが一人居た。やつぱりということは、当てずっぽうやつたんかな。第六感が冴えてるつちゆうことやろか。

「あの、小鳥谷さんで間違いないでしょうか」

親子ならともかく祖母と孫娘ほど年が離れていると顔だけでは血縁関係か判別できひん。私の頭はこの状況でも冷静さを保っていて、診察している間に小鳥谷さんは病室を出ていてこの人が別人であるという可能性に気づいた。

私の問いに小鳥谷菊子と名乗った女性は、藍の祖母やった。それから私は自分のこと、藍のことについて話した。そのうちふと、そういうえばと思つて私が扉の前に居たことに何故気づいたのかと聞くと。

「何にもない病室に長いこと居ると、音に敏感になつてねえ。足音がそこで止まつたら人が居るつてわかるのよ」

種を聞けば、何故思いつかなかつたのか不思議なくらい単純やった。

「藍もよくそこに立つたまま入つてこない時があるの」

扉の方を見た彼女の視線の先を辿ると、そこに藍が立っている姿が目には浮かんできた。

「あの子は小さい頃から賢くて我儘も言わない子だったんだけど、大人び過ぎててねえ。学校では友達も作らないし両親とも距離を測りかねてたの」

意外やった。最初の頃は人見知りしてたけど、今では藍は部員の皆と仲が良いし。麻雀が仲を繋いだってことなら、自分のことのように嬉しいな。

「でも私とはよく話してくれるのよ」

藍も月に一度はここにくるらしい。竜華と同じでおばあちゃん子なんやなあ。

——なんて、呑気な事を考えていた。この時の私はまだ、藍の脆さを理解してなかった。この時の藍はまだ、毎日が楽しそうに希望に満ちあふれていた。この時の藍のおばあちゃんはまだ元気そうやった。

この日がおばあちゃんに初めて会った日。定期健診の度に顔を出して、藍のことを話した。部活で振るわない私の相談にも乗ってくれた。

「藍をお願いね」

それが最後に聞いた言葉。

藍は、祖母の危篤を理由に去年の世界ジュニア出場を辞退した。

無限人和編

「アレを使った藍が押されてるのなんて初めて見たわ」

「大丈夫なん？」

控室に戻ると、やはり皆から心配された。終盤はネリーが逆転劇を見せたが、その後の獅子原の和了と私の人和で1位で前半戦を終了できたし、3位以下とは大きな開きがある。万が一私がネリーに負けても、決勝進出が叶わないということはまずない。

「問題ないよ。ちよつとびっくりしたけどね」

『無法地帯』を知られようと、対局の8分の5はこちらが支配していることに変わりはない。圧倒的に有利なのはこつちだ。

「それより今は、どこまでついてこられるか試してみたいんだ」

「藍、まさか見つかったん？」

「かもしれない」

探し求めていた、私と戦える相手。試さずにはいられないだろう。

それでも望みは薄い。『八連荘』と左目のコンボは対策できても、『人和』と右目のコンボを攻略できるとは限らない。彼女らはまだその凶悪さすら知らない。

「あんた、私達にもまだ隠してるなんかがあるんか？」

監督が睨みつけながら言う。隠しているのは気分を害したかな。

「藍、俺らのこと信用してなかったんか？」

「違う違う。言う必要もなかっただけ」

信用してないってわけじゃない。『ローカル役でしかあがれない』という制約について考察を語った時に、それとなく仄めかした。

それでも全てを言わなかったのは、これを使う機会なんて無いだろうと思っていたからだ。実際、右目を実戦で使ったのは小学生が最後。

今更右目について解説する時間も気力もない。だから、今回も仄めかすだけ。

「……ルールってのはね、表面上は平等ならそれで構わないだよ」

法律がその典型だ。資本主義だろうが共産主義だろうが、専制君主制だろうが民主主義だろうが、法はいつだって平等っぽい。関係ないのだ、社会の仕組みがどう変わろうと。成立という段階を踏む時点でそこに作為が混じる。天衣無縫でない以上、人が人を支配する構造が出来上がる。

独裁ならその気になれば平等さを演出する必要もないが、余計な反発を買わないで済むのはメリットだ。

『ローカルルール』も似たようなモノ。自分だけ有利になるようにすれば、非対称性が

支配力に歪みを生み、どこかに付け入る隙ができる。不均衡な状態を維持するのは抵抗されずとも消耗する。

できないわけじゃない。諸々の損得を考えた結果、平等にしてやっているだけ。

「平等性を放棄すれば左目だけでもまだ戦える」

でも、それでは味気ない。それでは接戦になつてしまふかもしれない。求めているのは、圧倒的に勝つつもりでやつてその上で負けるかもしれない戦い。

ネリー・ヴィルサラーゼはそれを満たすかもしれない資格を見せた。ならば応えるのが敬意だ。

破つた者がペナルティを受ける『ローカルルール』を『人の理』と呼ぶなら。

——この対局は以下のルールを適用する。

——1. 全員が配牌聴牌する。

——2. 海底牌以外で自身の和了り牌を自摸らない。

卓上の牌に規則性を与える『ローカルルール』を『地の理』と、私は呼んでいる。

ネット麻雀では特殊ルールを採用したイベントが開催されたりする。プログラムによつて牌山を管理するからこそ、実際の卓では再現不可能なルールも実現できる。

これは、それを実卓で可能にする力だ。

『人の理』は法律だ。

破ればペナルティが待つ。

それは法律を破れば刑罰が待つように。

『地の理』は自然法則だ。

抵抗することはできても、破ることはできない。

飛行機で空を飛ぶことはできても、物が下に落ちる法則自体を変えることはできないように。

ルールに則つて私に勝つことはできても、ルールから逃れることはできない。

ネリー・ヴィルサラージェ。

運命とは人間には抗えないモノ。私ですら逃れることはできない。だが、運命にも抗えないモノが存在する。

それは現実だ。運命は、取り得る現実しか取り得ない。

どんなに運命を捻じ曲げようと、重力に逆らつて生身で宙を舞うことはできない。

どんなに運命を捻じ曲げようと、無い牌を掴むことはできない。

それはこの世の理に反する。

宮永咲。

このルールの下では得意の嶺上開花は封じられている。

嶺上牌に和了牌があることを察知してカンをした瞬間、その牌は別の牌に書き換わる。

森林限界を超えてどんな高い山の上でも咲き誇る強い花も、種が無ければ花は咲かない。

どんなに強い支配力を以てしても、無い牌を掴むことはできない。

それはこの世の理に反する。

獅子原爽。

カムイは立ち去り、雲は散った。最早彼女にできることはない。

後は彼女自身が立ち去り、散るのみ。

それが私が決めた理。

全員が配牌聴牌する。それは実力を排した運任せの対局を齎す。とりわけ、天和や地和といった上振れを掴んだ者が、勝利への切符を手にする。だがその目はルール2が封

じている。

手牌を崩さない限り、自分の和了に技術は要らない。捨て牌は自摸切りが続くのだから、読みも要らない。

ただ、オリずに突っ張り続ける度胸と、当たり牌を掴んだ時にオリられる勘が求められる。

まさに運試し。

そういう風に見えるなら、いつまでたっても搾取される側だ。

そう間もない内に気づく。いや、既に察していることだろう。

東1局 親 爽 ドラ〔北〕

「リーチ！」

爽 打〔横⑦〕

「ロン」

藍 一巡目 ロン

①②③④⑤⑥⑧⑨西西西発発

〔⑦〕

「8000」

『人和』。

配牌聴牌というルールが、このローカル役の成功率を引き上げる。

平時なら能力を使つても狙つて聴牌するのがそもそも難しく、対局中に1回が精々、だが、聴牌さえしてしまえば当たり牌を掴ませて吐き出させるくらいわけではない。

まして、どうせ和了るのも放銃するのも運次第なこの状況では、どうしてもダブル立直したくなる。そうすれば、宣言牌でロン和了する『燕返し』によつて私の『人和』成功率は格段に上昇する。

いや、立直宣言せずとも聴牌を維持する牌——リーチ可能な捨て牌であれば『燕返し』の恩恵は受けられる。ローカル役は『人和』で補えるのだから。

カラクリとこれから起こる地獄に気付いたのか、清澄の顔が青ざめる。

東2局 親 咲 ドラ〔2〕

咲 打〔三〕

故に、何もせずとも自分から網に掛かってくれる。

「ロン」

藍 一巡目 ロン

〔四五④④赤⑤⑤⑥⑥23477〕〔三〕

〔8000〕

ダブル立直が罠であることに気付いた所で、逃げて崩す手すら『人和』に狩られる目は残る。

今の局の和了、私が清澄の手牌を透視して自分の手牌を書き換えたとか、そんな大袈裟なことはしていない。

『人和』は相手の不要牌だったり、その手から考えられる最善手、次善手、あるいは奇手を絡めとるような配牌として私の元にやってくる。焦りと恐怖に突き動かされて選ぶ逃げの手は本人が自覚できない部分でワンパターンになり、見事に狩られやすい牌を捨てるのだ。

更に『人和』以外でのローカル役が確定しない配牌の場合は、手牌を見ずに無作為に選んだとしてもまるで運命とでも言うように当たり牌となる。

『燕返し』と『人和』の配牌聴牌だからこそ働く鬼畜コンボ。前者はともかく、後者を確実に避ける手段は存在しない。

東3局 親 ネリー ドラ (5)

ネリー 打 (3)

ただ一人、ネリー・ヴィルサラーゼを除いては。

「っそれカン！」

咲 カン (3)(3)(3)横(3) 新ドラ (5)

ここまで親の初打放銃が続く中、ネリーの手は通った。これを見た宮永咲がカン。私

の自摸が飛ばされ、これで『人和』の目は消える。ローカル役の存在を知っている宮永咲とネリー・ヴィルサラーズの連携。

実際の所、宮永咲はただ放られた牌をカンしただけ。ネリーが運命を読んでカンできる牌を選んで捨てたからこそできたこと。一瞬にして呆気なく私の『人和』を打ち破つてみせたネリーは、涼しい顔をしている。

藍 手牌

〔⑥⑥〕一一三六六六55666〕〔3〕

『人和』が潰された今、私の手牌はこれでローカル役を失った。

三色同刻の内一つの牌が欠けた——つまり雀頭になつたものを『小タテ』と呼ぶローカル役が存在するが、この形だと〔5〕で和了らなければならぬ。

しかし自摸和了を封じていて出和了りしかできないため、手役は三色同刻の〔⑥〕しか無く〔5〕では和了れない。

これらの問題を一挙に解決する手は一つ。

「リーチ」

藍 打〔横3〕

オーブン——

「ロン」

ネリー　ロン

〔④⑤⑥三四五八八45東東東〕〔3〕

「12000」

ネリーからの不意を突く一撃。

ドラ傍、警戒すべきだったか？

配牌聴牌なのだから狙って手をドラに寄せるなんてことできやしない。ただのマガレ。こんな可能性をケアしていたら勝てるものも勝てない。が、リスクはケアできた。そこは反省点——

否、ネリーは運命を読む。この思考が取る手を予期していたに違いない。

ネリー　河

〔赤5〕

無理鳴かせに見える打〔③〕に続いて、完全に聴牌を崩したと見せかけた手出し〔赤5〕。これがあつたから警戒心が鈍つた。

それにこの一手から配牌を逆算すると、宮永咲に鳴かせたあの場面、〔③〕ではなく〔⑥〕を切つていれば私に振り込んでいた。それは三色を見た手——ダブ東三色ドラーで、リーチを掛ければ跳満、裏が一つでも乗れば倍満を狙える手。

そう、『燕返し』の絶好の餌となるはずだった。

それを躲して鳴かせ、役なしに陥った私に（赤5）を通し更にカウンターで仕留める神業。

確かに配牌で宮永がカンできる（③）を捨てても聴牌が崩れない（⑥）を持っていたのはマグレだし、（5）を引いて私の警戒を解かせられる（赤5）を手出しできたのもマグレ。

奇跡のような細い運。それでも引き寄せた運命を選べたのはネリーの力があつてこそ。

いや、ひよつとしたら私はまだ勘違いしている。

配牌聴牌という下駄を履かせた今、望んだ手牌を持つてくるのにそこまで運の波は必要ないのかもしれない。普段の強運を齎す波に比べれば漣でも、聴牌の形を弄る程度は事足りるとか。

全部狙ってやったとしたら、天才という言葉すらチープな称賛に思える。

『地の理』は実は相性が悪いかもしれない。

それでも私の有利は播るがない。宮永咲に鳴かせて私の自摸を飛ばすこの手が使えるのは、ネリーが親の時だけ。

その親番でさえも、宮永咲がカン材を揃えてネリーが鳴かせられる牌を持つてくる必

要がある。毎回できるとは限らないし、小さな運の波で事足りるとしても確かに消耗していく。

まして、即席の調整。前半戦の3連続和了は対局前から今日この日のために調節してきた波だ。それはアドリブには限界があることを意味する。

——面白い。

これだ、求めていたものは。互いが互いを出し抜かんと知略を尽くす戦い。どこまで耐えられるか勝負といこう。

五分咲き

『人の理』と『八連荘』のコンボは派手だが、『地の理』と『人和』のコンボはいまいちパツとしない。

しかしだからこそ恐ろしい。

前者は為す術の無い戦いを強いるが、後者はそもそも戦いの土俵に立つことすら許さない。

磨き上げてきた麻雀の腕だとか、相手の打ち筋を研究した入念な準備だとか。

そんなものを披露する暇も与えず静かに殺す、理不尽な絶望。

ここまで抗えているネリーの方が異常なのだ。

ネリー・ヴィルサラージェの力は『運命を読める』と言ったが、それは正確ではない。決して、対局の全ての未来を把握しているわけではない。それでは怜の完全上位互換だ。寧ろ、ネリーは具体的な未来は何も分かっていない。

事前の分析に見られる彼女の能力は、『自身の運の波を感じ取り、調節する力』。割り切った配牌オリと欲張りな闘牌を可能とし、それらがほとんど裏目にならない。だが、自分が最終的にどれくらい打点を目指せそうかは分かっても、妨害される可能性や和

了までの正確な牌譜は分からないと思われる。

もう一つは『不自然な振り込み』。他人の和了を別の人の安手に差し込んで潰したり、もつと高めの変化を狙えた所を安手で差し込んで妥協させる。

原理は不明だが、ネリーが人和を躲して私にカウンターを決めたアレも十中八九これの応用だと考えられる。

まず、宮永咲にカンをさせたのはどう考えても能力のおかげだ。単なる技量だけでは狙って振り込みはできても、狙ってカンさせることはできない。まして一巡目からでは宮永咲の手牌構成を推理する材料など皆無。どこまで分かるのか不明だが、鳴かれそうな牌、当たりそうな牌、手の高い低いといった情報は透けている可能性が高い。

だが、私がネリーに振り込んだのは能力の影響ではない。前述の通り、私がどう行動するかまではネリーの能力では分からない。分かっているなら、前半戦の私の連続和了を最初の1和了目で阻止することも容易だったはずだ。

とすると、恐らくは能力と本人の技量の合わせ技。あの局で自分に運が回ってきていること、宮永咲にカンさせられる牌が分かったこと、私が役無しに陥ったことが分かったのまでは能力のおかげ。そのまま私が振り込んだのは偶然。

迂闊な手を打ってくるのを見越して油断を解く行動をとったのはネリー自身の推理と心理戦の技量だ。

そう何度もカウンターを喰らうことはない。敵の戦力を過大に見積もって攻勢を緩めるのは、相手に主導権を渡すことになり逆に危険。

この考察は当たっており、1本場はネリーが獅子原からの和了を決めたものの、私から直撃を獲ることはなかった。

東3局 2本場 親 ネリー ドラ〔②〕

席順からして、宮永咲に鳴かせずとも振り込まない手を捨てればそれだけで私の『人和』は消える。それなのにネリーは手戻ししてまで初打で宮永咲に鳴かせる事に固執している。

……これは私の『人和』『燕返し』に続く三の矢に気付いているな。本当に、どこまでも私を楽しませてくれる。

彼女を支えてきた運も長くは続かない。ネリーの第一打に対する宮永咲からカンの一声はない。その牌が私の和了牌ではない以上、この局は『人和』成らず。

「リーチ」

藍 一巡目 打〔横①〕

だが『人和』が決まらずとも、私はダブル立直ができる。

その一方で、配牌聴牌でスタートしたにも拘わらず、いつまでたっても他の誰もリー

チをかけない。

宮永咲は『燕返し』というローカル役を知っているからだろうか。

獅子原は『燕返し』を喰らったのが記憶に新しい。二連続『人和』の陰に隠れて、宣言牌を狙われたことには気づけなくとも、手を確定させるのは何となく恐いのだろう。

実際の所、私は普段から『燕返し』はそんなに使わない。まず自分が聴牌して、その後誰かがリーチを掛けるのが前提条件である以上、発生の機会がそもそも少ない。

過去のデータを考えれば発生条件を満たしてもそうそう恐れることもないのだが、この状況に冷静さを失っている。

ネリー・ヴィルサラーゼが安牌^道を示し、他2人がそれに続く。

逃げ腰の者に勝利はやってこない。私は待っている。

待つ、待つ、待つ。

やがて見えてくる、水底が。

私の海底がやってくる。

「ツモ」

藍 ツモ 裏ドラ〔東〕

②②三四五12378東東東〔9〕

「ダブル立直海底自摸ダブル東ドラ5。6200・12200」

『石の上にも三年』。

単なる諺ではなく、ローカル役の名前だ。

ダブル立直かつ、海底模月で和了する役満。海底模月だけでなく河底撈魚でも可とするルールもある。

能力としては、ダブル立直して海底牌を掴んだ場合は必ず和了するというもの。河底撈魚の場合は確実ではないが和了りやすくなる。

副次効果として、他家が有効牌や和了牌を自摸りにくくなる。先に誰かに和了られたら元も子もないからだ。

他には、私に海底牌が回ってきやすくなる効力もある。例えば南家でダブル立直をした場合は誰も自摸順をずらす行為——鳴きを入れられなくなる。

東4局 親 藍 ドラ〔四〕

藍 配牌

〔③③③③六七七七八八九233888〕

この配牌、普通なら両面待ちを見て〔③〕か〔8〕を切りたいところ。

だが私にとつてはこれらが和了形に関与しない刻子で来ているのが嬉しい。

これも『石の上にも三年』の副次能力。

海底牌は誰も鳴きを入れなければ南家に回ってくる。ダブル立直をする関係上、他家が鳴きを入れないよう徹底すれば南家以外ではこのローカル役は無意味と化す。

だから南家以外でダブル立直できる場面に遭遇する時は、手牌に待ちに関与しない刻子——海底ずらし用の槓材が含まれていることがある。といつても2つ3つも暗槓できると都合の良いことはそうそう起きないので、これは自分が親の時くらいだ。

「リーチ」

藍 打（横3）

ちなみに、海底撈魚版の『石の上にも三年』についてだが。

『ローカル役でしかあがれない』という制約があるために、他のローカル役がなければ折角ダブル立直をしても和了ローカル役が『石の上にも三年』に限定されて、途中で和了することができない。しかもリーチ後のロン牌を見逃すとフリテンになるので、ダブルリー海底撈魚の成立は著しく難しくなる。

サブプランとして『オープンリーチ』でローカル役を追加しても、和了牌が分かっってしまうのだから途中でロン牌は出ない。そうそう毎回多面張になることはないし、各家ベタオリすれば当たり牌を取り込みきくことは簡単。更に宮永咲対策に海底以外での自摸和了を封じているので、『オープンリーチ』は全く機能しないといつていい。

東3局0本場で『オープンリーチ』を掛けたのはあくまでも苦肉の策だ。私より他家

の方が打点が大きくなって、多軒聴牌で追い込まれたネリーが私に差し込んでくる可能性に期待しての手。

崩してから他で和了れる手があるならそちらを選ぶ。

藍 13巡目 自摸〔8〕

来た。暗槓。

「カン」

藍 カン〔裏88裏〕 新ドラ〔6〕

海底牌が王牌に取り込まれ、海底が一つずれる。

私の海底ルートに入ったことで、もう誰も鳴きを入れることはできない。

どんなに前もって手を崩そうと、私が海底を掴めたということは『石の上にも三年』が発動した瞬間から運命付けられたように自摸が都合よく操作されていたということ――

「カン」

咲 カン〔裏④④裏〕 打〔9〕 新ドラ〔二〕

私の海底を目とした宮永咲の最後の自摸で、事態は起きた。

暗槓。私の海底がずれ、ネリーへ渡る。当然、ネリーにとって14牌の中から牌を通

すのは苦慮の内に入らないだろう。

いや、それ以前に。

「ロン」

ネリーー ロン

〔⑦⑧⑨五六七22233449〕 〔9〕

「1300」

ネリーーなら、これすら見越して和了る。

宮永咲のカンから零れる壁外の（9）を単騎で狙い撃ち。そのためには、現在最も警戒するであろう私に対する安牌を切らさせる必要がある。私が自摸ってきて切るであろう牌を運命を読んで先導して切っていく、（9）以外の選択肢を枯らした。

前局、ネリーーなら私に海底を自摸らせず清澄か有珠山に差し込みを狙っていつでも良かったはずだ。しかし二人がオリてしまえばそれも叶わない。上手くオリさせず立ち回ったとして、待ち牌を自分が掴めるかを考えると成功確率は100%ではない。『石の上にも三年』の和了阻害効果によって、更に困難だっただろう。

それが逆に、私に違和感を覚えさせない隠れ蓑となった。

勝負を降りたように見えた捨て牌は、この局を見越して宮永咲に『ネリーーの後を追っていればいいという安心感』を植え付ける布石。

ここで宮永咲がカンして私の海底ツモを防いだけでは流局となり、再び私の親で状況は変わらない。私の親を流すために、ここでどうしてもネリーが和了る必要があったのだ。

宮永咲がカンできた理由は、このネリーの神算鬼謀に比べれば簡単だ。

ルールでは嶺上開花を封じてもカン材を集めてくることは封じていない。『石の上にも三年』で鳴きを封じられるのはダブル立直を掛けた後だ。配牌の時点で暗槓が揃ってれば封じることができない。

暗槓は東家の時に海底牌をずらす手段として残しておいたが……それが逆に妨害される結果となった。

この穴は塞いでおくべきだったか。いや、『石の上にも三年』の機会を半分にするだけの価値があるかどうか。元々、親の時に使えない『人和』の代わりとして採用した戦術。南家で使う意味は東家より薄い。

後半戦。最初に2連続『人和』を決めこそしたものの、私はネリーの後手に回っている。戦術の介在する余地が無いよう創り上げたルールの中で、戦術で私を凌駕している。

ネリー・ヴィルサラーゼ、敵ながら見事と言う他ない。だが。

東4局終了時点

千里山	177900
臨海女子	145300
清澄	388000
有珠山	381000

後半戦開始時点では100000点に満たなかった点差は、今や3万点以上に開いている。内容で見ると私をスベツク翻弄しているはずのお前が、点数で見ると負けている。

この差を生むものが異能スベツクの差だけではないと、お前に理解できるか？

南入と同時に、それは起こった。

——ルールを変更し、以下を適用する。

——1. 全員が配牌聴牌する。ただし天和・地和は発生しない。

—— 2. 対面からカンした局では嶺上牌で和了らない。

—— 3. 下家からカンできる状況にはならない。

—— 4. 子は自身の和了り牌でない対面の当たり牌を自摸らない。

「えっ」

どこからともなく聞こえる声。

それは突然のルール変更を告げるものだった。

「ルール変更ッ……！」

ヴィルサラーゼさんの顔が鬼気迫る表情へと変貌する。

そもそも、事前情報にない展開は後半戦開始から既に起きていた。

前半戦では左目を青白く光らせていた小鳥谷さんは、後半戦では右目に薄いマゼンタの光を宿している。

衣ちゃんから聞いていたチャンピオンの能力は、『ルールを課し、破った者からペナルティとして点数を徴収する』というもの。だけど後半戦のこれは、それと似ているけれど全く違う能力。

ここまでで分かったことは、牌山に干渉する能力だということ。破るという行為自体がそもそもできない絶対のルール。それはまるで卓上という小さな世界の物理法則と

でもいうような。

小鳥谷さん、ここにきてそのルールを変えてきた。意図は分からないが、私にとって重要なことは一つ。

このルール下なら、嶺上開花ができる。

南1局 親 爽 ドラ〔8〕

爽 一巡目 打〔一〕

「ロン」

藍 ロン

〔③④⑤⑥⑦⑧⑨〕 〔一〕

〔2900〕

獅子原さんからの人和。獅子原さんにはもう、前半戦であったような力の気配は感じられない。力のない者は、この土俵で戦う権利すら与えられない。

獅子原さんの表情は、ほとんど諦観に満ちている。勝ち負けの舞台からは降りたけど、この試合の行く末をただ見守りたい。そういう感じで麻雀をしているように見える。

一方で、ヴィルサラージェさんは人和を止められず歯齧みする。彼女には技量がある。

最初は彼女と協力していたつもりだったけど、彼女にとっては私も戦場の環境要因に過ぎない。

私達はいくまでも敵同士。利用されたことに気付いた時は衝撃だったけど、恨みはない。寧ろこの後半戦で見事に小鳥谷さんを翻弄した姿は、私には尊敬と憧れを抱かせる程だった。

彼女には力もあるけど、同じく前半戦で消耗し過ぎた今の彼女では小鳥谷さんに真つ向から太刀打ちするには物足りない。技量だけでは、この理不尽は止められない。

じゃあ、私はどうだろう？

私には何ができる？

私にはヴィルサラージェさんのような人を欺き利用する技術はない。嶺上開花を封じられた私には、勝つための武器がない。

それがここにきて、自摸和了の禁止を解除してきた。

私にとっては願ってもないこと。でも、情けをかけられているかのようで……。

否、情けですらない。

これは命令だ。嶺上開花をしろ、と。唯一の勝ち筋を垂らして、私を操っている。

悔しい。

——こんな形で勝っても、全然楽しくないよ。

南2局 親 咲 ドラ〔五〕

私の親番。逆転するならこれが最後のチャンスと言っても過言ではない。

「カン」

咲 一巡目 カン〔裏①①裏〕 新ドラ〔4〕

まずは、『人和』を回避するための暗槓。

分かっている。カンに頼っている限り、チャンピオンには勝てない。

ここまで、私は『嶺上開花』という武器で勝ち上がった。

でもそれじゃ足りない。

ここから先に進むには、私自身が成長しなければ。

「ツモ」

——山の上でなくとも、花は咲く。

咲 6巡目 ツモ

〔⑤⑤111西西西発発〕〔⑤〕〔裏①①裏〕

〔四暗刻。16000オール〕

『花鳥風月』。

五筒と一索、風牌と一筒の刻子で和了るローカル役。

小鳥谷さんのローカル役を研究していた時、名前に花が付いているからか妙に惹かれたものだ。

何故だか私にもできる気がした。というより、やらなければならぬ気がした。

南2局 1本場 親 咲

この局も暗槓による『人和』回避で始まる。

押し付けられた配牌聴牌の恩恵を自ら放棄して手を崩し、私の目指す形へ変えていく。

ルール4によつて、小鳥谷さんから直撃をとることはほぼ不可能。ヴィルサラーゼさんには、私の当たり牌を手取るように読まれてしまう。獅子原さんからの直撃のみだと、2位へ浮上する前に有珠山高校が飛んでしまう。

結局、ルール変更によつて解禁された自摸和了に頼る他ないのは変わらない。

「ツモ」

咲 9巡目 ツモ ドラ (③7)

(③③赤⑤⑤南南南) (⑤) (横①①①) (裏白白裏)

「混一色三暗刻対々和南白ドラ3。12100オール」

——『風花雪月』。風牌、五筒、白、一筒の刻子で和了るローカル役。

これはささやかな抵抗。今はまだ、こうするしかないけれど。

これは儀式。私の成長を確かめるため、嶺上開花頼りの私と決別するため。
今日、私は開花する。

最後の一撃は、せつない。

南2局 2本場 親 咲

最後の親番は過ぎて、残すところ3局。

小鳥谷さんの人和に手も足も出ないし、カムイと雲はほとんど使っちゃったしどうしようか。

南2局1本場終了時点

千里山 152700

清澄 123100

臨海女子 117100

有珠山 7100

いや、本当にどうしよう。

2位と116000点差。ここから三倍満3回ツモっても足りない。2位どころか

3位を取ることすら厳しい。

元々決勝進出は諦めていたんだけど、ここまで通用しないとは思わなかった。

アッコロとホヤウは前半戦でヴィルサラーズの連続和了にストップをかけるのに使つて、フリカムイは東一局の親番で使つたら謎ルールと人和に被せられて無駄になった。

残つてるカムイといえは……パウチカムイ。これは麻雀で使うべきじゃない。

でも不思議と小鳥谷さんが素直に喰らう姿が想像つかないんだよなあ。

「ロン、3900は4500」

げえつ、また人和。千里山が清澄の連荘を止めた。

更に条件が悪くなってしまった。ここまできたら開き直るしかない、もう全部清澄からの役満直撃狙いでいこう。

南3局 親 ネリー ドラ〔三〕

「ツモ」

藍 7巡目 ツモ 裏ドラ〔④〕

〔①①一二三七八123789〕〔九〕

「ダブル立直自摸平和純全帯ドラ1。4000・8000」

……どうしてどいつもこいつも連続和了するんだ？

おかしい。私が一番麻雀からかけ離れた力を持つているはずなのに、私が一番「麻雀

”をしている気がする——!!

南4局 親 藍 ドラ〔2〕

どんな能力をもつてしても、天和のような阻止が絶対に不可能な役を狙って出すことは困難を極める。

清澄の先鋒なら絶対好調に持っていくことができれば可能だろう。彼女を白糸台に当てる算段を立てた理由でもある。

私もある程度確率を上げることがはできるが、100%の確率で和了ることはできない。い。

だから同卓する彼女達には気の毒だが、貧乏くじを引かされたとも思っただけだ。

「カン」

藍 1巡目 カン〔裏22裏〕 新ドラ〔2〕

「ツモ」

藍 ツモ

〔赤⑤赤⑤赤五六七34赤578〕〔9〕〔裏22裏〕

『頭槓和』。

他家の副露がない第一巡で嶺上開花を決めることで成立するローカル役満。阻止する術の無さは天和や地和と変わらず、その凶悪さは言うまでもない。

能力としては、これが成功する場合は槓する前に感覚的にそれが分かる。何とも言えない微妙な能力だが、ダブル立直との扱をミスることがない。

そして多くの役満系のローカル役の例に漏れず、強力な打点補助効果がついてくる。具体的にはドラが大量に乗る。

「嶺上開花、ドラ12。16000オール」

ドラの多さは、支配力の余力を反映している。

異能には消費と支配力の概念がある。支配力は消耗するものではなく、一度に発揮できる干渉力。CPU使用率で考えると分かりやすいか。

地の理。exeを常駐させながら他家の支配力を押さえつけて残った支配力。その全部を割こうとしても、この和了形でできる最大ドラ数という限界があった。

それはこの対局におけるパワーバランスが如何に偏っていたかを物語る。

大将戦終了

千里山 221200 (+91800)

清澄	9 8 6 0 0 (6 9 0 0)
臨海女子	9 3 1 0 0 (4 2 9 0 0)
有珠山	1 2 9 0 0 (4 2 0 0 0)

準決勝進出を決めたのは千里山女子と清澄高校。今頃、各々の高校の控室は歓喜と失意に分かれているだろうか。

対局室には、私とネリーだけが残った。今日最後の対局ということもあり、退場を促されることはない。機材関係の調整でスタッフが入ってくるだろうから、いつまでも居られるわけではないが。

「ネリーの……負け？」

人払いも済んだところで、意気消沈のネリーが呟いた。

「理由は3つある。何だか分かるか？」

「……能力の差」

「そう、それが1つ目」

能力の差。こればかりはどうしようもない。いくら言い訳をしても、最大の敗因はこれだ。

しかしそれを理由に他の敗因から目を背けることは甘えだ。

「2つ目、気概が足りなかった」

「気概？ 根性で何とかなるわけ……！」

「なるかどうかじゃない。意地でもするんだよ」

東3局と東4局でネリーは私を圧倒したが、東1局と東2局では私の『人和』を止めることはできなかった。

「あの場面、他人の運の波を操ることができれば私の『人和』を止められたかもしれない」
「ネリーにはそんなこと……」

今まではできなかったことだろう。

しかし自分の運の波を操れるなら、他者の運の波も弄れる余地はある筈だ。他者の運は、巡り巡って自分が和了れるかどうかの運とも繋がっているのだから。

「場を支配しているのは自分だ、自分は戦えていると己に言い聞かせ現状に満足した。彼我の力量差を自覚しておきながら、覚醒に懸けなかった」

勿論、戦う前から土壇場の覚醒に懸けるのは愚か者のすることだ。だが実際に戦って劣勢と判断しておきながら、ネリーはチャレンジすることを放棄した。

「下剋上を成し遂げるには、未知の領域へ挑戦する気概が無くてはならない」

私が『人和』を和了る様をただ指を啜えて見ているより……不格好でもがむしやらでもいい。

「どうせ和了れないなら、失敗など恐れる必要は無かった。

「3つ目、最後は何だと思おう?」

返答はない。

先の指摘にネリー自身でも思うところがあったのか、俯いて卓を見つめたまま黙り込んでいる。

3つ目も、私から答えを語る。

「この対局、『宮永咲』の存在がキーだった」

東1局と東2局ではネリーが戦局に関与できるより前に『人和』が決まるから太刀打ちできていない。東3局と東4局で私を翻弄できたのも、全てがネリーの自力ではない。どちらも宮永咲のカンがあったからだ。

「私の親番を流すために前局で宮永咲を調教したのは良かった。ああいうのを『戦略』って言うんだ」

「せん、りやく?」

東3局で私の『石の上にも三年』の存在に一早く気付いたネリーは、その瞬間に2本場を捨てて次の親番に備えるという戦略を立てた。

「私は後半戦開始前から宮永咲を使った戦略を思い描いていた」

2回戦で宮永咲と戦った時に見せた終盤の怒涛の追い上げ。確認される限りでは半

荘開始時点からの換算で収支を0に戻すようだが、前後半通して0にできる可能性もある。

あるいはプラマイ0でなくとも狙った収支に近づけるということもできるかもしれない。いずれにせよ、逆境に立たされると強くなるということは断言できる。

それに気づいた時から、これを如何に料理するか考えていた。

臨海を3位以下に引きずり下ろし清澄を2位にさせることがこの対局における私の勝利条件だ。

問題は、前半戦が終了して私とネリーがそこまで点差が付いていないこと。とはいえ私も宮永咲もネリーから直撃を獲るのは難しい。そこで、プラマイゼロの力を利用する。

まず私が和了することで宮永咲を凹ませる。これは前半戦で既に凹んでいた。

次に私とネリーに点差を付ける。有珠山と清澄の親番、計4回『人和』を決めることで着実に差を広げつつ、ネリーの和了機会を奪った。

終盤、宮永咲はプラマイゼロへ向かって強力な支配力で和了。清澄が逆転し2位に浮上。しかし宮永咲の快進撃はそこまでが限界。私への直撃を避ければ、逆転まではされない。

後はネリーの親番と私の親番で反撃の機会を徹底的に潰せば終了。

私の戦略は事前に用意されていた。ネリーの戦略は即席の思いつき。

私の戦略は後半戦全体を通してのもの。ネリーの戦略は二局を跨いだもの。

「そこがお前と私の差だ」

『人和』を阻止してその局でネリーが和了していたら、結果は違うものになっていただろう。全体を見据えた戦略と気概さえあれば、私に勝つことはできずとも2位抜けは可能だった。

暫くの沈黙。

「シミズタニには謝っておく」

突如、勢いよく立ち上がったネリーはそれだけ言い残して去ろうとする。

すれ違いざまに、頬を伝う涙が見えた。

言動の棘や生意気さで憎たらしく見える彼女も、今の姿は見た目通りの中学生に見えなくも……いや、高校生だった。

「こちらが悪いことをした気分になってくる。

「私も言い過ぎたよ。ごめ——」

「止めろ！」

制止の絶叫で振り返る。彼女はこちらに背を向けたままだった。

「その言葉はネリーが勝った時に取っておけ」

謝罪は彼女をこれ以上惨めにする行為だった。敗者の気持ちが変わらなくなったのはいつからだろうか。

「私に勝つても金にはならないよ」

彼女は1年生だが、私は今年で卒業。インターハイで相まみえることはもうない。

卒業後も私はプロになる予定はない。彼女の再戦要求には応えられないかもしれない。いい。

「金はある。でもお前に負けたままではネリーの気が収まらない」

後ろ姿のまま長い袖で涙を拭った彼女は、向き直って真つすぐに私を見る。

「世界ジュニア、必ず来てよ」

「ええ……出る予定ないけど」

でも今日の対局は楽しめた。彼女とまた遊ぶのも悪くないと思えるほどに。

今までやってきた遊びの中では間違いなく一番だろう。ここまでゲームメイクする必要のある麻雀は去年の個人戦決勝以来か。

「か・な・ら・ず！」

目前までやってきて念を押してくる。顔を近づけようとするが、見上げるだけに終わった。

こうしてみると、身長差を改めて認識する。私より20cm以上小さいな。

「気が向いたらね」

約束はできない。勝者の私を受ける義理もない。頭を撫でてあしらっておく。「おいつ。撫でるな金取るぞ」

騒ぐロリっ娘と並んで、対局室を後にした。

もう全部あいつ一人でいいんじゃないかな

阿知賀女子、控室。

高嶋穩乃、新子憧、松実玄、そして監督の赤土晴絵が卓を囲んで麻雀を打っていた。玄はドラを集める能力を持っている。その対局ぶりから三尋木咏プロが阿知賀のドラゴンロードと呼んだことで、二つ名はすっかり定着した。

準決勝にて前年度優勝校白糸台との激戦を繰り広げ見事決勝進出を果たした彼女達であったが、払った代償は大きかった。先鋒の宮永照の連続和了を止めるため、玄はドラを捨てざるをえなかった。

ドラを捨てるとドラに嫌われる。今、玄はドラを集める能力を失っていた。今までもドラを捨てたことはあり、彼女の経験上、その時は何局か打つことで能力が復活する。そのための対局数消化に、こうして阿知賀女子の面々が付き合っているわけである。

「試合……終わったっばい?」

穩乃が、ふと手を止めて憧に尋ねる。

「えっ、またシズの直感?」

「いや、そろそろそんな時間かなくなって思っ」

チリツ、と。

火花のようなそれが穩乃の元で弾けた。

総毛立つような重圧。

「楽しみだな」

ボボボ、と燃え上がる焰。

その場にいた阿知賀女子の生徒達、そして監督さえもが穩乃が身に纏うそれを幻視した。

放たれた圧は、会場中を駆け巡る。

「!?」

ネリー・ヴィルサラーゼが、それを感じた。

「っ」

宮永咲が、それを感じた。

「えっ、誰これ……」

小鍛治健夜プロが、それを感じた。

「おお」

天江衣が、それを感じた。

「これ、あの子だね」

「うん」

宮永照と大星淡が、それを感じた。

高嶋穩乃。放たれた圧を感じ取った何名かが、その主の名を口にしようとした時。

——五月蠅い

圧力が、掻き消える。

より強い圧力によってではない。それはさながら、スピーカーから流れだす大音量を消すために主電源のコードごと引っこ抜いたかのようなのであった。

圧力の主を殺せばこうなるのではないかと、宮永照は思った。

当然、そんな物騒なことは起きていない。しかしそれ以外でこんなことをできる者に、心当たりは一人しかいない。何より、脳裏に響くこの冷徹な声は聞き間違えようがない。

「小鳥谷さん。やつぱりこういうこともできるんだ」

山を支配し、準決勝の大將戦では大星淡の能力を無効化してみせた穩乃。だが、その彼女の能力——オカルトの片鱗は藍の一言で掻き消された。盤外で、格の違いを思い知らされる。

それでも。

「俄然、やる気出て来たぞお〜!!」

阿知賀女子一番の陽気は伊達じゃない。山は高ければ高いほど登り甲斐がある。

「次のニュースです。特殊詐欺の立件数が上半期で過去最高を記録しました。60代以上の高齢者の被害が増えており——」

机の上に置かれたりモコンを手を取ったセーラがチャンネルを変える。変えた先も、また別のニュース番組だった。見出しには大きく『東京渋谷で起きた連続放火犯、容疑者は証拠不十分で不起訴』とある。

被害者の遺族が涙ながらに不満を語っている。

「物騒だね」

「東京は怖いなあ」

大阪も似たようなものだと思うが……。

何度かチャンネルを変えるも、朝のニュースはどこもこんな感じだ。

「お」

ボタンを押す手が、ある一つのチャンネルで止まる。

『第71回全国高等学校麻雀選手権大会、本日決勝』。

麻雀が国民的娯楽として浸透するこの世界では、高校生の麻雀大会一つとっても大々的にニュースになるらしい。この辺りは野球の甲子園と同じ扱いを受けていると思う。

「私が選ぶ決勝注目選手TOP3は、ずばり1位小鳥谷藍、2位宮永照、3位園城寺怜さんです！」

「おおーやはり小鳥谷藍選手は皆さんトップですね」

バラエティー色の混じった朝の報道番組らしく、コメンテーター達が優勝予想や活躍選手についてフリップで熱く語る。

ああ、やはり前言を撤回しよう。野球の甲子園とは違う。

高校野球がニュースで取り上げられる時、普通は試合結果をハイライトで報道する。まだ結果が出てない内から今日の試合について見どころだのなんだの語ったりはしないだろう。オリンピックやW杯じゃあるまいし。

地上波が生中継するなんて同じ系列の地方局がそれぞれといったところで、つまりチャンネルを変えても1局でしか見られない。たかが高校生の大会を異なる系列の地上波が2局も3局も取り上げたりしない。

改めて、この世界は麻雀を中心に回っているんだなと実感する。

「期待されとんな、藍」

「去年とは違うね」

「初出場やったからなあ。『二年で初出場、遅れてきた新星』とか言われとったか？」

そんな風な呼ばれ方をされていたのか。去年は自分がテレビで紹介されているのを見るのが気恥ずかしくて、テレビどころかネット断ちまでしていた。個人戦で優勝した後は嫌でも耳に入ってくるようになったので、今はもう慣れたが。

「藍は、5決見るんか？」

5位決定戦。

決勝が行われる同日——つまり今日、前座……というと彼女達に失礼だが、学校のラ
ンキングに影響する大事な試合がある。

ここでの成績は秋の大会に影響する。下級生のためにも、優勝叶わなかったからと
いってもう終わりではないのだ。それに、3年であつてもコクマがまだ残っている。

「んー。今は気分じゃない」

「気分って、そういう問題か？」

決勝に向けて追い込みがしたいとか、そういう意味じゃない。

当日の今からできることなんて、対戦相手の牌譜を再度洗うくらいしかない。情報戦
が全てのフナQは最後の最後までやるだろうけど。

今は少し、考え事に耽っていたい。

「5決で注目の選手はおるんか？」

見ないと言ったのに、その話題を振ってくる。ここにいる話し相手が私だけなのと、話題が他に無いからだが。

5位決定戦では準決勝で敗退した新道寺女子、有珠山、臨海女子、永水女子の4校が争う。その中で、今気になっている選手はいない。

だが気になっている人なら――

「獅子原さん……」

「えっ」

セーラが声をあげた理由は至極簡単な論理だ。

有珠山と臨海女子は準決勝で戦った相手。つまり目新しい要素は無い。向こう側のAブロックの高校に注目が集まるのが自然。

「いやいやいや、他にもつとおるやろ。ほら、白水哩とか」

「どうせもう決勝で戦うことはないし、強さに興味はないよ」

5位決定戦にいるのは既に格付けが済んだ者達だ。

どんなに強かろうと私より弱ければ興味は無い。

口を突いて出そうになったその言葉は？み込んだ。

「にしたって、有珠山より臨海女子の方が見るもんあるやろ」

こちら側のブロックの高校に注目するとしても、有珠山よりも臨海女子の方が注目選手となりうるようなメンバーが沢山いる。

それに何より、因縁というか個人的な付き合いで考えれば。

「藍は絶対ネリー・ヴィルサラーゼやと思うてたわ」

「ああ、見るとか何とか言ってた気がする」

勿論見る義理はない。ので見ない。

「けど何で獅子原なんや？ たしかカムイとか雲とかゆうのは使い切ったって藍が言うてなかったか？」

「麻雀は関係ないよ」

獅子原さんは、麻雀外でも働く能力を持っている。

その力を自覚したのはいつなのか、普段はどうしているのか、何故麻雀に使おうと思っただのか。色々と話をしたのだ。

曰く。

昔から、憑きモノに助けられることがよくあったそう。やがて、その力であちこちに駆け付けて周りの人を助けるようになった。

トラブルある所に獅子原あり。

異常なまでの察しの良さや、方法や理由は不明なのにトラブルが解決する時は何故かいつも獅子原さんの影があることで、気味悪がられるようになった。

それでも普通に接してくれた友達とだから、今こうして麻雀部をやっている。

立派なことだ。人として尊敬する。

「誰かの助けに、か」

テレビには、相変わらずコメンテーター達が私を持ち上げる番組が映っていた。

熊倉トシは、モニターに映る対局を見ながら好物のカップ麺を啜る。

彼女は宮守女子麻雀部の監督もしていたが、残念ながらチームは全国大会2回戦で敗退。

そんな生徒達は、今彼女の近くにはいない。同じく敗退した姫松高校のレギュラーと、どこで知り合ったのか意気投合。今頃どこかで観戦でもしているのではないだろうか。

「熊倉さん。これ、甲信越の分です」

「ありがとう」

彼女が背後からの声を受けて振り返ると、そこにいたのは藤田靖子。長野のプロ麻雀チーム、佐久フェレッツターズに所属するプロ雀士である。

箸を止め、渡された封筒に入った資料をちらと確認する。

「どうですか、5位決定戦」

「うーん、今年は番狂わせが多いわよねえ」

臨海女子と永水女子。シード校が2校。準決勝で敗退することが既に異常事態な面々である。

今年はシードを勝ち取れなかったが、高校麻雀界の歴史の中ではシードを取っていた期間の方が長いくらいの姫松高校は準決勝に進むことすらなく、5位決定戦に参加すらしていない。

「やはり去年と同じく、辻垣内智葉は内定確定ですか」

この場に相応しくないほどのカリスマを持つ彼女は、去年の世界ジュニアの日本代表に選抜されている。

宮永照と合わせて前回出場の2枚は当然続投だろう。

「今年は荒川憩とダブル宮永がキーになる気がしてるわ」

そこに千里山の園城寺、将来性や爆発力を見て姫松の2年生——上重漫も候補に入ってくる。

他にも、清水谷竜華に江口セーラ。成績で見ると、千里山女子はほぼフルメンバーで名を連ねる。

「ただ、そうなると枠がきついですね」

人材が豊富なのは嬉しいことだが、それだけに悩ましい。成績から測れる個の力は勿論だが、世界の要注意選手に対するメタとして機能する、または逆に対策がされにくい人材であるかが、検討材料としてのウエイトを大きく占めてくるだろう。

そして何より、チームとしての戦略をどうするか。鍵となる選手を誰に据えるかで、起用方針も変わってくる。

となると、語らずにはいられない者が一人。

「小鳥谷藍。あの子がいるかいないかで、選抜の内容を大きく変えることになりますね」
思い出すのは、前年度のこと。彼女がいれば優勝もあり得ると日本中から期待されながら、世界ジュニア出場を辞退した少女。

常勝無敗のキングでありながら、どんな盤面もひっくり返すジョーカー。間違いなく戦略の要となるだろう。

個人戦で優勝した後、その圧倒的な試合内容からネットでは冗談交じりに『彼女一人いれば他は何でもいいのでは』などと他の選手に失礼な意見がSNS随所で言われていたものだが、本音を言えばプロの視点でも冗談と一笑に付すのは難しい。

千里山女子の強化合宿に特別コーチとして招聘されたり、プロアマ交流大会で彼女と戦ったことのあるプロ雀士達は、彼女の底知れない実力を同卓して肌で感じ取っている。

史上最年少でプロ八冠を達成、リオデジャネイロ東風フリースタイルで銀メダルを獲得。国内では無敗、永世七冠、元世界ランキング2位。恵比寿時代は毎年リーグMVPと、日本麻雀界歴代最強と名高い小鍛冶健夜プロ。その全盛期ですら小鳥谷には遠く及ばないというのは、誰も公で口にはしませんが界限では根強い見解だ。

小鳥谷は自分の実力の異常性を正確に自覚してはいるが、一人の選手としての価値・評価には疎い。本人が思っているよりも、実は周りの評価はもつと高いのだ。

「心配ねえ」

「今年は出てくれればいいんですが」

「そつちじゃなくて」

熊倉は完食したカップ麺の容器を机上に置く。ティッシュで口元を拭くと、続けた。

「随分と窮屈そうに麻雀を打ってるじゃない」